一級河川山国川築堤関係
埋蔵文化財調査報告　3

百留居屋敷遺跡（ひゃくどみいやしき）

福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査

1999

福岡県教育委員会

一級河川山国川築堤関係
埋蔵文化財調査報告　3

百留居屋敷遺跡

福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査

百留居屋敷遺跡全景

序

福岡県教育委員会では建設省大分工事事務所の委託を受け、平成４年度から山国川河川改修に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成５年度に発掘調査を実施した、築上郡大平村大字百留に所在する百留居屋敷遺跡の調査記録であります。当遺跡の所在する豊前地域は瀬戸内海の西端部に位置し、古くから海上交易の盛んな地として知られておりましたが、今回の調査でも弥生時代、古墳時代を中心として、他地域との交流を示す様々な成果を得ることができました。

本書に掲載されたこれらの成果が、地域の歴史研究や教育、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸甚に存じます。

発掘調査および整理作業、報告書の作成にあたりまして、地元ならびに大分工事事務所の関係者の皆様をはじめ、ご協力いただいた多くの方々に対し、深甚の謝意を表します。

平成11年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安　常喜

例　言

1. この報告書は、平成5年度に福岡県教育委員会が建設省大分工事事務所から委託を受けて実施した、一級河川山国川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第3集である。
2. 本書に掲載した遺構図は、高橋章・吉田東明・高畑由美子・村上知文・三吉キヨミ・佐山彰子が作成した。
3. 本書に掲載した遺構写真は高橋・吉田が、遺物写真は北岡伸一が撮影した。なお、空中写真についてはフォト・オオツカに委託した。
4. 出土遺物は九州歴史資料館において岩瀬正信の指導で整理・復元作業を行い、実測図は吉田が作成した。
5. 挿図の浄書は豊福弥生・原カヨ子が実施した。
6. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
7. 出土遺物・写真・図面等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化財保護課太宰府事務所において保管している。
8. 本書の執筆ならびに編集は吉田が行った。

本 文 目 次

巻頭図版
序
例言

第１章　はじめに
　１．調査の経過……1
　２．調査の組織……2

第２章　位置と環境
　１．遺跡の位置……4
　２．付近の遺跡……4

第３章　調査の内容
　１．Ａ地区……10
　２．Ｂ地区……16
　３．Ｃ地区……32
　４．Ｄ地区……35
　５．その他の遺物……58

第４章　おわりに……66

図 版 目 次

巻頭図版		百留居屋敷全景
図版１	１	百留居屋敷遺跡より八面山を望む（空中写真）
	２	百留居屋敷遺跡より中津平野を望む（空中写真）
図版２	１	Ａ地区全景（東から）
	２	Ａ地区全景（西から）
	３	１号土坑（北から）
図版３	１	ピット土器出土状態（西から）
	２	包含層土器出土状態（東から）
	３	包含層土器出土状態（西から）
図版４	１	Ｂ・Ｃ地区全景（西から）
	２	１号竪穴住居跡（空中写真）
	３	１号竪穴住居跡（北から）
図版５	１	１号竪穴住居跡土器出土状態（南から）
	２	１号竪穴住居跡土器出土状態（南から）
	３	１号竪穴住居跡土器出土状態（南から）
図版６	１	２号暗渠（南から）
	２	Ｃ地区全景（東から）
	３	Ｃ地区西半部（東から）
図版７	１	Ｄ地区全景（空中写真）
	２	Ｄ地区全景（空中写真）
図版８	１	２号竪穴住居跡（北から）
	２	２号竪穴住居跡カマド（北から）
	３	２号竪穴住居跡権出土状態（北から）
図版９	１	３号竪穴住居跡（南から）
	２	４号竪穴住居跡（北から）
	３	５号竪穴住居跡（南から）
図版10	１	６号竪穴住居跡（南から）
	２	６号竪穴住居跡遺物出土状態（南から）
	３	４号竪穴（西から）
図版11	１	４号竪穴遺物出土状態（西から）
	２	５号竪穴（北から）
	３	５号竪穴遺物出土状態（北から）
図版12	１	７号竪穴（西から）
	２	11号土坑（北から）
	３	１号小竪穴式石室（南から）
図版13	１	２号小竪穴式石室（北から）
	２	２号小竪穴式石室（礫除去後、北から）
	３	１号壺棺墓（南から）
図版14		Ａ・Ｂ地区出土土器
図版15		Ｂ地区出土土器
図版16		Ｃ・Ｄ地区出土土器
図版17		Ｄ地区出土土器①

図版18　D地区出土土器②
図版19　D地区出土土器③
図版20　縄文晩期・弥生早期土器
図版21　土製品・石製品
図版22　金属製品

挿図目次

第1図　大平村位置図……4
第2図　周辺遺跡分布図（1/50,000）……5
第3図　唐原焼窯跡採集品実測図（1/2、2/3）……7
第4図　百留居屋敷遺跡調査区位置図（1/2,000）……10
第5図　A地区遺構配置図（1/300）……11
第6図　1号土坑実測図（1/20）……12
第7図　1号土坑出土土器実測図（1/3）……12
第8図　2～6号土坑実測図（1/40）……13
第9図　A地区ピット出土土器実測図（1/3）……14
第10図　A地区包含層出土土器実測図（1/3）……15
第11図　B地区遺構配置図（1/300）……17
第12図　1号竪穴住居跡実測図（1/60）……18
第13図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……19
第14図　7・8号土坑実測図（1/40）……20
第15図　7号土坑出土土器実測図（1/3）……20
第16図　1号暗渠実測図（1/60）……21
第17図　2号暗渠実測図（1/60）……22
第18図　1・2号暗渠出土土器実測図（1/3）……23
第19図　1～7号溝断面実測図（1/40）……23
第20図　B地区溝出土土器実測図（1/3）……24
第21図　B地区ピット出土土器実測図（1/3）……25
第22図　B地区包含層出土土器実測図①（1/3）……26
第23図　B地区包含層出土土器実測図②（1/3）……28
第24図　B地区包含層出土土器実測図③（1/3）……29
第25図　B地区包含層出土土器実測図④（1/3）……30
第26図　C地区遺構配置図（1/300）……31
第27図　1・2号竪穴実測図（1/60）……32
第28図　9・10号土坑実測図（1/40）……33
第29図　1号石列実測図（1/60）……34
第30図　8～10号溝断面実測図（1/40）……34
第31図　C地区包含層出土土器実測図（1/3）……35
第32図　D地区遺構配置図（1/300）……36
第33図　2・3号竪穴住居跡実測図（1/60）……37
第34図　2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……38
第35図　4・5号竪穴住居跡実測図（1/60）……39

第36図　4号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3、1/6）……40
第37図　6号竪穴住居跡実測図（1/60）……41
第38図　3号竪穴実測図（1/60）……41
第39図　3号竪穴出土土器実測図（1/3）……42
第40図　4・5号竪穴実測図（1/60）……43
第41図　4号竪穴出土土器実測図（1/3、1/6）……44
第42図　5号竪穴出土土器実測図（1/3）……45
第43図　6・7号竪穴実測図（1/60）……46
第44図　6号竪穴出土土器実測図①（1/3）……47
第45図　6号竪穴出土土器実測図②（1/3）……48
第46図　11号土坑実測図（1/30）……50
第47図　D地区土坑出土土器実測図（1/3）……50
第48図　12～15号土坑実測図（1/40）……51
第49図　16～19号土坑実測図（1/40）……52
第50図　11～14号溝断面実測図（1/40）……54
第51図　1号小竪穴式石室実測図（1/30）……54
第52図　1号小竪穴式石室出土土器実測図（1/3）……55
第53図　2号小竪穴式石室実測図（1/30）……55
第54図　1号壺棺墓実測図（1/20）……56
第55図　1号壺棺実測図（1/6）……56
第56図　D地区ピット出土土器実測図（1/3）……57
第57図　その他の土器実測図（1/3）……58
第58図　縄文晩期・弥生早期土器実測図①（1/3）……59
第59図　縄文晩期・弥生早期土器実測図②（1/3）……60
第60図　土製品実測図（2/3、1/2）……62
第61図　石製品実測図（2/3、1/2）……63
第62図　金属製品実測図（1/2）……64

表　目　次

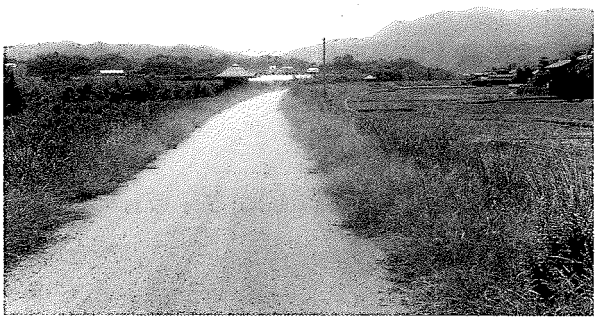
第1表　山国川築堤関係遺跡一覧
第2表　縄文晩期・弥生早期土器観察表
第3表　土製品・石製品・金属製品観察表
第4表　新旧番号対応表

第1章　はじめに

1　調査の経過

山国川河川改修工事に係る文化財の取り扱いについては、平成3年度に建設省九州地方建設局大分工事事務所から協議があり、平成3年4月24日に現地踏査による分布調査が実施された。この結果、ほぼ全区間に埋蔵文化財包蔵地の存在することが予測された。

平成4年3月2日に、大分工事事務所と文化課とで山国川河川改修に係る埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った際、百留地区築堤工事に関しては平成5年に工事が予定されており、百留地区および恒久橋地区の試掘調査を平成4年度の8月以降に実施してほしいとの依頼があった。



築堤後の百留居屋敷遺跡

この依頼を受け、平成4年11月16日～11月21日にかけて、百留地区の試掘調査を実施した。約30,000㎡の広さの調査対象地に、重機を用いて計36本のトレンチを設定したが、その結果、ほとんど全てのトレンチで遺物が確認され、また5ヶ所のトレンチで遺構が確認された。地形等の諸状況も含め、山国川河原に近い対象地東側には遺構は存在せず、自然堤防上にあたる西側約12,000㎡において遺構が存在するとの判断を得、工事前に発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずる必要がある旨を大分工事事務所に報告した。

発掘調査は大分工事事務所との協議の上、平成5年5月13日より調査を開始した。遺跡名については、「百留地区遺跡」と仮称した。調査区全体を便宜上A～Dの4地区に区画した上で、8月より着工予定の樋管設置箇所を含めたA・B両地区を優先して調査することとした。

途中、恒久橋地区のボックス設置箇所を優先して調査する必要が生じたため、7月16日からは両

遺跡名	調査年度	調査面積	調査担当	備考
上唐原稲本屋敷遺跡	平成4年度	5,500㎡	小池　史哲	第1集
下唐原宮園遺跡	平成5年度	3,300㎡	高橋　章・吉田　東明	第2集
百留居屋敷遺跡	平成5年度	12,000㎡	高橋　章・吉田　東明	
上唐原了清遺跡Ⅰ	平成6年度	3,600㎡	池辺　元明・秦　憲二	
上唐原了清遺跡Ⅱ	平成7年度	4,620㎡	木下　修・吉村　靖徳	
上唐原了清遺跡Ⅲ	平成8年度	8,000㎡	木下　修・吉村　靖徳	

第1表　山国川築堤関係遺跡一覧

地区を並行して調査を行わざるを得ない状況となった。また７・８月は例年にない長雨で、調査は遅々として進行しなかったが、平成６年２月に全区域の調査を無事終了する事が出来た。
出土した遺物は文化課椎田事務所において仮保管していたが、九州歴史資料館に移動した後、平成10年度に水洗・復元作業を実施した。また、並行して遺構写真・図面等も文化課太宰府事務所において整理作業を実施した。遺跡名については、報告書作成時に他遺跡との関連も考慮し、「百留居屋敷遺跡」と改称して報告することとした。尚、報告書作成終了後、出土遺物・図面写真等の記録類は、文化課太宰府事務所および九州歴史資料館において保管する。

2　調査の組織

平成５年度の調査関係者および平成10年度の整理関係者は下記の通りである。

建設省大分工事事務所

	平成５年度	**平成10年度**
所長	辻　英夫	中村　稔
副所長（河川）	野上　昭治	小野　道春
調査第一課長	吉岡　寿治	河野　忠彰
同計画係長	三浦　一浩	廣松　洋一
同主任	加藤　光男	房前　和朋
中津出張所長	橋村　和敏	石田　隆二
同事務係長	山本　和男	田代　節子
同技術係長	大野　治一	松木　仁

福岡県教育委員会（平成10年度より教育庁総務部文化財保護課）

総括	**平成５年度**	**平成10年度**
教育長	光安　常喜	光安　常喜
教育次長	樋口　修資	藤吉純一郎
総務部長		富永　　勲
指導第二部長	丸林　茂夫	
文化課長	森山　良一	
文化財保護課長		石松　好雄
参事兼文化財保護室長	柳田　康雄	
参事		柳田　康雄
課長補佐	清水　圭輔	
課長補佐兼管理係長		角　　伸幸
参事補佐兼室長補佐	井上　裕弘	
参事兼課長技術補佐		井上　裕弘
調査班総括	橋口　達也	
調査第一係長		橋口　達也
調査第二係長		佐々木隆彦

庶務

管理係長	毛屋　信	
事務主査	富田　浩一	鶴我　哲夫
主任主事	久保　正志	田中　利幸

調査・報告

参事補佐	高橋　章（調査）	中間　研志
主任技師		吉田　東明（報告）
技師	吉田　東明（調査）	
整理指導員		岩瀬　正信（復元）
		平田　春美（土器実測）
		豊福　弥生（トレース）

発掘調査には、作業員として下記の方々の参加があった。

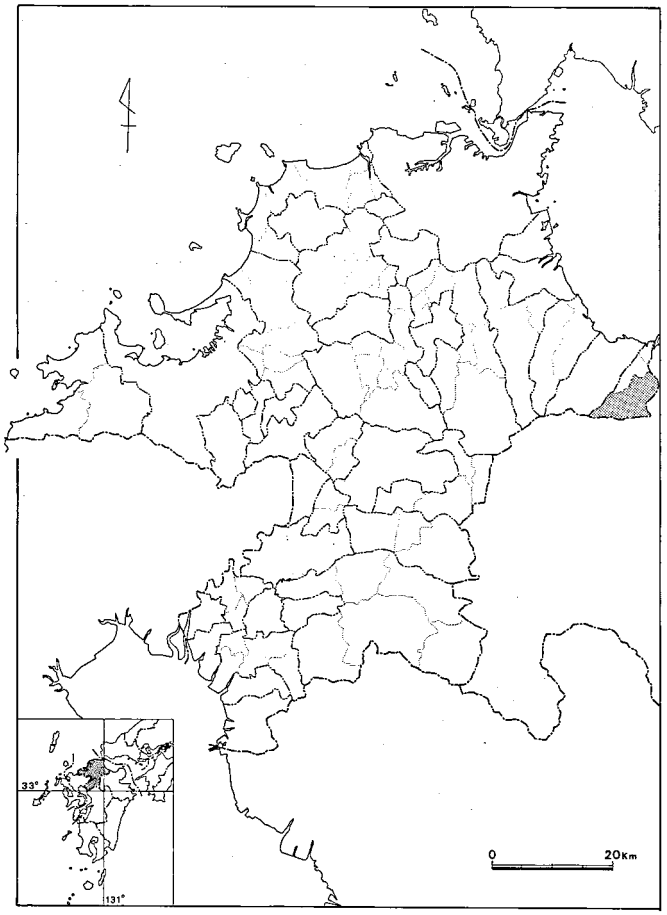
百留　千代子	笹原　昭子	中野　笑子	山本　睦子
村口　フサ子	西尾　ミツ子	坪根　春子	次郎丸ヨシ子
坪根　百代	重吉　秀子	久保　一子	噌西　操
重吉　恵子	北明　年枝	恵良　美恵子	村上　知文
金山　幸子	金山　定子	榎垣　弥生	高畑　由美子
道免　アサノ	道免　文子	田井　トキエ	野間口　国見
野間口　久子	渡辺　靖	松本　アイ子	東　和子
東　ミサ子	田井中ヒデ子	竹田　シゲ子	

調査の実施にあたっては、建設省大分工事事務所中津出張所、工事施工業者の二豊土建株式会社、久良木建設、福島建設、フォト・オオツカの協力を得た。また、調査中には、県文化財保護指導委員宮本工氏、大分県教育委員会村上久和氏、中津市教育委員会栗焼憲児氏（現豊前市教育委員会）、三光村教育委員会植田（平田）由美氏、福岡県教育庁京築教育事務所飛野博文氏（現北筑後教育事務所）、福岡県教育委員会池辺元明氏（現福岡教育事務所）、同杉原敏之氏（現九州歴史資料館）、末永浩一氏（現大平村教育委員会）、宮崎亮一氏（現太宰府市教育委員会）、ほか豊前市・椎田町・大平村・京築教育事務所の方々から多くの助言・協力を得た。記して感謝の意を表します。

第２章　位置と環境

１　遺跡の位置

百留居屋敷（HYAKUDOMI-IYASHIKI）遺跡は、福岡県築上郡大平村大字百留95～110・114～117・125～133・140・141番地および大字上唐原313～319・325番地に所在する。



第１図　大平村位置図

当遺跡の所在する百留地区は大平村の東端に位置し、東は一級河川山国川を挟んで大分県三光村に、南は荒平地区に、西は小山田地区に、北は上唐原地区に接する農村地区である。集落は、山国川の氾濫・沖積作用によって形成された自然堤防上に帯状に営まれており、ひと昔前の農村風景さながらの景観が、その姿を留めている。その集落の中央を、大分県本耶馬渓町から新吉富村を通って豊前市へと通じる県道が、山国川とほぼ並行して走っている。百留地区の西側には、同じく山国川の氾濫作用により形成された河岸段丘が続いている。その段丘上には池田池と呼ばれる比較的大きなため池があり、付近の水田へと水を供給し続けている。その段丘上面と後背湿地である水田面との比高差は20ｍ程あり、崖面を形成している。一説によると、「百留」は元来「モモトメ」と読んでいたらしく、この中の「モモ」とは「ママ」と同義語であり、「崖」を意味する。「百留」の地名はこれに由来するという。(1)

２　付近の遺跡

百留横穴墓群（百留百穴）

百留地区西側の段丘崖面に位置し、現在46基の横穴墓が確認されている。付近には大字上唐原所在の上唐原横穴墓群、大字原井所在の荒平横穴墓群、一般国道10号豊前バイパス建設に伴って発掘調査された金居塚遺跡(2)の横穴墓群、対岸の三光村に所在し、一般国道10号中津バイパス建設に伴って80基が発掘調査され、脚光を浴びた上ノ原横穴墓群(3)等、数多くの横穴墓群が密集し、広く知られている。この百留横穴墓群の内、３基の横穴墓で彩色画が確認されて

百留横穴墓群

1. 上唐原稲元屋敷遺跡　2. 下唐原宮園遺跡　3. 上唐原了清遺跡　**4. 百留居屋敷遺跡**　5. 百留横穴群　6. 唐原焼窯跡
7. 穴ヶ葉山古墳　8. 能満寺古墳　9. 郷ヶ原遺跡　10. 上唐原遺跡　11. 城横穴群　12. 幣旗邸古墳　13. 上ノ原古墳群
14. 勘助野地遺跡　15. 長者屋敷遺跡　16. 鈴熊山古墳　17. 楡生山古墳　18. 大ノ瀬下大坪遺跡　19. 池ノ口遺跡　20. 友枝瓦窯跡

第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

いる。１号横穴墓は同心円文、木葉文、入口周辺の縁取り、２・３号横穴墓には入口周辺の縁取りがそれぞれ赤・黄色の顔料で描かれている。同村大字下唐原字桑野原に所在する穴ヶ葉山１・３号墳、同穴ヶ葉山南３号墳は、いづれも線刻による壁画が施された古墳として著名であるが、百留１号横穴同様モチーフとして木葉が採用されている。また隣村の新吉富村大字安曇字テルヒに所在する山田１号墳でもやはり線刻による木葉が描かれている。この地域で共通するモチーフとして描かれる木葉の意味、あるいは共通のモチーフとして木葉を用いる集団内での、彩色と線刻という装飾方法の差異など、興味深い問題を提示している。

百留横穴墓群

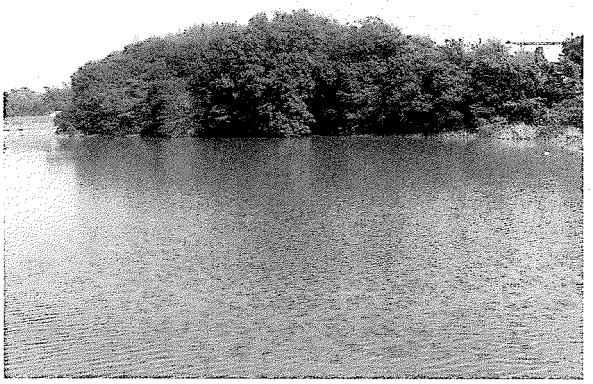
この百留横穴墓群は今のところ組織的な発掘調査等は行われていない。退色・崩壊のおそれもあり、早急な処置が望まれるところである。村指定文化財。

百富城

天正八年（1580）、反大友勢力の野仲鎮兼方であった百富河内守兼貞（下毛郡三光村土田城主）が、上毛郡志摩村（今の百留付近とされている）の代金城を攻め、代金信濃守を討ち百富城を築いたという。（『築上郡志』『耶馬渓町史』）その後、元和元年（1615）に幕府が一国一城令を出した際、この百富城も取り壊されたものと思われる。百富城の位置等に関する記録は残っておらず、一応今の百留地区に比定されている。今回の百留居屋敷遺跡の発掘調査に際して、当該期の関連遺構の存在も予想されたが、それらしき遺構は確認されなかった。

唐原焼窯跡

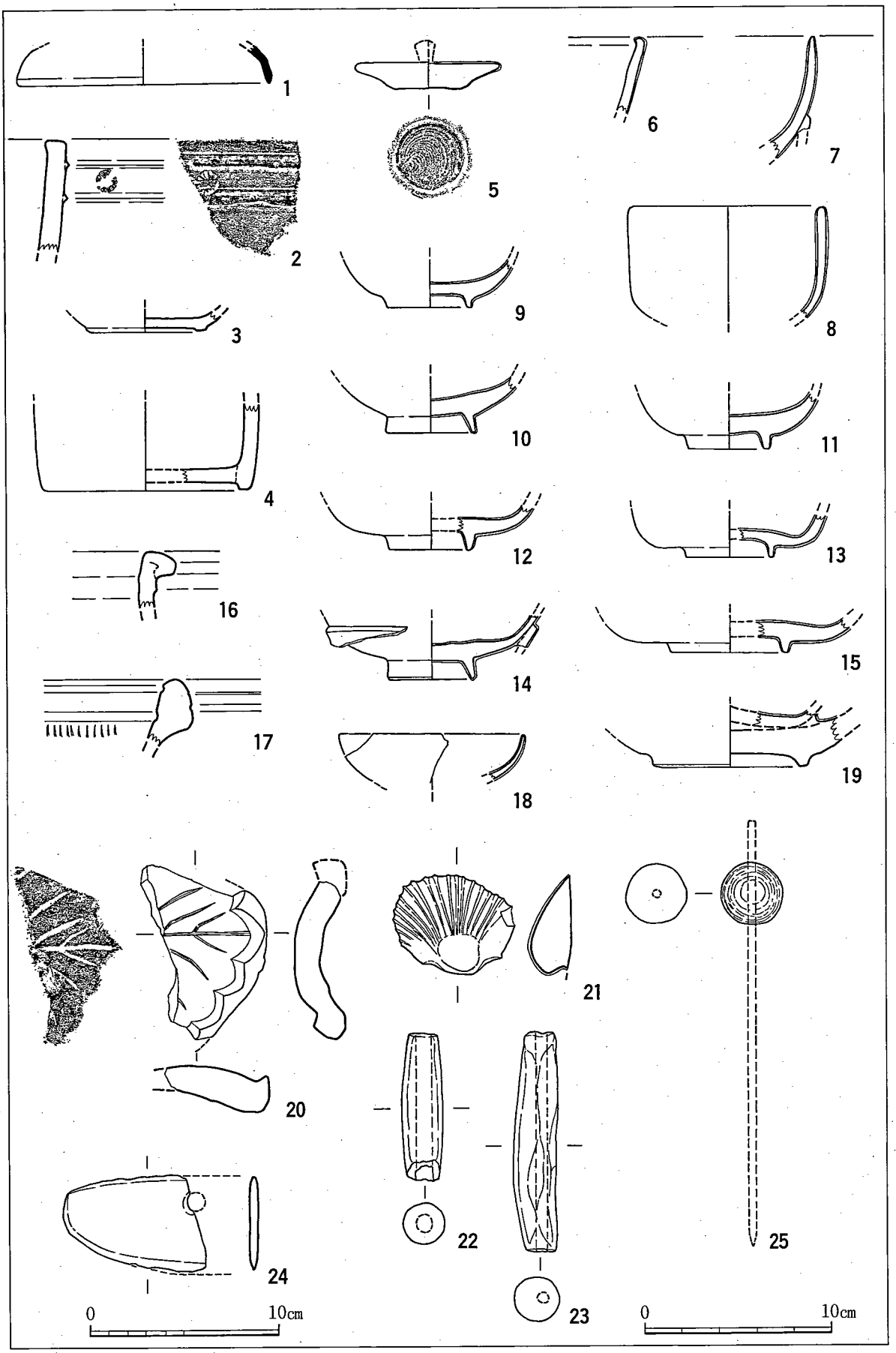
大字上唐原の通称ランポ池の北東岸に所在する。存在は早くから知られていたが、組織的な調査等は行われていない。福岡県文化財保護指導委員の宮本　工氏を中心に遺物採集が行われており、現在大平村教育委員会に保管されている。唐原焼は所在位置から、文禄・慶長の役に出陣した黒田長政が、朝鮮より陶工を連れ帰り開窯させた「高取焼」、あるいは細川氏が開窯させた「上野焼」いづれかの元になる可能性も指摘されていた。今回採集資料を掲載する機会を得たので、ここにその一部を紹介する。



唐原焼窯跡遠景

唐原焼窯跡採集遺物（第３図）

須恵器坏蓋（１）　口縁部破片で、内外面回転ナデ調整を行う。胎土に細砂を若干含む。口径13.4cm。



第３図　唐原焼窯跡採集品実測図（１～９・20・24：1/2、21～23・25：2/3）

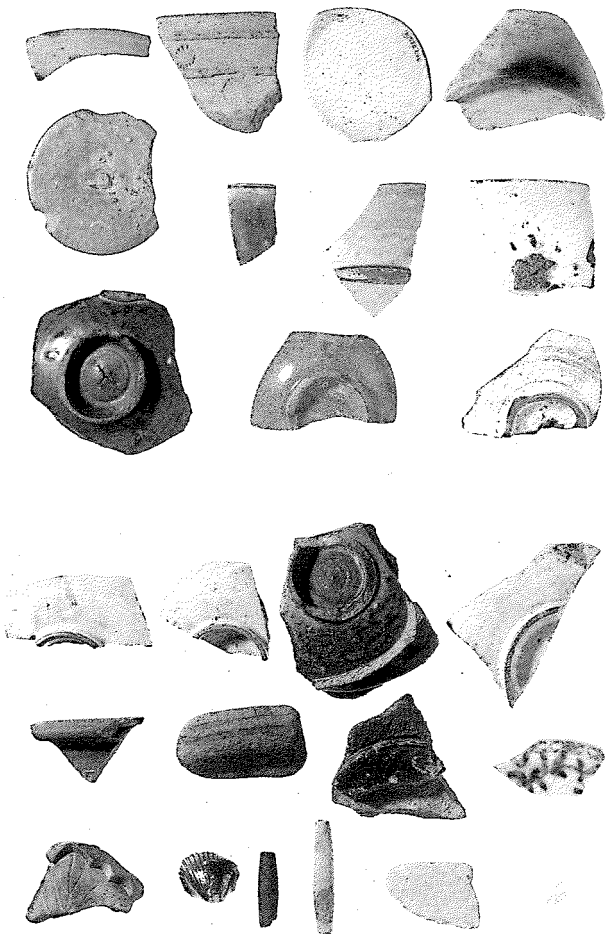
土師質火鉢（2）　直立する口縁部片で、外面に断面三角形の小さな凸帯をナデによってつまみ出し、その間に菊花状の印刻文を押捺する。内外面ナデ調整を行う。胎土に石英・長石・角閃石を若干含み、明茶色を呈す。

土師質皿（3）　低平な高台を削り出した後、内外面回転ナデ調整で仕上げている。高台径6.2cm。胎土は砂粒を一切含まず、非常に精良で、肌色に焼成される。

土師質壺（4）　底部破片で全体の形状を知り得ないが、一応壺として紹介する。高台径10.8cm。低い高台を削り出した後、内外面回転ナデ調整で仕上げる。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、肌茶色に焼成される。

陶器蓋（5）　つまみの部分を欠く。底面糸切り。上面および側面上方に施釉され、釉は深緑色に発色する。胎土は灰色を呈し、黒色粒を若干含む。

陶器椀（6～14）　6は口縁端部を内側につまみ出す。釉は藁灰釉で端部内面および外面に施釉され、深緑色に発色する。胎土は灰色を呈し、黒色粒を若干含む。7は直立する口縁部で、端部は尖る。釉は藁灰釉で全面に施釉され、内面緑灰色、外面灰色に発色する。胎土は灰色を呈し、黒色粒を若干含む。8は直立する口縁部で、端部は丸い。釉は藁灰釉で、端部のみ露胎となる以外は全面に施釉され、内面暗灰白色に、外面明灰白色に発色する。胎土は灰色を呈し、黒色粒を若干含む。9は高台畳付が露胎となる以外は全面施釉される。釉は灰釉でつやのある深緑色に発色し、胎土は黒灰色～灰色を呈す。10は細くて比較的高い高台が付く。釉は鉄釉で全面に施釉され、茶褐色に発色する。胎土は黒灰色を呈す。11は高台畳付が露胎となる以外は全面施釉される。釉は藁灰釉で内面暗緑白色、外面白色に発色し、胎土は灰色～茶褐色を呈す。12も高台畳付が露胎となる以外は全面施釉され、釉は藁灰釉で灰白色に発色する。胎土は灰色を呈し、黒色粒を若干含む。13もやはり畳付以外全面施釉される。釉は藁灰釉で青緑白色に発色する。胎土は灰色を呈し、黒色粒を若干含む。14は10の高台部と内面見込みで接合し、10とほぼ同一の器形となる。外面には重ね焼きの際に接した下部の陶器の口縁部が融着する。内面見込みに白色の剥離薬を輪状に塗布し、重ね焼きの際の融着を防止する試みがなされているが、上にのせた高台の位置がずれていたため結果的には失敗している。10と同様の鉄釉で、茶褐色に発色する。



唐原焼窯跡採集品

胎土は黒灰色を呈す。

陶器皿（15）　高台畳付のみ露胎で、それ以外は全面施釉している。釉は藁灰釉で薄緑白色に発色する。胎土は灰色を呈し、黒色粒を若干含む。

陶器甕（16）　口縁部を外側に折り曲げて、断面三角形に仕上げる。全面つやのない茶褐色で、胎土は灰色を呈す。

陶器擂鉢（17）　大きな玉縁状の口縁部で、内外面にそれぞれ二条の沈線を巡らす。器表はつやのない褐色で、胎土は細砂を若干含み、茶褐色を呈す。全体的にかなりローリングを受ける。

磁器染付小椀（18）　内面は無文、外面の口縁部付近には三重X字の連続文を、その下には草花文を配置する。

窯道具（19）　通称ハマと呼ばれる焼き台であり、上面には陶器皿が融着している。この皿の釉は藁灰釉で、群青色～深緑色に発色する。胎土は黒灰色を呈す。

皿型枠（20）　木葉をあしらった土製の型枠で、表面は丁寧なナデの後にヘラによる葉脈の線刻を、裏面は指ナデ調整を行う。胎土は細砂を若干含むが比較的精良である。

貝目（21）　通常はシジミが使用されるため、シジミ目とも称されるが、これにはアカガイが使用されている。海に近いという地理的条件の所産である。表面には流れ落ちた鉄釉が全面に付着しており、つやのある茶褐色に発色する。長軸3.2cm、重さ8.0ｇ。

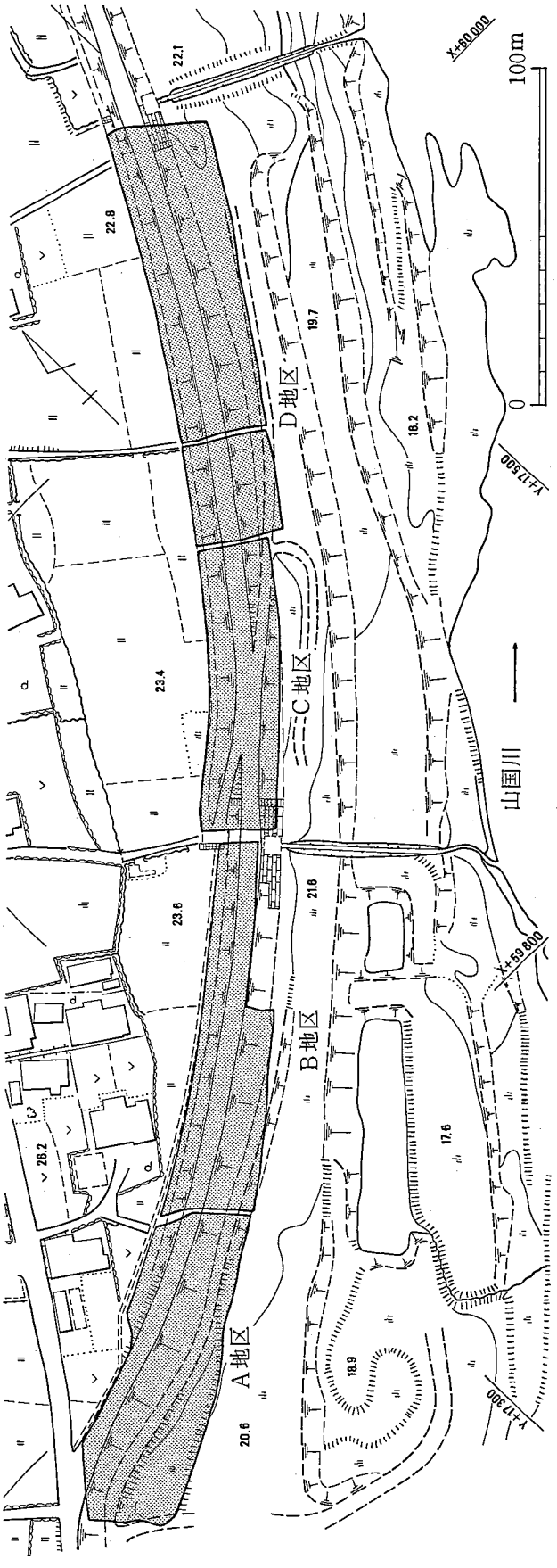
管状土錘（22・23）　22は一方を欠いている。胎土は微砂を若干含み、黒色を呈す。長さ3.9cm、径1.0cm、孔径0.4cm。重さ4.3ｇ。23は成形の際の指ナデによる不明瞭な稜が認められる。胎土は微砂を若干含み、茶灰色を呈す。長さ6.8cm、径1.2cm、孔径0.3cm。重さ8.1ｇ。

石包丁（24）　小型の磨製石包丁で、凝灰質頁岩製。表面はかなり風化する。長軸5.0cm、厚さ0.35cm、重さ10.0ｇ。

簪（25）　貝製の簪で、軸部を損失する。玉部表面はかなり風化しており、元来の色調を失い白濁色を呈す。径1.6cm、孔径0.2cm。重さ5.3ｇ。

採集資料であり、開窯時期・系統を含めた総合的な判断は差し控えるべきだが、今回提示した資料から判断する限りでは、おおよそ18世紀後半～19世紀前半に位置づけられるようであり、高取焼あるいは上野焼に先行すると考えることは出来ない。これら陶器のほかに、ハマに付着した磁器片も採集されており、磁器も同時に生産されているようである。また陶磁器の他、弥生・古墳時代の遺物が若干採集されており、付近に当該時期の遺跡の存在を予想させる。

註１　地理的環境については、大平村誌編集委員会『大平村誌』1986　によるところが多い。
　２　福岡県教育委員会『金居塚遺跡Ⅰ』豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第４集
　３　大分県教育委員会『上ノ原横穴墓群』中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（２）



第4図　百留居屋敷遺跡調査区位置図（1/2,000）

第3章　調査の内容

百留居屋敷遺跡の調査区内には、現在使用されている生活道路、排水などがあり、調査に際してもこれらを確保しておく必要があった。したがって、これらを除いた区域を調査区域とした。また、便宜上調査区をA～Dの4つの地区として設定し、それぞれA地区～D地区と呼称することにした。以下では各々の地区について説明を行う。

1　A地区

A地区は百留居屋敷遺跡の南端に位置する。調査面積は約1,400㎡。標高は南端で22.1m、西端で22.4m、東端で22.3m、北端で22.3mを測り、西から南東へと緩やかに傾斜している。遺構面には拳～人頭大の円礫層が広く露出しており（破線で囲まれた部分）、その上面からは遺構は検出されなかった。遺構はA地区南西側に認められる、比較的安定した暗黄褐色微砂層上面からのみ確認された。

検出した遺構は、土坑6基・不整形遺構・ピット等である。

百留居屋敷遺跡全景

土坑

1号土坑（図版2、第6図）

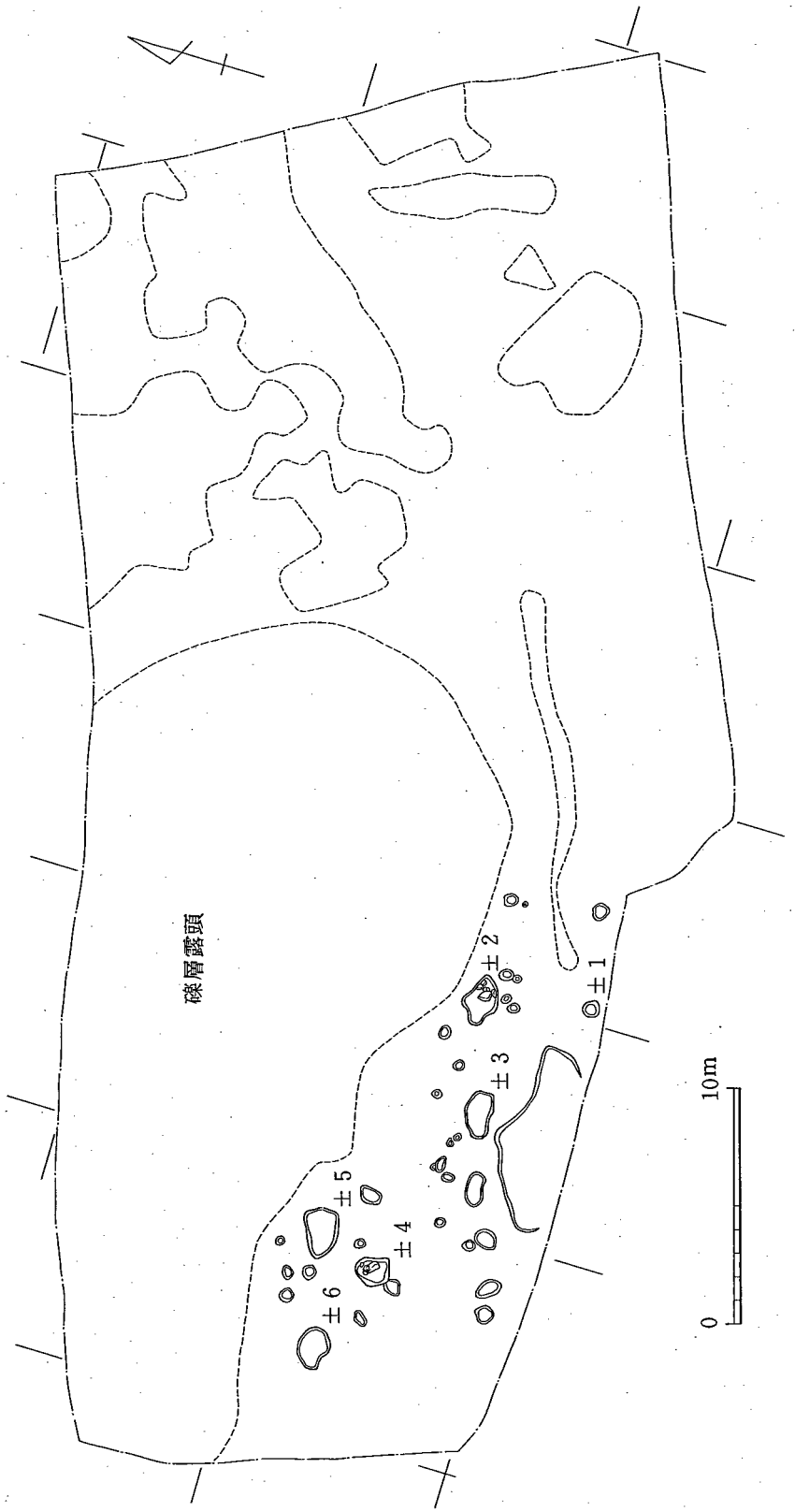
調査区の南端で検出した。平面形態は直径65㎝、深さ20㎝前後の円形プランの土坑で、底面はほぼ水平である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。精査前から甕の胴部片が散乱していたので、遺構の存在は容易に推察できた。甕は土坑のほぼ中央に水平に設置されており、底部は現位置を留めているが、上半部は大きく削平されている。近世前期の家屋に伴う、いわゆる便所遺構の類であろうか。

出土土器（図版14、第7図）

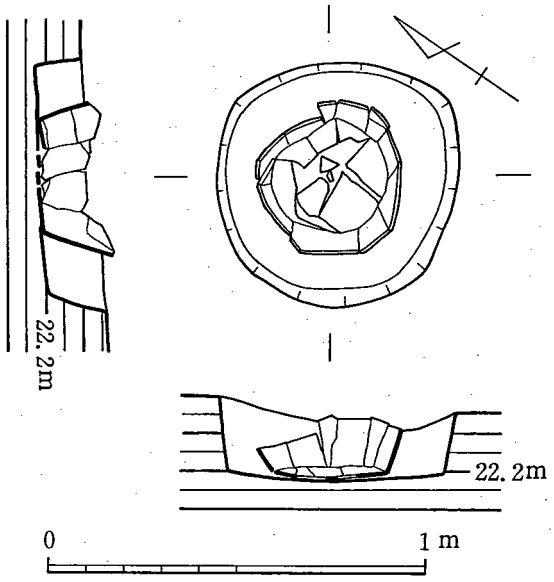
瓦質甕（1）　口縁部は断面三角形に仕上げる。胴部から底部へは緩やかにすぼまり、底部には低い高台を貼付する。胴部外面は縦方向のナデ調整、内面は器表が風化し剥落している。胎土に角閃石を若干含み、内面灰色、外面黒色に焼成される。

2号土坑（第8図）

調査区の南側で検出した。平面形態は長軸210㎝、短軸150㎝の不整形プランで、深さは25㎝を測る。底面は中央が僅かに窪むが、ほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。土坑内北側の底面に接して円礫が



第5図　A地区遺構配置図（1/300）



第6図　1号土坑実測図（1/20）

いくつかかたまって検出されたが、どのような目的で設置されたものか、あるいは埋没過程で流入したものなのかは不明。遺物は出土しなかった。

3号土坑（第8図）

調査区の南側で検出した。平面形態は長軸200cm、短軸120cmの不整楕円形プランで、深さは25cmを測る。底面はほぼ水平で、壁は垂直に近い立ち上がりとなる。遺物は出土しなかった。

4号土坑（第8図）

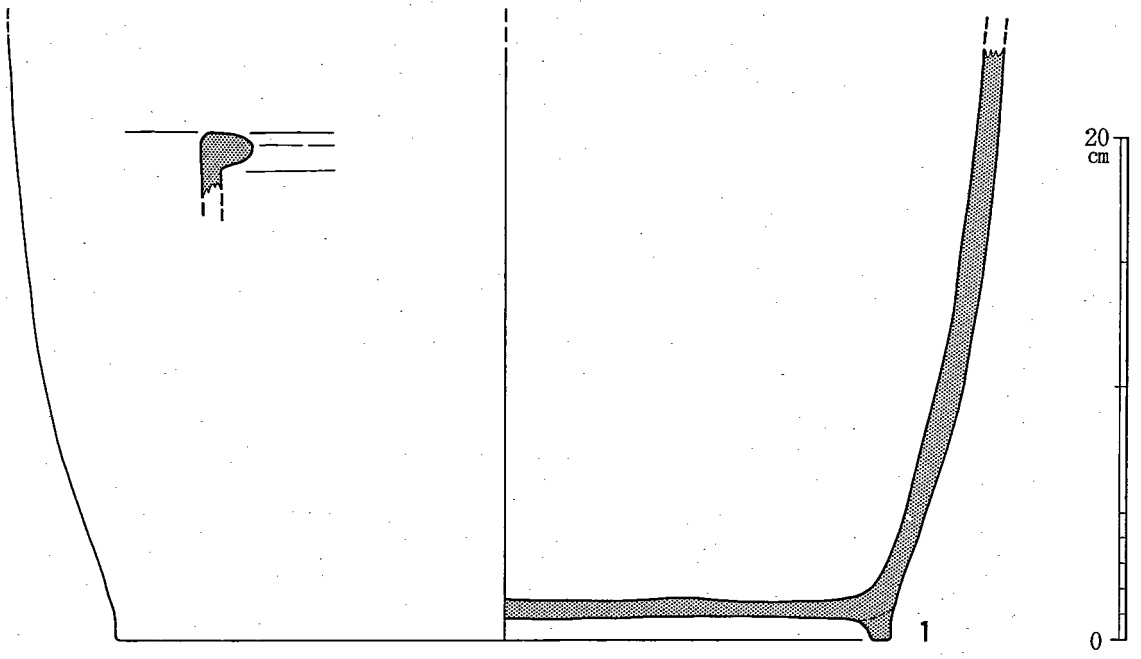
調査区の南西側で検出した。平面形態は長軸150cm、短軸120cmの楕円形プランで、深さは30cmを測る。底面はほぼ水平。底面に接して円礫がいくつかかたまって検出されたが、用途は不明。遺物は出土しなかった。

5号土坑（第8図）

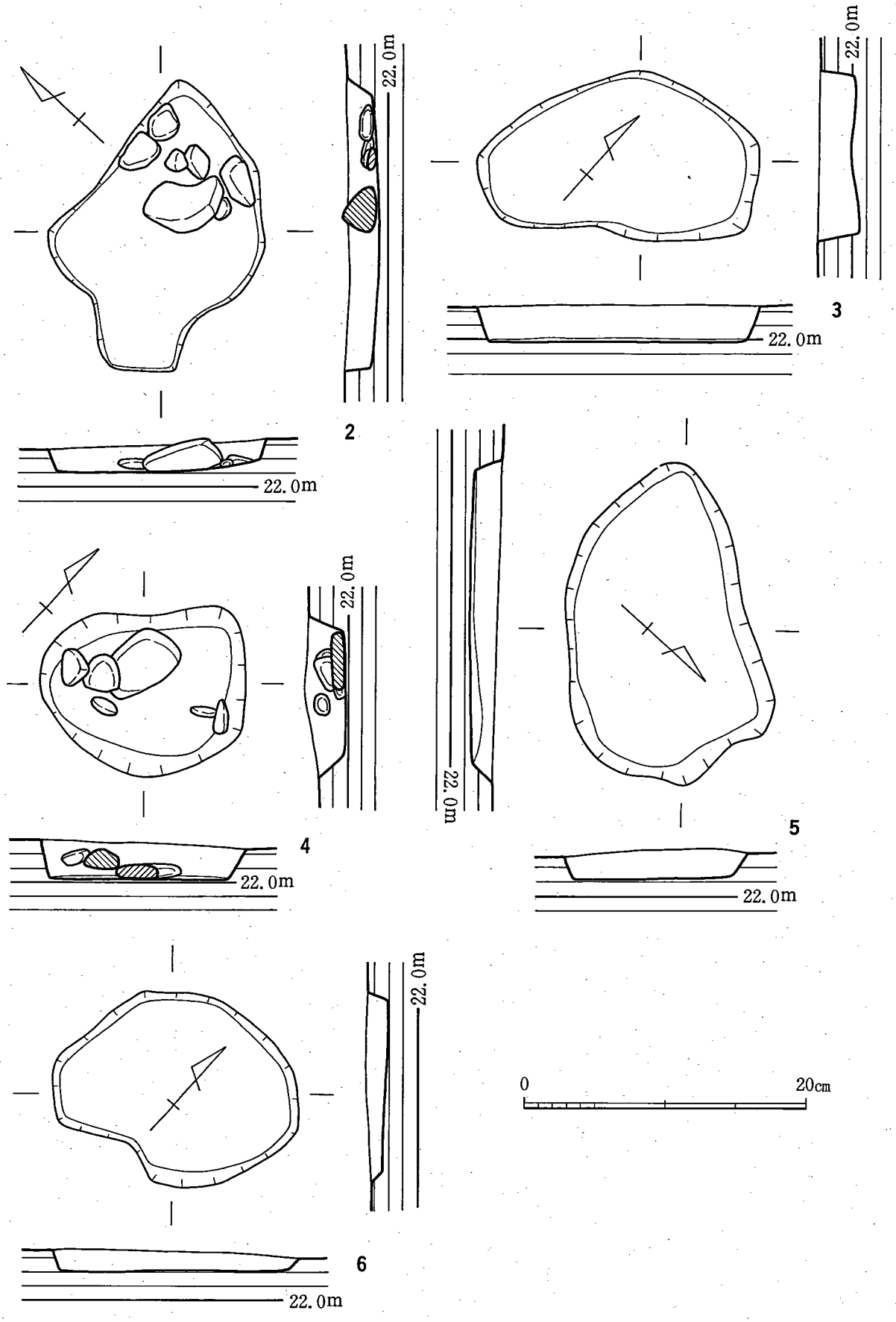
調査区の南西側で検出した。平面形態は長軸230cm、短軸140cmの不整楕円形プランで、深さは20cmを測る。底面はほぼ水平だが北端がやや高くなる。壁は急な立ち上がりとなる。遺物は出土しなかった。

6号土坑（第8図）

調査区の南西側で検出した。平面形態は長軸170cm、短軸140cmの不整楕円形プランで、深さは東



第7図　1号土坑出土土器実測図（1/3）

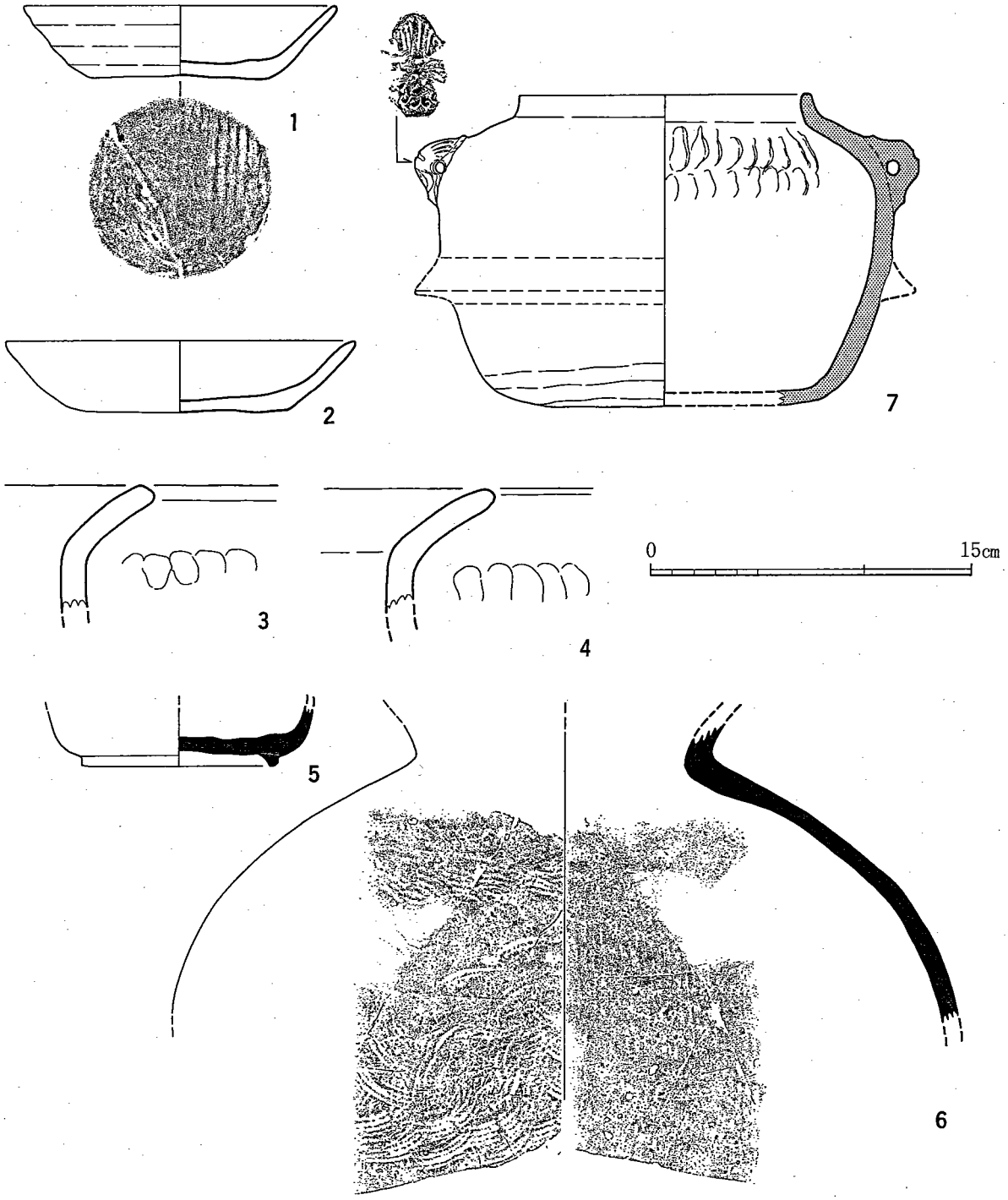


第8図　2～6号土坑実測図（1/40）

側で10cm、西側で15cmを測り、底面は南から北へと若干傾斜している。壁はやや急な立ち上がりとなる。遺物は出土しなかった。

A地区ピット出土土器（図版14、第9図）

土師器坏（1・2）　1・2はともに体部が直線的に開く坏である。1は口径14.6cm、器高3.4cm。底部に板状圧痕が認められる。胎土に微砂を若干含み、肌灰色を呈す。2は口径16.4cm、器高3.3cmで、底部はヘラケズリ調整を行う。胎土に微砂を若干含み、肌灰白色を呈す。



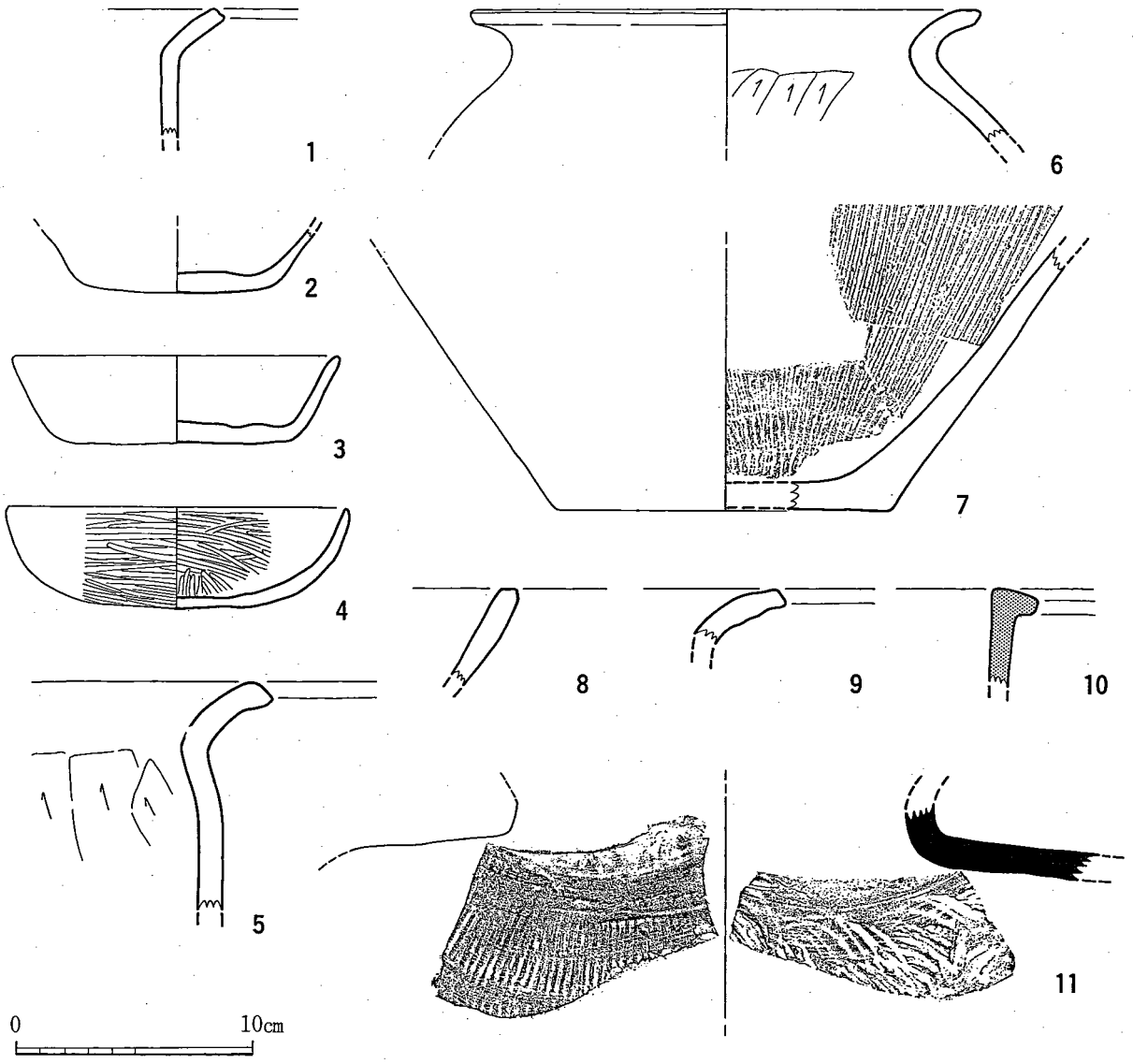
第9図　A地区ピット出土土器実測図（1/3）

土師器甕（3・4）　いずれも口縁部が直線的に外方へ長く伸びる甕で、口縁部は横ナデ、胴部内面はヘラケズリ調整を行い、屈曲部外面には指圧痕が認められる。胎土に粗砂・細砂を多く含み、明茶色を呈す。

土師器坏（5）　底部に高台が付くもので、高台はやや低く、内寄りに付される。

須恵器甕（6）　細片資料で傾き・径に不安を覚える。内面同心円当て具、外面格子目タタキ調整を行う。胎土は比較的精良。

瓦質茶釜（7）　肩部に一対の有孔把手がつく。この把手にはヘラによる文様が施されている。胴部に貼付された鍔は完全に剥離しており、痕跡のみ残っている。口縁部および胴部上半はナデ、肩部内面は指オサエ、底部付近はヘラケズリ調整を行う。胎土に微砂・細砂を若干含み、土師器に近い焼成である。



第10図　A地区包含層出土土器実測図（1/3）

A地区包含層出土土器（図版14、第10図）

土師器甕（1）　直立する胴部から、外側に直線的に伸びる。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ調整を行う。胎土に角閃石を若干含み、黄茶色を呈す。

土師器坏（2・3）　2は不安定な底部のもので、体部は外反しながら伸びる。底部は回転ヘラケズリ。3は体部が直線的に伸びるもので、底部は回転ヘラケズリ。口径14.0cm、器高3.7cm。

土師器椀（4）　口縁部が直立する椀で、内外面ヘラミガキ調整を行う。口径14.4cm、器高4.3cm。胎土に細砂を若干含み、茶色を呈す。

土師器甕（5・6）　5は頚部があまり締まらない甕で、口縁部は横ナデ、胴部内面は縦ヘラケズリ、外面はナデ調整を行う。胎土に角閃石を多く含み、赤茶色を呈す。6は頚部が強く締まった甕で、頚部が肥厚する。口縁部は横ナデ、胴部内面は縦ヘラケズリ、外面はナデ調整を行う。胎土に微砂・細砂を若干含み、赤茶色を呈す。

土師質擂鉢（7）　平坦な底部から、直線的に開いて伸びる体部へと続く。内面はナデ後櫛目、外面は回転ナデ調整を行う。胎土に微砂・細砂を若干含み、赤褐色を呈す。

土師質土鍋（8・9）　8はやや内湾する口縁部で、端部上面を平坦に仕上げる。胎土に微砂を多く含み、黒色を呈す。9は外反する口縁部で、横ナデの際の凸凹が顕著である。端部はシャープに仕上げられる。胎土に角閃石を若干含み、黄灰色を呈す。

瓦質甕（10）　口縁端部を外側に折り曲げ、断面三角形に近い形状をなす。肩部は張らず、直線的に胴部へと遺構する。胎土に微砂を若干含み、黒色を呈す。

須恵器甕（11）　非常に肩の張ったタイプの甕で、内面同心円当て具、外面並行タタキを行う。胎土は粗砂・細砂を若干含むが比較的精良で、灰色を呈す。

2　B地区

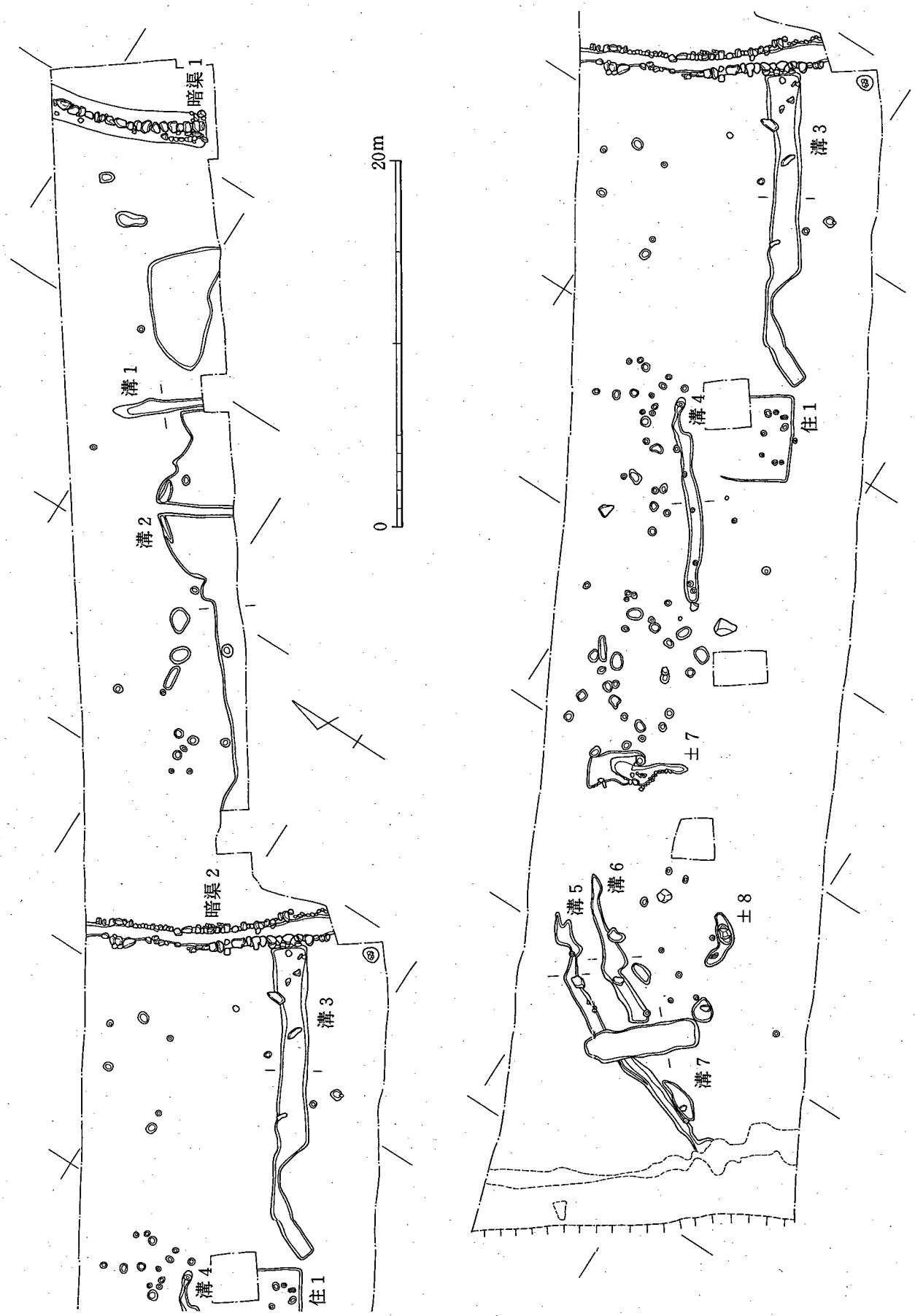
百留居屋敷遺跡の中央付近に位置する。調査面積は約1,500㎡。標高は、西側は北隅が22.3m、南隅が22.2m、中央付近は北側が22.7m、南側が22.2m、東側は北隅が22.9m、南隅が22.9mで、遺構面は全体的に北から南に向かって下降している。特に中央付近の傾斜がもっとも急である。遺構はほぼ全面で検出されたが、密度は高くない。

検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、土坑2基、暗渠2条、溝7条、その他不明遺構、ピット等である。

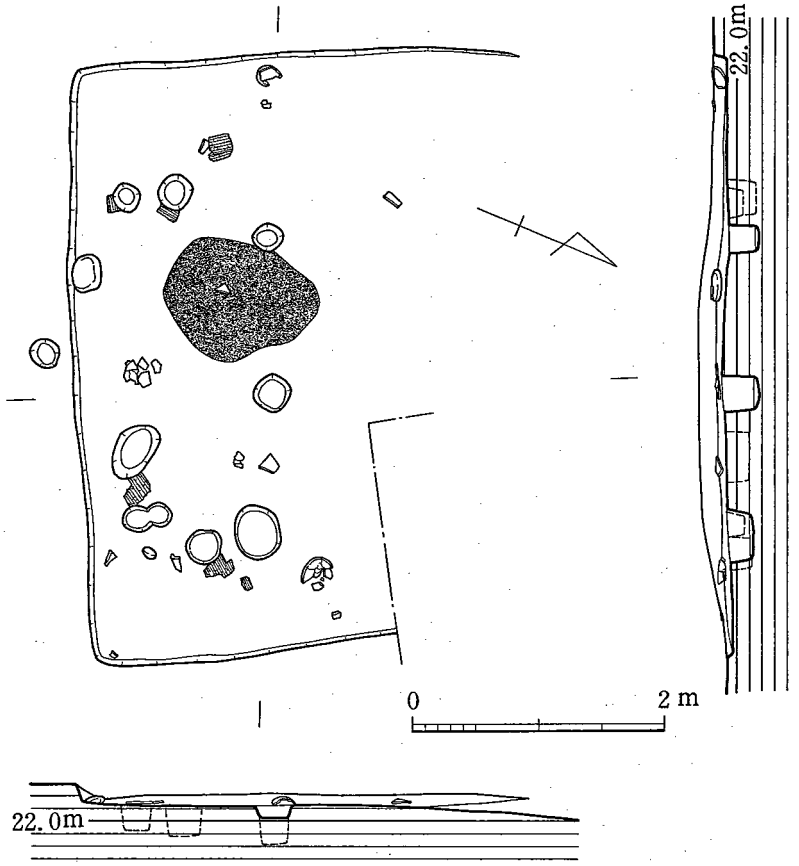
竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版4・5、第12図）

調査区中央付近で検出した。北辺を削平されているが、一辺4.7m程度の正方形プランとなる。遺存状況は悪く、最も深い所でも15cmを測るにすぎない。床面はほぼ水平で、中央やや南寄りの位置に、長軸1.2m、短軸1.0mの不整楕円形の黒色土の広がりを確認した。掘り窪めてはいないが、炉跡と想定される。主柱穴は確認できず、また床面硬化、貼り床等も確認できなかった。床面直上からは土器片、炭化材等が散乱した状況で検出されたが、焼失家屋の状況ではない。家屋廃絶後に不要物を投棄した結果であろう。遺物はパンケースで1箱程度出土した。明らかな混入も認められるが、大半は布留（新）段階のものである。



第11図　B地区遺構配置図（1/300）



第12図　1号竪穴住居跡実測図（1/60）

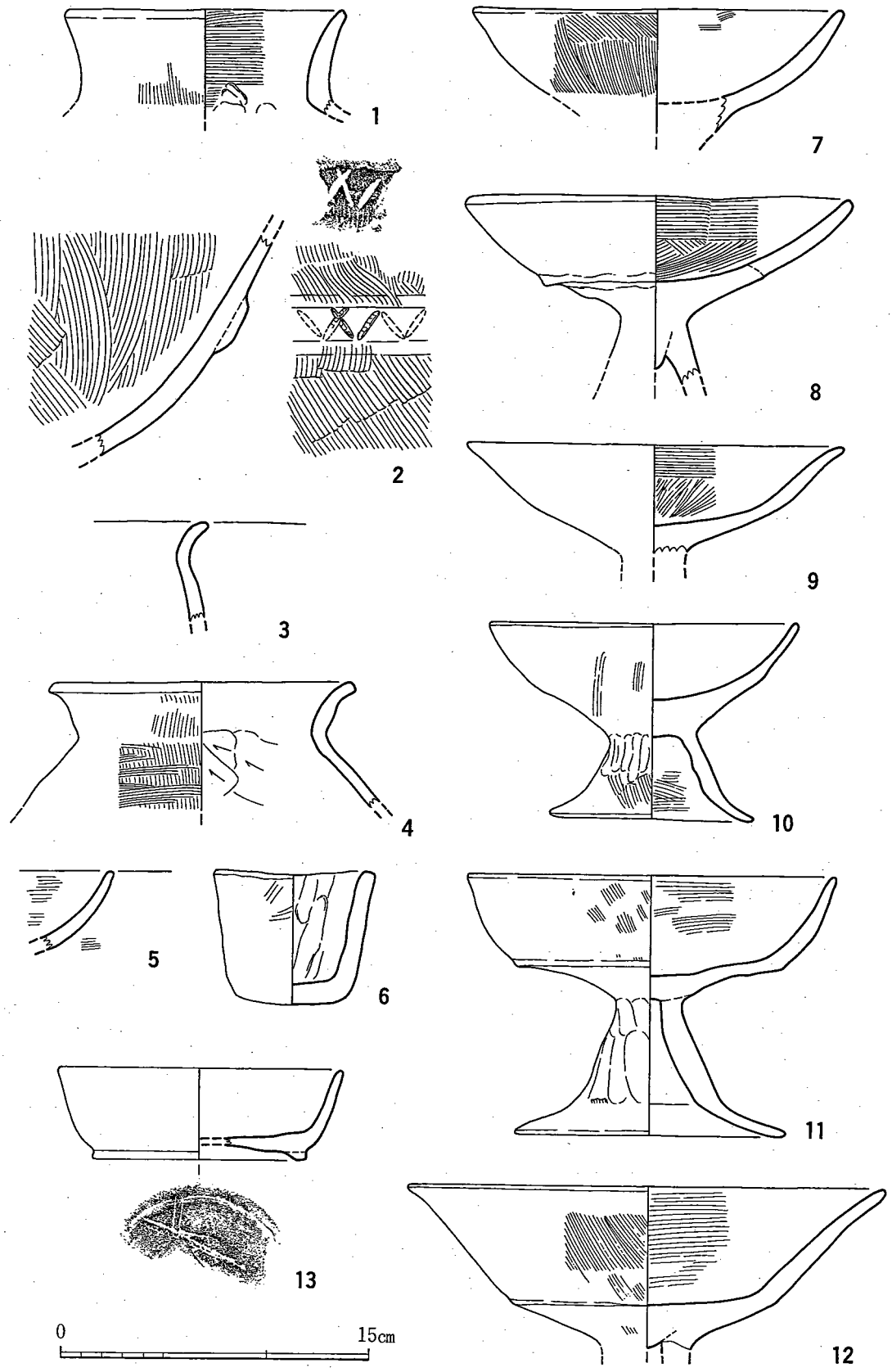
出土土器（図版15、第13図）

土師器壺（1・2）　1はあまり開かない直口縁の壺で、端部は尖り気味に仕上げる。内面横ハケ、外面ナデ後縦ハケ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ細砂を若干含み、肌茶色を呈す。2は大型壺の胴部片で、突帯は胴部下方に位置し、ハケ状工具によるX字刻み目を施文する。内外面ともハケ目調整を行う。胎土に角閃石を若干含み、黄褐色を呈す。恐らく混入品。

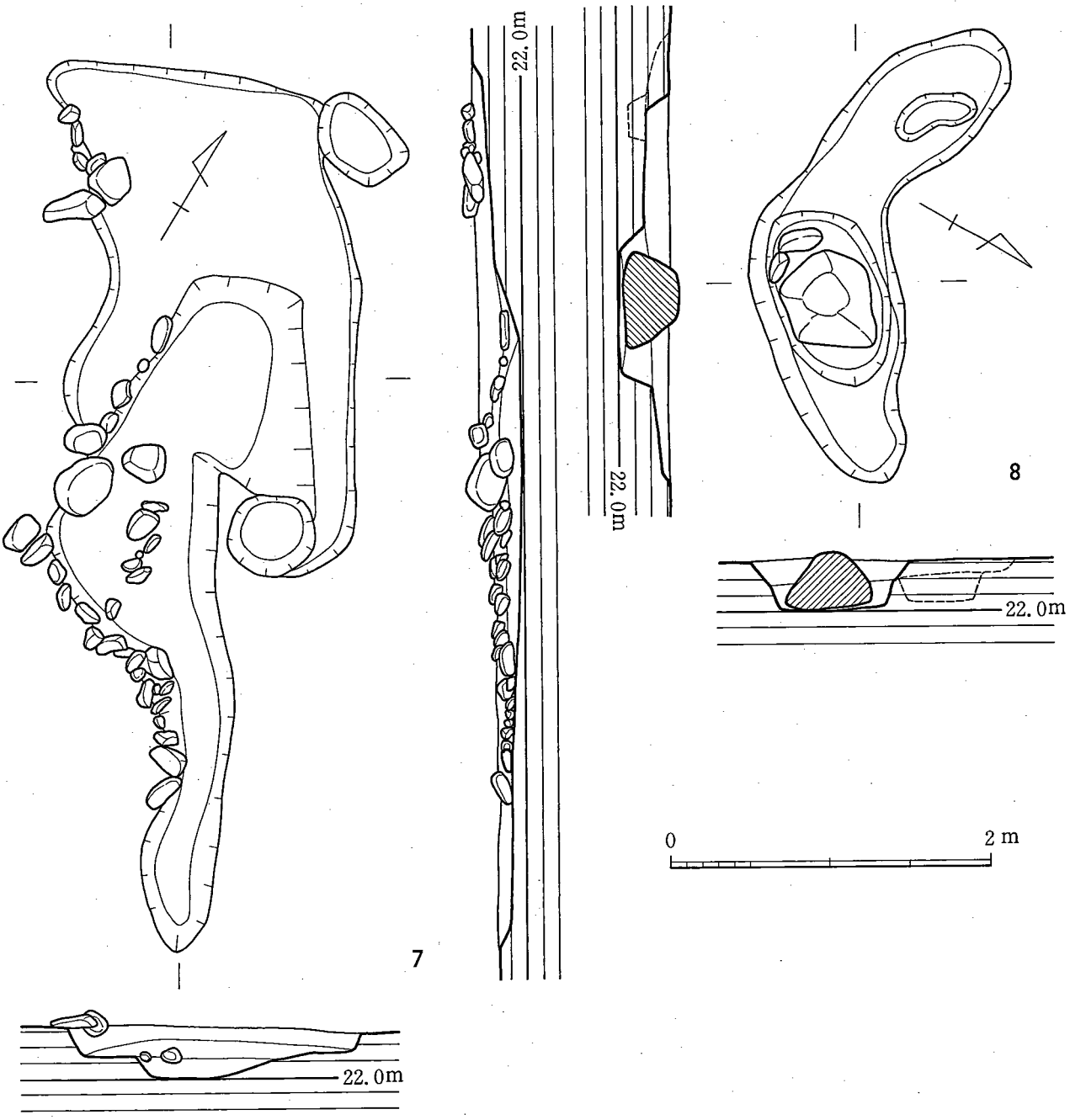
土師器甕（3・4）　3はやや内傾する肩部から、緩く外反する口縁部へと続く。口縁部は横ナデ。胎土に細砂を若干含み、赤褐色～黒色を呈す。4は口縁部がやや外反しながら開き、外面にはナデの際の凸凹が認められる。肩はあまり張らず、なだらかである。肩部内面はヘラケズリ、外面は縦ハケ後粗い横ハケを行う。胎土に角閃石を若干含み、黄肌色を呈す。

土師器椀（5・6）　5は内湾気味に立ち上がる椀で、内外面ハケ調整後にナデを行う。胎土に角閃石を若干含み、内面黒褐色、外面黄褐色を呈す。6は手づくね風の小椀で、底部は不安定な平底である。内面は指ナデ、外面は粗いハケ後ナデ調整を行う。胎土に角閃石を若干含み、黄灰色を呈す。

土師器高坏（7～12）　7は屈曲が無く緩やかに内湾するもので、内外面ハケ調整後、口縁部を横ナデする。胎土に角閃石を若干含み、灰肌色を呈す。8も屈曲が無く、ほとんど内湾せずに伸びるものである。本来屈曲する部分の外面に突帯状のものをつまみ出すが、全周しない。内面ハケ、外面ナデ調整を行う。9は口縁部がわずかに外反するもので、内面ヘラミガキ、外面ナデ調整を行う。胎土に細砂を若干含むが、角閃石は含まれない。色調は灰肌色を呈す。10は小型の高坏で、かなり歪つである。坏部は屈曲せず緩やかに内湾するものである。内外面ハケ調整後、工具によるナデを施す。脚部は短く、裾は屈曲せず緩やかに開く。内外面ハケ調整を行う。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、灰肌色を呈す。11の坏部は屈曲部が下方に位置し、内湾気味に立ち上がる。脚部はやや短く、裾部は短く開く。ハケ後にナデ調整を行う。胎土は微砂を若干含むが角閃石はあまり含まない。色調は肌色を呈す。12の坏部は屈曲部が下方に位置し、わずかに外反して長く伸びるものである。内面横ハケ後ナデ、外面縦ハケ後ナデ調整を行う。胎土は細砂をやや多く含むが角閃石はほとんど含まない。色調は肌色～赤肌色を呈す。

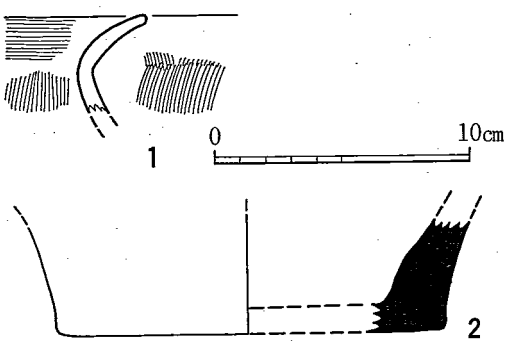


第13図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第14図　7・8号土坑実測図（1/40）

須恵器坏（13）　低い高台を持つもので、坏部は直線的に立ち上がる。底部外面にヘラ記号がある。胎土に砂粒をやや多く含み、灰色を呈す。混入品。



第15図　7号土坑出土土器実測図（1/3）

土坑

7号土坑（第14図）

調査区西側で検出した。長軸5.5m、短軸1.8mの不整形プランの土坑である。深さは北側で15cm、中央付近で30cm、南側で10cmを測る。土坑南側にのみ円礫による石列が断続的に続く。遺物は数点出土し

ている。

出土土器（第15図）

土師器甕（1）　肩があまり張らないものである。口縁部は横ハケ後横ナデ、胴部は縦ハケ調整を行う。胎土には角閃石を若干含み、黄茶色を呈す。

須恵器壺（2）　平底の壺で、内外面ナデ調整を行う。胎土に粗砂・細砂を若干含み、灰色を呈す。底径14.4cm。

8号土坑（第14図）

調査区西側で検出した。長軸3.0cm、短軸0.9mの不整楕円形の土坑である。深さは西側で15cm、中央付近で40cm、東側で10cmを測り、中央が最も深い。中央のピットには、大きな円礫が一個据え置かれている。また東側にも小ピットが1個検出された。遺物は土器が数点出土したが、図示できるものはない。

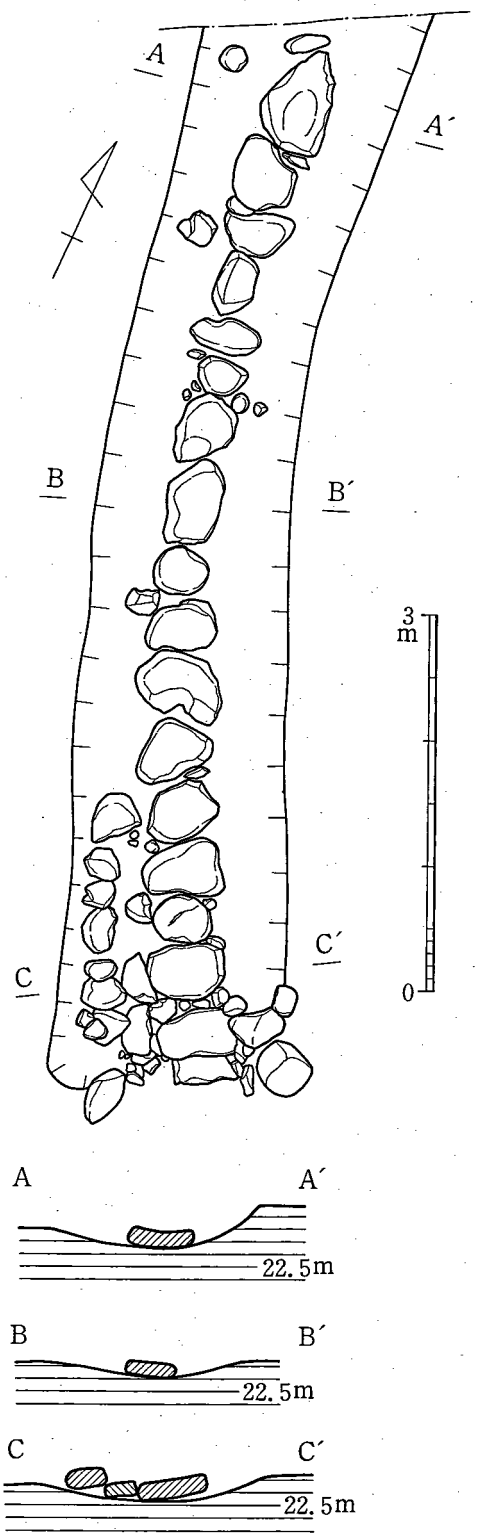
暗渠

1号暗渠（第16図）

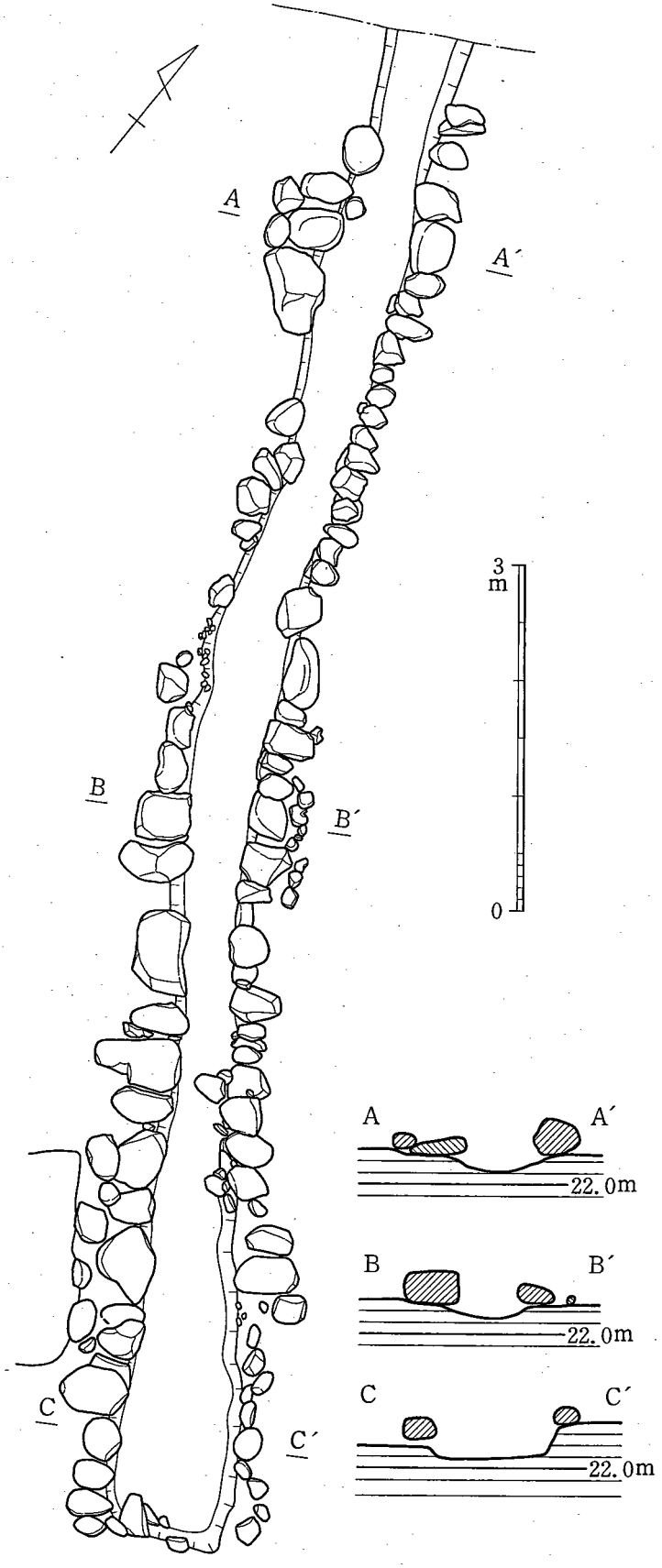
調査区東端で長さ8.0mにわたって検出した。南北方向に直線的に伸び、北側が調査区外へと続く。幅は南側で1.8m、中央付近で1.6m、北側で1.6mを測る。深さは南側で10cm、中央付近で10cm、北側で20cmを測り、北から南へと傾斜する。壁の立ち上がりは緩やかで稜をなさない。石材は比較的大きさの揃った扁平な円礫を用いており、溝底の中央に直線的に並べている。南西側に一部側壁が残っているが、やや小ぶりの円礫を使用している。遺物は近世のものがビニール袋で1袋程度出土しているが、図示できるものはない。

2号暗渠（図版6、第17図）

調査区中央で長さ13mにわたって検出した。南北方向に直線的に伸び、北側は調査区外へと続いている。幅は南側で1.2m、中央付近で1.0m、北側で0.7mを測る。深さは南側で20cm、中央付近で10cm、北側で15cmを測り、北から南へと傾斜する。南側は断面逆台形に、北側は断面蒲鉾形になる。壁の立ち上がりは緩やかである。石材にはあまり形の整っていない円礫を使用し、溝肩の両側に雑に並べる。1号暗渠と異なり、溝底には石を並べていない。遺物



第16図　1号暗渠実測図（1/60）



第17図　2号暗渠実測図（1/60）

は図示したものの他に近世陶器片などが出土している。

出土土器（図版15、第18図）

土師器甕（1）　肩部が張らず口縁部が大きく外反するもので、胴部内面は縦ヘラケズリ、他は横ナデ調整を行う。胎土に角閃石を若干含み、茶褐色を呈す。

土師器椀（2）　直立気味に立ち上がる口縁部で、内外面横ナデ調整を行う。胎土は砂粒を含まず精良である。色調は黄茶色を呈す。

土師質擂鉢（3）　胎土に微砂を若干含み、紫茶色を呈す。

須恵器蓋（4）　口縁端部を下方につまみ出す蓋で、端部は丸い。天井部外面はヘラケズリ調整を行う。口径14.8cm。胎土にかなり大きな砂粒を含む。

備前系擂鉢（5）　10本1単位の櫛目を入れる。胎土は粗砂を若干含み、色調は紫茶色を呈す。

溝

1号溝（第19図）

調査区西側で長さ5.0mにわたって検出した。南北方向に直線的に伸びており、南側は調査区外へと続く。幅は南側で45cm、中央で55cm、北側で75cmを測る。深さは南側で10cm、中央で10cm、北側で5cmを測る。断面形は逆台形であり、壁の立ち上がりは緩やかである。

2号溝（第19図）

調査区西側で長さ21.9mにわたって検出した。東西方向に伸び、南側が調査区外へと続いている。溝というより

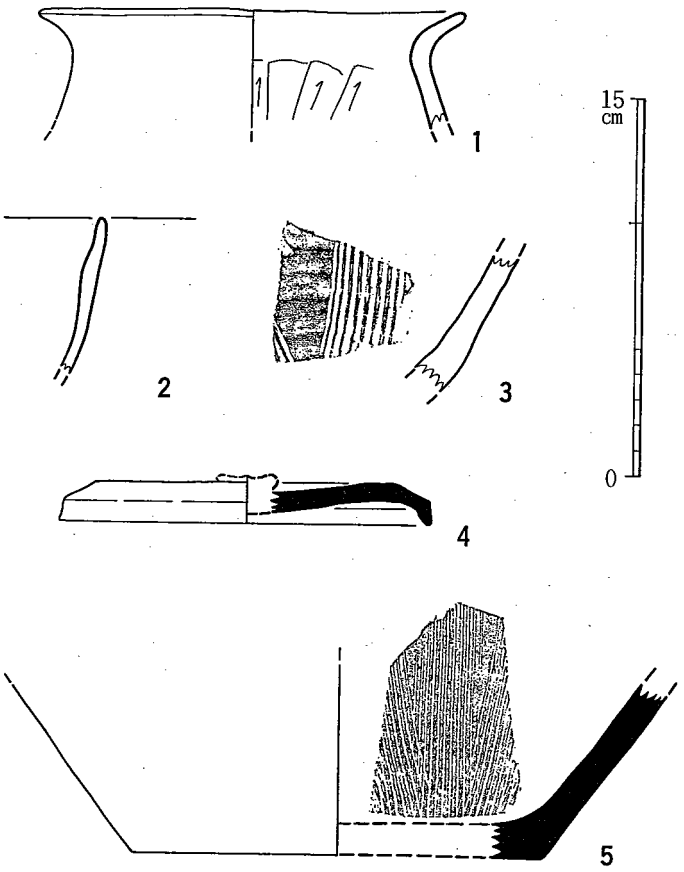
むしろ不整形落ち込みの類かもしれない。幅は東側で2.6m、中央で1.4m、西側で1.4mを測る。深さは東側で15cm、中央で10cm、西側で10cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。

3号溝（第19図）

調査区中央で長さ18mにわたって検出した。東西方向に伸びる。幅は東側で1.8m、中央のくびれ部で35cm、西側で1.0mを測る。深さは東側で30cm、中央で15cm、西側で10cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。遺物は布留（新）段階のものが出土している。

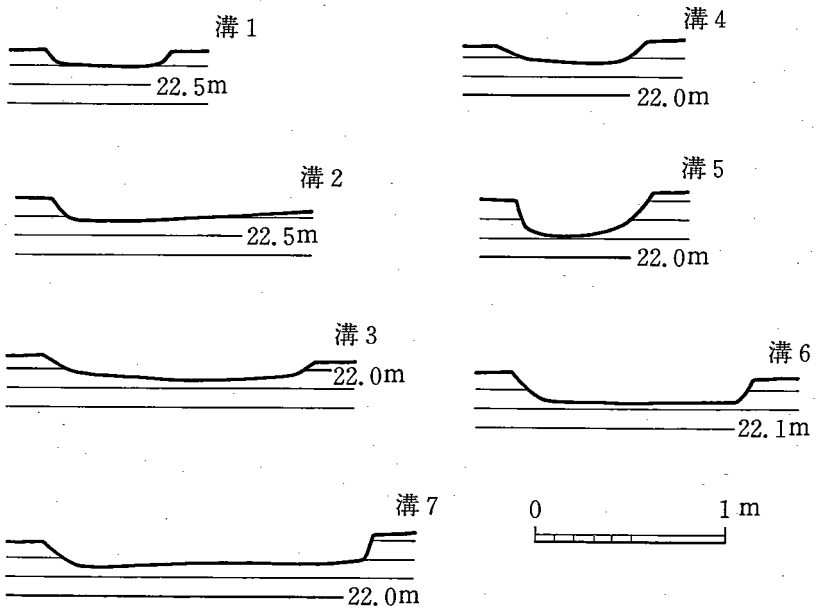
出土土器（図版15、第20図）

弥生土器甕（1）　平底の底部から、湾曲せず直線的に伸びて胴部下半へと続くもので、内面ナデ、外面縦ハケ後ナデ調整を行う。胎土に角閃石を若干含み、内面暗褐色、外面黄褐色を呈す。混入品。

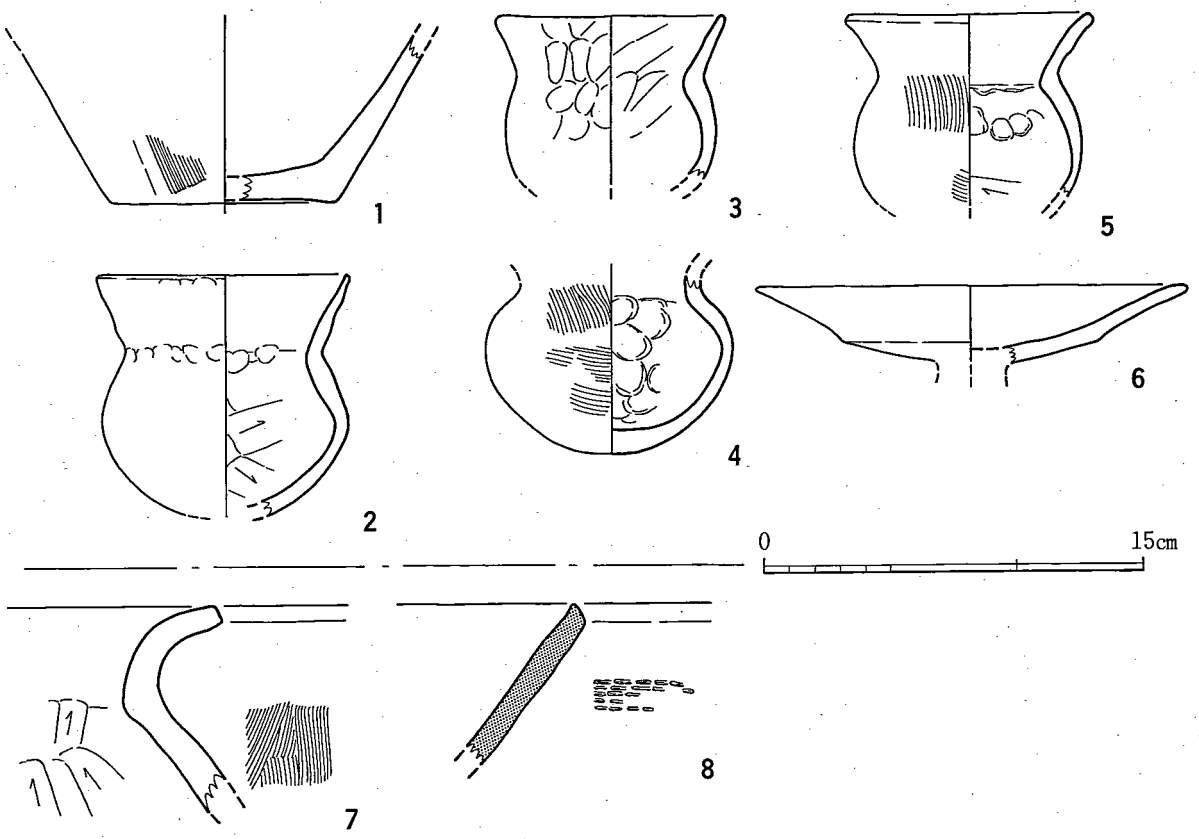


第18図　1・2号暗渠出土土器実測図（1/3）

土師器壺（2～5）　いずれも小型の丸底壺で、胴部最大径が中位にあり、頸部が締まらず、口径が胴径を上回る。2は胴部内面ヘラケズリ、口縁部および胴部外面は横ナデ調整を行う。頸部内外面には指圧痕が多く認められる。胎土に砂粒を若干含み、黄褐色を呈す。3は全面指ナデ・指オサエ調整を行う。胎土に角閃石を含む砂粒をやや多く含み、黄灰色を呈す。4は内面指オサエ・指ナデ調整、外面ハケ調整を行う。胎土に角閃石を多く含み、黄褐色を呈す。5は胴部内面上半は指オサエ後ナデ、下半は横ヘラケズリ、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面はハケ調整を行う。胎土に砂粒を若干含むが、角閃石はほとんど含まれない。色調は黄灰色を呈す。



第19図　1～7号溝断面実測図（1/40）



第20図　B地区溝出土土器実測図（1/3）

土師器高坏（6）　浅い坏部で、口縁部は大きく外反する。細片を反転復元したので傾きにやや不安が残る。角閃石を若干含んだ細砂をやや多く含む。色調は肌白色を呈す。

4号溝（第19図）

調査区中央付近で長さ11.5mにわたって検出した。東西方向に直線的に伸びる。幅は東側で40cm、中央で75cm、西側で70cmを測る。深さは東側で5cm、中央で10cm、西側で10cmを測り、西から東へと僅かに下降する。壁の立ち上がりは緩やかである。溝底では6つのピットが検出された。

5号溝（第19図）

調査区西側で長さ15.9mにわたって検出した不整形の溝で、東西方向に直線的に伸びる。7号溝と重複するが、当溝の方が古い。幅は北側で30cm、中央で80cm、南側で60cmを測る。深さは北側で10cm、中央で25cm、南側で10cmを測る。断面形は蒲鉾形に近く、壁の立ち上がりは西側は急で、東側は緩やかである。遺物は若干出土したが、図示出来るものはない。古墳時代前期。

6号溝（第19図）

調査区西側で長さ8.5mにわたって検出した不整形の溝で、東西方向に直線的に伸びており、5号溝と並行する。幅は北側で0.5m、中央の広くなった所で1.4m、南側で1.0mを測る。深さは北側で5cm、中央で20cm、南側で20cmを測り、北から南へとわずかに下降する。断面は逆台形で、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

出土土器（第20図）

土師器甕（7）　口縁部が大きく外反する甕で、胴部内面ヘラケズリ、外面縦ハケ、口縁部外面横ナデ調整を行う。胎土に粗砂を若干含み、色調は茶色を呈す。

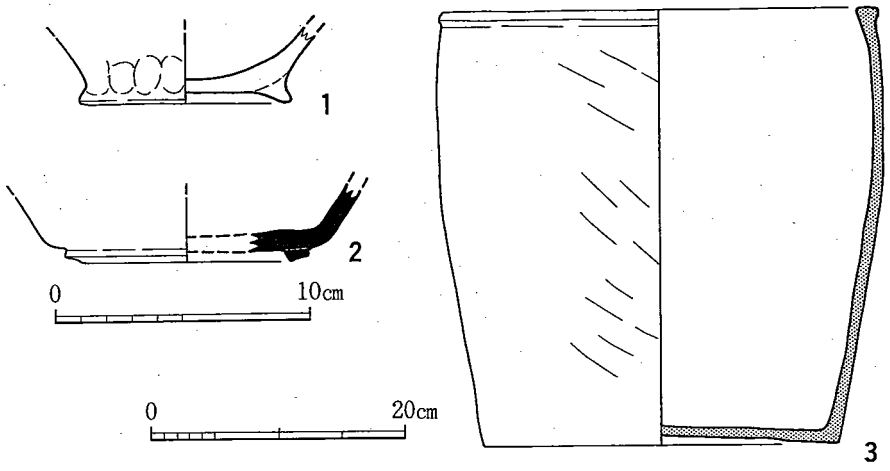
瓦質こね鉢（8）　直線的に開く口縁部で、端部は尖る。外面タタキ後に内外面横ナデ調整を行う。胎土は精良で、灰色を呈す。

7号溝（第19図）

調査区西側で、長さ6.3mにわたって検出した溝で、東西方向に直線的に伸びる。5号溝と重複し、当溝の方が新しい。幅は西側で1.75m、中央で1.7m、東側で1.6mを測る。深さは西側で10cm、中央で10cm、東側で10cmを測り、溝底はほぼ水平である。断面は逆台形で、立ち上がりは緩やかである。覆土から鉄鏃が出土している。土器は若干出土したが、図示できるものはない。

B地区ピット出土土器（図版15、第21図）

弥生土器甕（1）　平底の底部端に粘土を高台状に貼り付けており、見た目はやや上げ底となる。全面ナデ調整を行い、接合部外面には指圧痕が残る。胎土に角閃石を多く含んだ砂粒をやや多く含み、黄灰色を呈す。



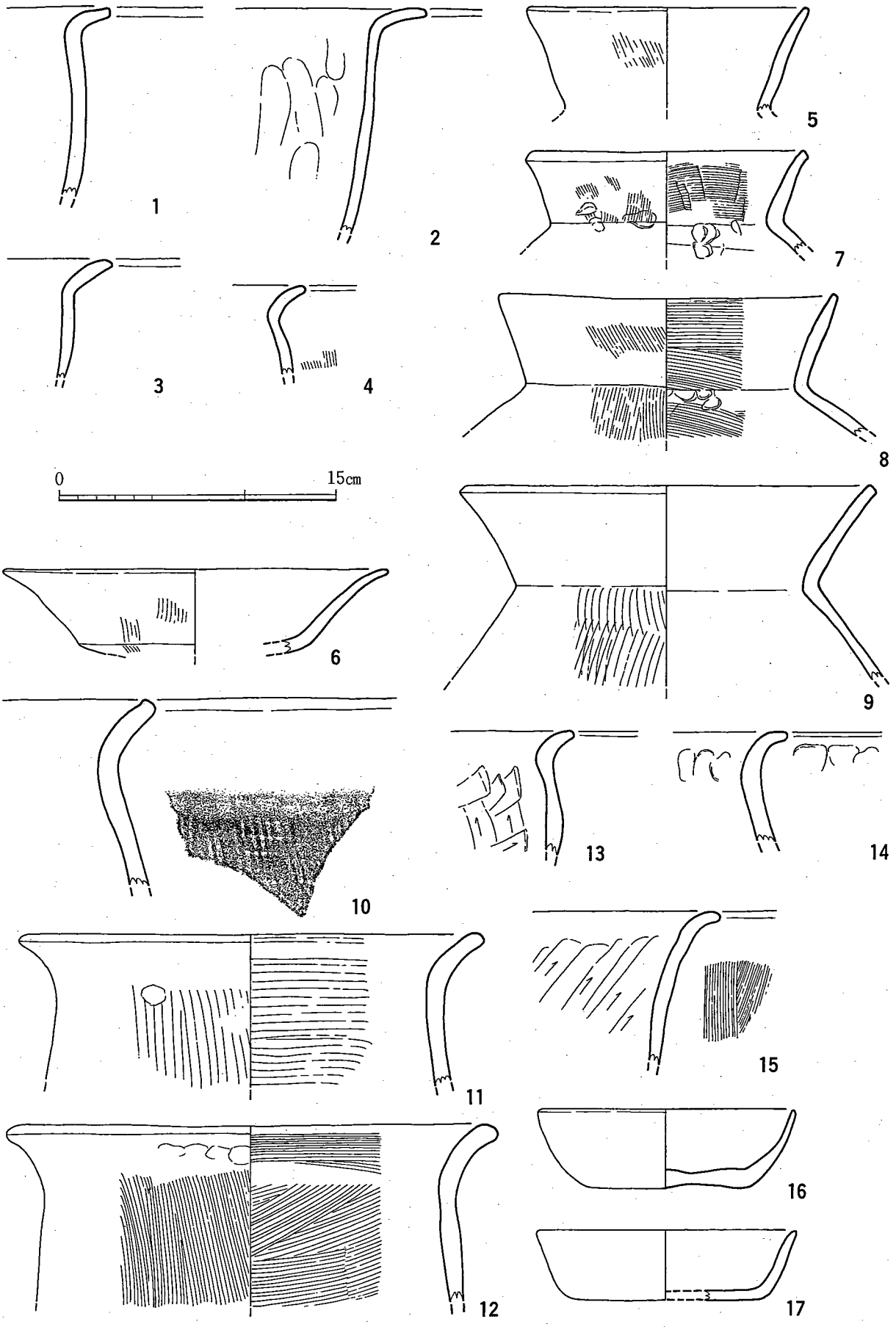
第21図　B地区ピット出土土器実測図（1・2：1/3，3：1/6）

須恵器坏（2）　低平な高台を屈曲部やや内側に貼付するもので、高台内側で接地する。胎土に砂粒を若干含む。

瓦質甕（3）　大型の甕で、口径34.4cm、器高39.8cmを測る。口縁部は直立し、端部は断面三角形に仕上げる。胴部はわずかに膨らみ、底部はやや上げ底となる。内面および口縁部外面はナデ、胴部外面はヘラケズリ後にナデ調整を行う。胎土には角閃石を含んだ砂粒を若干含む。

B地区包含層出土土器（図版15、第22～25図）

弥生土器甕（1～4）　1はやや内傾する胴部から、短く外反する口縁部へと至るもので、屈曲部内面に稜は付かない。端部は四角く仕上げる。調整は内外面ナデで、胎土には角閃石を含んだ細砂をやや多く含み、色調は暗黄灰色を呈す。2の口縁部はやや長く水平近くまで外反する。口縁端部は丸く仕上げる。胴部は全く張らない。内面指ナデ後ナデ、外面ナデ調整を行う。胎土には砂粒を若干含むが、角閃石はほとんど含まない。色調は茶色を呈す。3は口縁部が短く外反するもので、やや中膨らみになる。口縁部および胴部内面はナデ調整を行う。胴部外面は風化のため調整不明。胎土に角閃石を多く含んだ細砂をやや多く含み、色調は暗黄茶色を呈す。4は胴部がやや膨らむも



第22図　B地区包含層出土土器実測図①（1/3）

ので、口縁部は短く外反する。端部は丸くおさめ、屈曲部には稜がつかない。口縁部および胴部内面はナデ、胴部外面は縦ハケ調整を行う。胎土は角閃石を多量に含み、色調は茶色を呈す。

土師器壺（5） 口縁部が直線的に開く広口壺で、ハケ後横ナデ調整を行う。胎土に細砂を多く含み、黄灰色を呈す。

土師器高坏（6） 口縁部が大きく開くもので、屈曲部は緩やかである。内面は横ナデ、外面はハケ後横ナデ調整を行う。胎土には細砂を若干含み、黄灰色を呈す。

土師器甕（7～14） 7は微妙な凸凹を有しながら直線的に開く口縁部で、頚部はよく締まる。口縁部内面は横ハケ、胴部内面は横ヘラケズリ、外面はハケ後に横ナデ調整を行う。胎土に微砂・細砂を若干含み、黄灰白色を呈す。8は直線的に開く口縁部で、端部は尖り気味におさめる。内外面ハケ後に口縁部横ナデ調整を行う。胎土に角閃石を若干含み、肌灰色を呈す。9は直線的に長く開く口縁部のもので、口縁端部は四角くおさめる。肩は張らない。口縁部は横ナデ、胴部外面は粗い縦ハケ調整を行う。内面は風化しており調整不明。胎土に角閃石を含んだ砂粒を若干含み、色調は肌灰色を呈す。10は緩く外反する口縁部で、口縁部は横ナデ、胴部外面はタタキ調整を行う。内面は風化のため器表が剥離する。胎土に砂粒を若干含み、茶色を呈す。11は直立する胴部から、緩く外反する口縁部へ至るもので、胴部内面に粗い横ハケ、外面に粗い縦ハケを施した後、口縁部に横ナデ調整を行う。胎土に粗砂を若干含み、肌茶色を呈す。12は11とほぼ同形で、調整もほぼ同様である。胎土に角閃石を含んだ細砂を若干含み、茶色を呈す。13は胴部がやや膨らむもので、口縁部は短く外反する。胴部内面は粗い横ヘラケズリ、口縁部は横ナデ、胴部外面はナデ調整を行う。胎土には微砂をやや多く含み、赤茶色を呈す。14は直線的に内傾する胴部から、短く外反する口縁部へと至るもので、口縁屈曲部には指圧痕が明瞭である。口縁部内外面横ナデ調整を行う。胎土に細砂を多く含み、茶褐色を呈す。

土師器甑（15） 胴部が緩く外傾するもので、口縁部は短く外につまみ出す。胴部内面縦ヘラケズリ、外面縦ハケ、口縁部内外面横ナデ調整を行う。胎土に砂粒を若干含み、肌色を呈す。

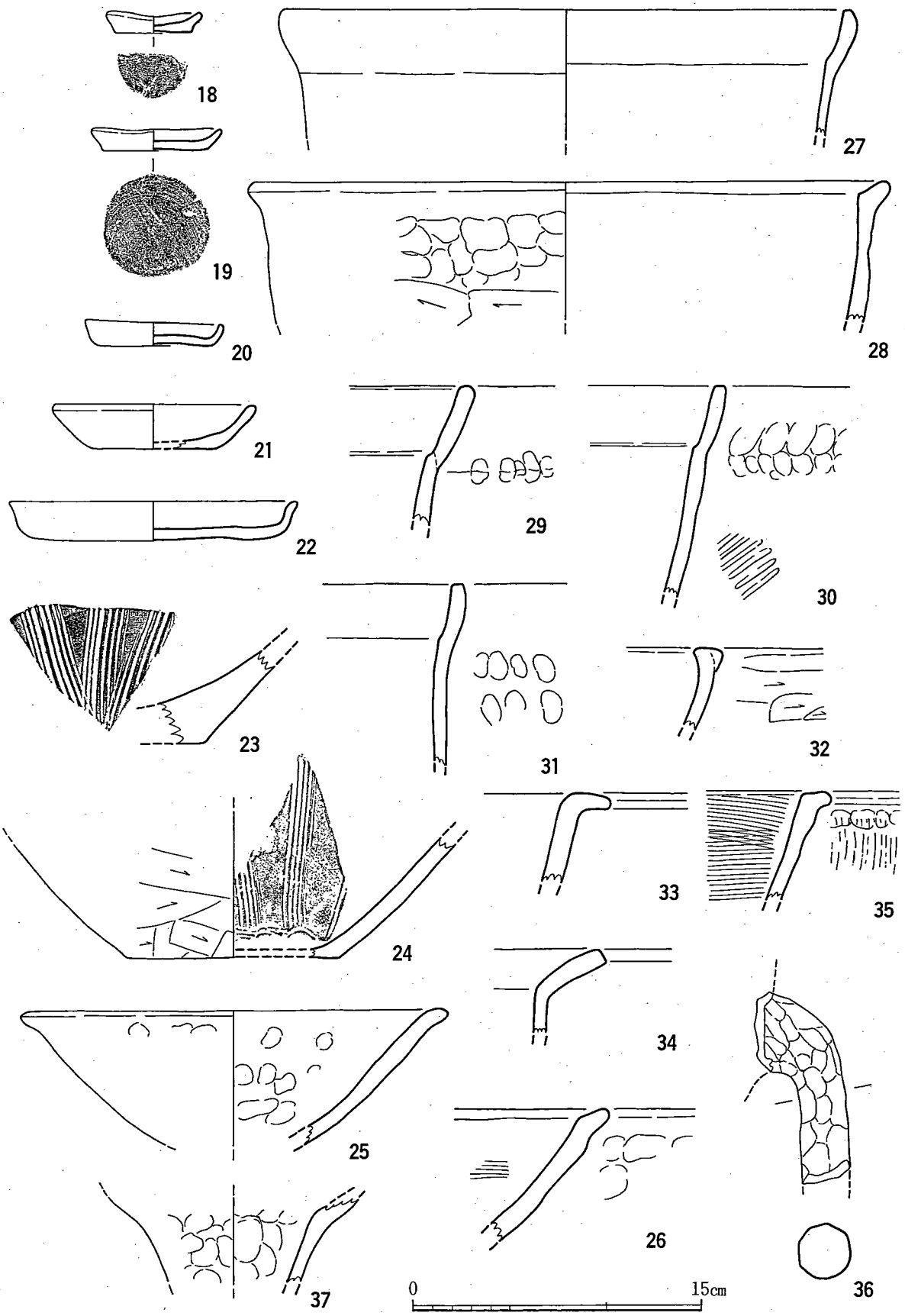
土師器坏（16・17） 16は体部がやや内湾しながら立ち上がるもので、底部がやや厚い。底部は回転ヘラケズリ調整を行う。口径13.8cm、器高4.2cm。色調は灰肌色を呈す。17は体部が直線的に開くもので、底部は回転ヘラケズリ。口径14.0cm、器高3.7cm。灰色を呈す。

土師器皿（18～22） 18・19は底部糸切りの小皿。18は口径5.8cm、器高1.1cm、19は口径6.7cm、器高1.2cm。20は底部ヘラ切りで、口縁部がやや内湾する。口径7.2cm。21は体部が内湾気味に立ち上がる。底部は風化するが、ヘラ切りか。口径 10.4cm。22は口縁部がやや外反する浅い皿で、底部は回転ヘラケズリを行う。板状圧痕が認められる。口径14.8cm、器高2.0cm。

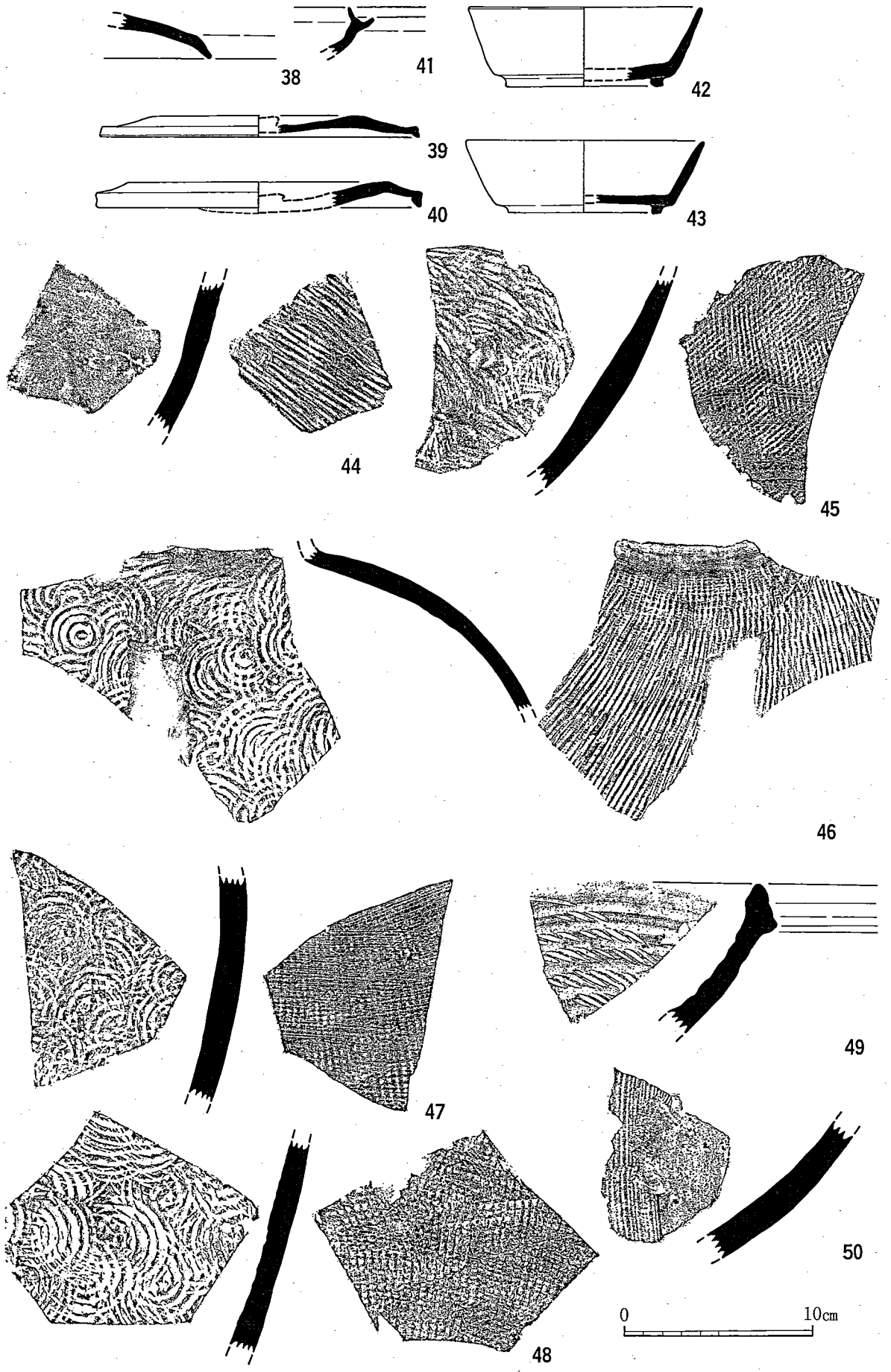
土師質擂鉢（23・24） 23は7条1単位の櫛目をいれる。胎土に微砂を若干含み、赤茶色を呈す。24は外面粗いヘラケズリ、内面は5条1単位の櫛目をいれる。胎土に砂粒を若干含み、こげ茶色を呈す。

土師器鉢（25・26） 25は口縁部が大きく開く浅い鉢で、指オサエ後横ナデ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ砂粒をやや多く含み、色調は茶褐色を呈す。口径22.2cm。26は端部を外側につまみ出す。内面横ハケ後横ナデ、外面指オサエ後ナデ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ細砂をやや多く含み、黄灰色を呈す。

土師質土鍋（27～35） 27は口縁部が内湾するもので、全面横ナデ調整を行う。外面に煤が付着す



第23図　B地区包含層出土土器実測図②（1/3）



第24図　B地区包含層出土土器実測図③（1/3）

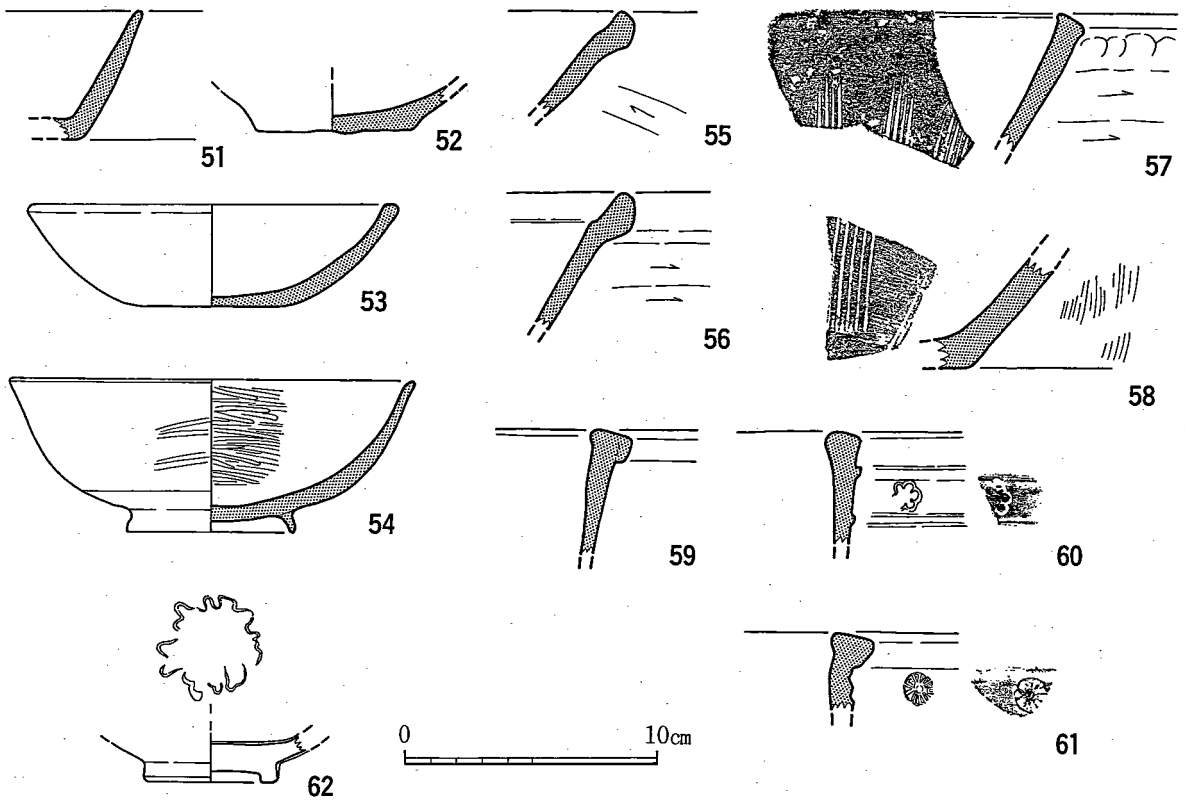
る。胎土に砂粒を若干含み、灰褐色を呈す。28は口縁端部を外側につまみ出したもので、内面には稜が付く。口縁部は横ナデ、体部内面ナデ、外面下方は板状工具による横ナデ調整を行い、外面上方は指圧痕が明瞭である。胎土に砂粒をやや多く含み、茶色を呈す。29は口縁部が内湾しながら外傾するもので、接合部内面に明瞭な稜が付き、外面に指圧痕が多くある。胎土に角閃石を多く含み、色調は暗茶灰色を呈す。30は29とほぼ同形だが、胴部外面下半はタタキ調整を行う。胎土に砂粒を若干含み、黒灰色を呈す。31も29に近いが、口縁部は直立し、端部は四角くおさめる。胎土に砂粒を若干含み、黄灰色を呈す。32は口縁部が直立し、端部外面に粘土紐を貼付して断面三角形に仕上げる。口縁部および体部内面は横ナデ、体部外面は横ヘラケズリ調整を行う。33は口縁部を短く外側に折り曲げたもので、風化が進んでおり調整不明。胎土には砂粒を多く含む。34は口縁部を長く外側に折り曲げたもので、端部は四角く、またやや肥厚する。胎土に砂粒を若干含み、暗黄灰色を呈す。35は口縁端部が断面三角形のもので、内面横ハケ、外面縦ハケ調整を行う。胎土は比較的精良で、肌茶色を呈す。

土師質足鍋（36）　足釜の脚部片で、指ナデ・指オサエ成形を行う。胎土には砂粒をほとんど含まず、黄灰色を呈す。

製塩土器（37）　全面指ナデ・指オサエで成形する。器表はやや風化する。胎土に粗砂・細砂を若干含み、橙茶色を呈す。

須恵器蓋（38～40）　38は端部が内側に短く屈折する。全面回転ナデ調整を行う。39・40は口縁端部を短く内側に屈曲させるもので、端部は鋭い。どちらも焼け歪みが著しい。

須恵器坏（41～43）　41は立ち上がりが短く内傾するもので、シャープな作りである。42・43は体部が直線的に開き、高台はやや内側に付ける。



第25図　B地区包含層出土土器実測図④（1/3）

須恵器甕（44～48）　44は内面ナデ、外面平行タタキで、焼成はやや軟質である。45は甕胴下半部片で、内面同心円当て具痕、外面斜格子タタキ。46は甕の肩部で、内面同心円当て具痕、外面格子目タタキ。47は内面同心円当て具痕、外面格子目タタキ後、板状工具によるナデ消し。48は内面同心円当て具痕、外面格子目タタキ。

備前系須恵質擂鉢（49・50）　49は口縁部を断面三角形の玉縁状にする。回転ナデ後に粗い斜櫛目をいれる。色調は紫褐色を呈す。50の内面はナデ後に櫛目を施す。色調は暗茶色を呈す。

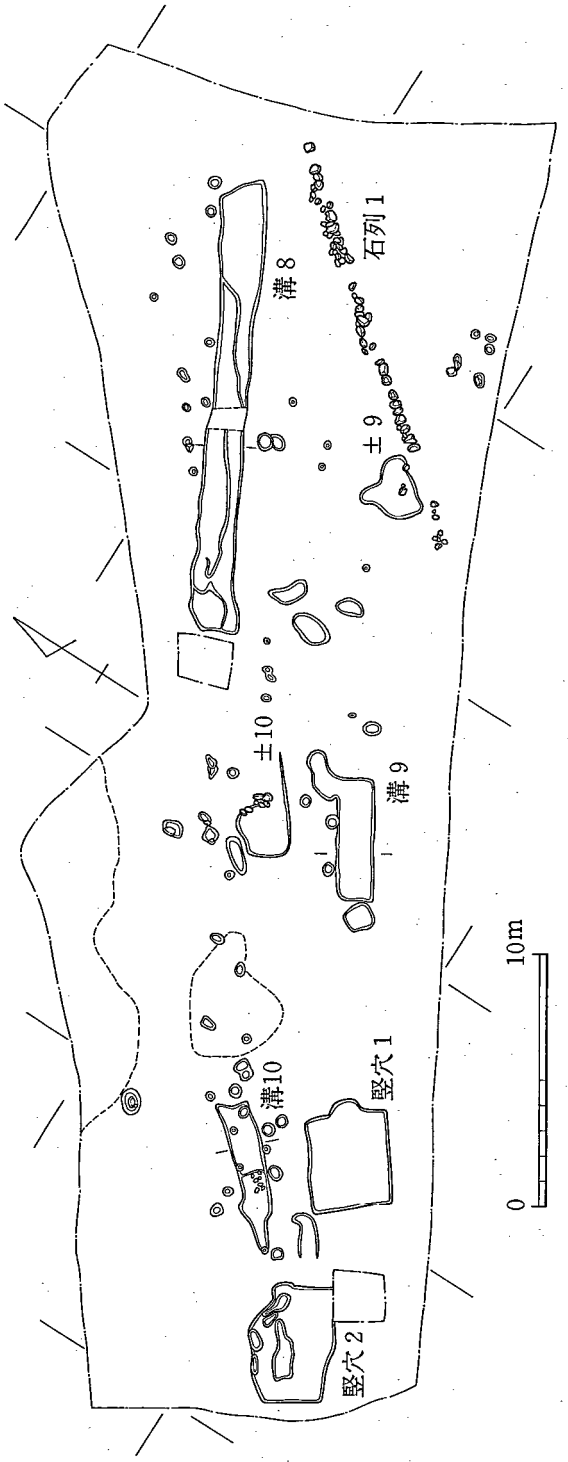
瓦器坏（51・52）　51は体部が直線的に開き、端部は鋭い。内外面回転ナデ調整を行う。胎土は精良で、灰白色～黒灰色を呈す。52の底部は回転ヘラ切りを行う。胎土に砂粒を若干含み、灰色を呈す。

瓦器椀（53・54）　53は浅い椀で、口縁端部は丸い。底部は不明瞭な平底である。全面ナデ調整を行う。胎土に砂粒を若干含み、黒灰色を呈す。口径14.6cm、器高4.0cm。54は細い高台を貼り付けるもので、全面横ヘラミガキ調整を行う。口径16.0cm、器高6.0cm、高台径3.3cm。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、黒灰色～灰白色を呈す。

瓦質こね鉢（55・56）　55は端部を上につまみ上げるもので、口縁部および体部外面は横ヘラケズリを行う。胎土に微砂を多量に含み、黒灰色を呈す。56も55と似るが、口縁部内面に明瞭な稜が付く。口縁部および体部内面ナデ、体部外面横ヘラケズリ調整を行う。胎土には砂粒を若干含み、黄灰色を呈す。

瓦質擂鉢（57・58）　57は口縁端部がほとんど膨らまず、直口縁に近い。内面は回転ナデ後、４本１単位の櫛目をいれる。体部外面は横ヘラケズリ。胎土に砂粒を若干含み、灰色～黒灰色を呈す。58は内面横ハケ目後、櫛目をいれる。外面は縦ハケ後ナデ。胎土に砂粒を若干含み、灰色を呈す。

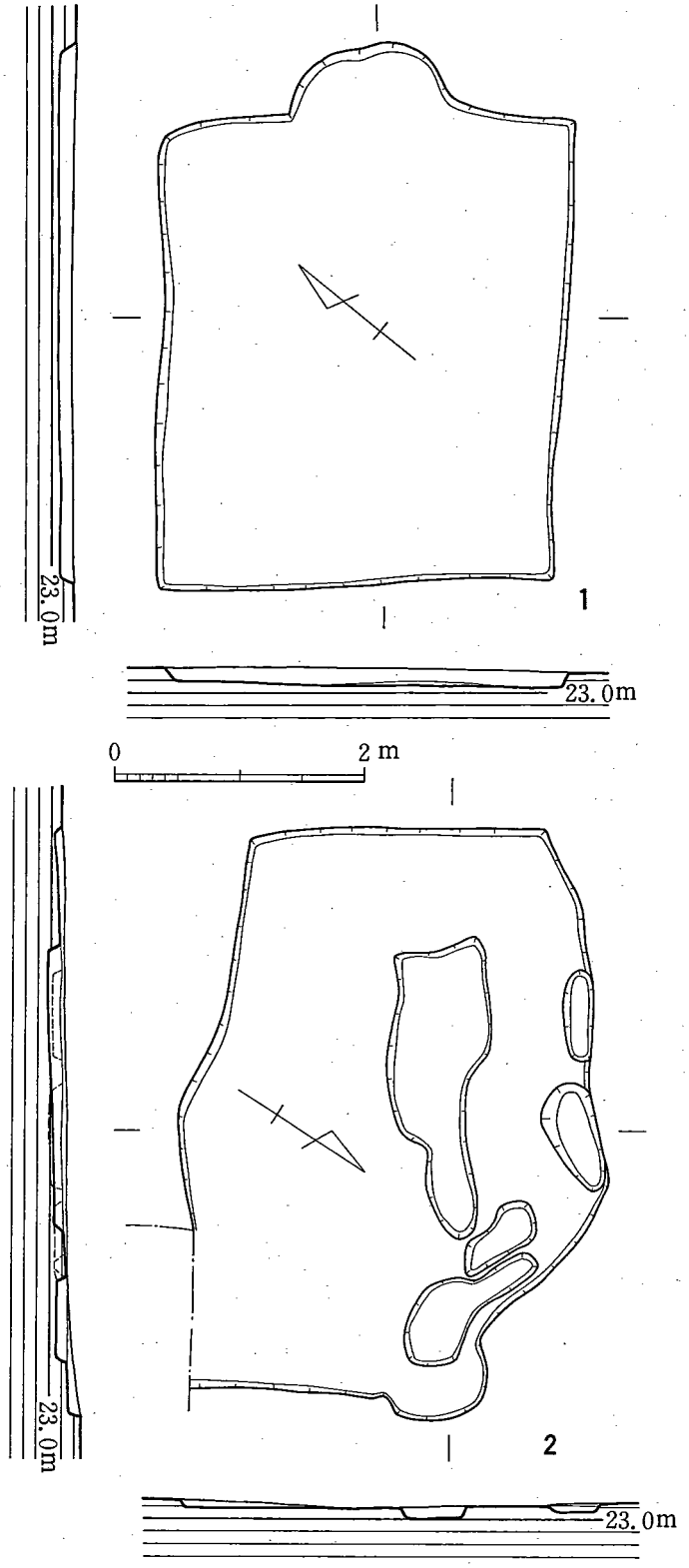
瓦質火鉢（59～61）　59は口縁端部に粘土を貼付して、断面四角形の凸帯状にしたもの。内外面横ナデ調整を行う。胎土に微砂を若干含み、灰色を呈す。60は直立する口縁部で、端部内面を若干肥厚させる。外面の低い三角凸帯の間に花文を印刻する。胎土は精良で、暗灰色を呈す。61は口縁端



第26図　C地区遺構配置図（1/300）

部に断面三角形の凸帯を貼り付けたもので、口縁部下に花文を印刻する。胎土は精良で、色調は灰白色を呈す。

青磁椀（62）　龍泉窯系青磁椀で、見込みに花弁状の不明瞭な文様を陰刻する。釉は薄緑白色を呈し、高台外面までかかる。



第27図　1・2号竪穴実測図（1/60）

3　C地区

百留居屋敷遺跡の中央東寄りに位置する。調査面積は約810㎡。標高は南東隅が22.1m、北東隅が22.4m、中央南側が23.1m、北側が23.3m、南西隅が23.1m、北西隅が23.3mを測り、地形は西から東へと緩やかに下降している。中央付近には円礫層が露出している場所がある（破線内）。遺構はほぼ全面で検出したが、密度はそれほど高くない。検出された遺構は、竪穴2基、土坑2基、石列1条、溝3条、その他不整形遺構、ピット等である。

竪穴

1号竪穴（第27図）

調査区西側に位置する。北辺3.6m、西辺3.1mを測る方形プランの遺構であるが、東辺中央付近がやや飛び出す。遺構確認時にはその形状から、北西にカマドを配置した竪穴住居跡と考え、床面精査等を行ったが、カマド・柱穴等を何も確認出来なかったため、竪穴住居跡と判断するには至らなかった。深さは北隅で10cm、東隅で10cm、南隅で10cm、西隅で10cm、中央で15cmを測り、床面はほぼ水平である。壁の立ち上がりはやや急である。遺物は出土しなかった。

2号竪穴（第27図）

調査区西側に位置する。南辺4.4m、東辺2.4mを測る方形プランの遺構であるが、北側がやや不整形になる。床面北側に、いくつかのピット・掘り込みがみられる。1号竪穴同様、遺構確認時にはその形状から、

北西にカマドを配置した竪穴住居跡と考え、床面精査等を行ったが、カマドは確認出来ず、また主柱穴と判断できるピットも確認出来なかったため、竪穴住居跡と判断するには至らなかった。深さは東隅で10㎝、南隅で10㎝、西隅で５㎝、北隅で10㎝を測り、床面はほぼ水平である。床面で確認されたピットの深さはいずれも10㎝前後である。壁は急な立ち上がりとなる。遺物は出土しなかった。

土坑

９号土坑（第28図）

調査区中央東寄りに位置する不整形プランの土坑で、長軸2.5ｍ、短軸2.2ｍを測る。深さは北側で15㎝、西側で７㎝、東側で７㎝を測り、床面はほぼ水平である。東側で数個の円礫を検出した。遺物は出土していない。

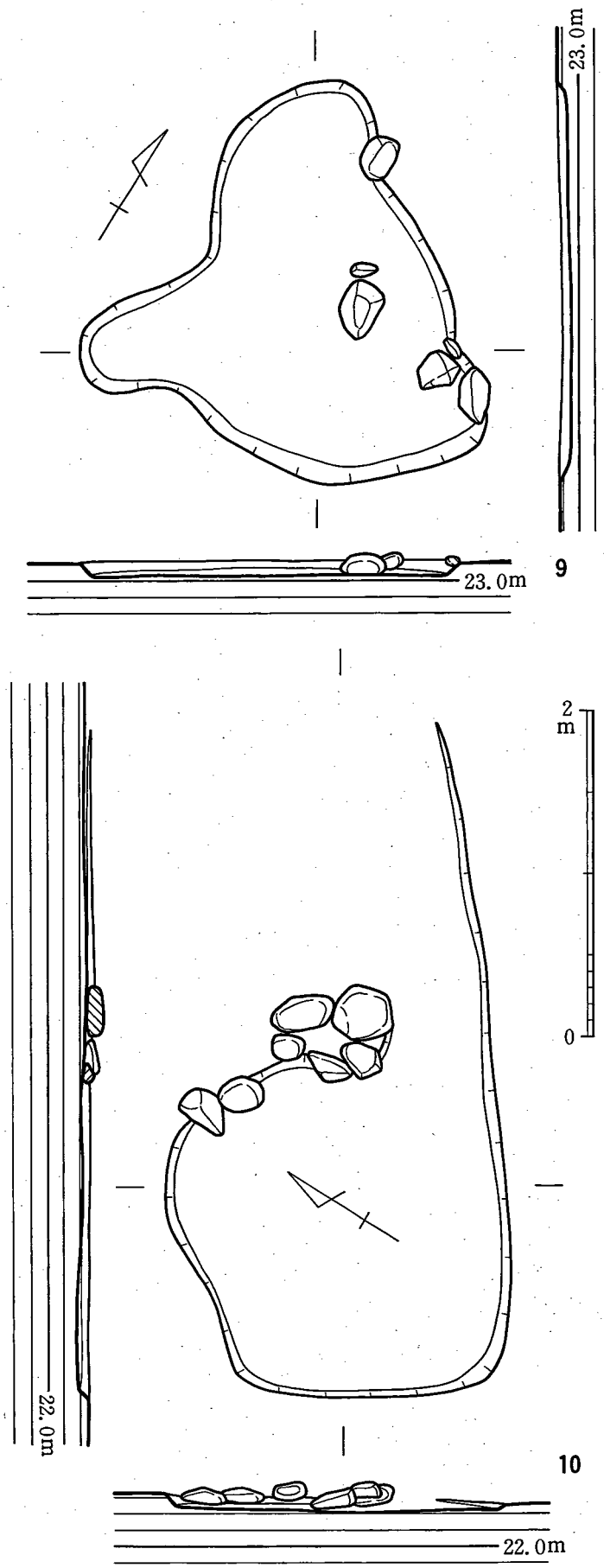
10号土坑（第28図）

調査区中央付近に位置する不整方形プランの土坑で、南辺4.0ｍ、西辺1.6ｍ、北辺1.9ｍを測る。東側は削平を受けるが、恐らく溝が取り付いた形となるのであろう。深さはいずれも５㎝前後と浅く、床面はほぼ水平である。北東隅で人頭大の円礫数個を検出した。遺物は出土していない。

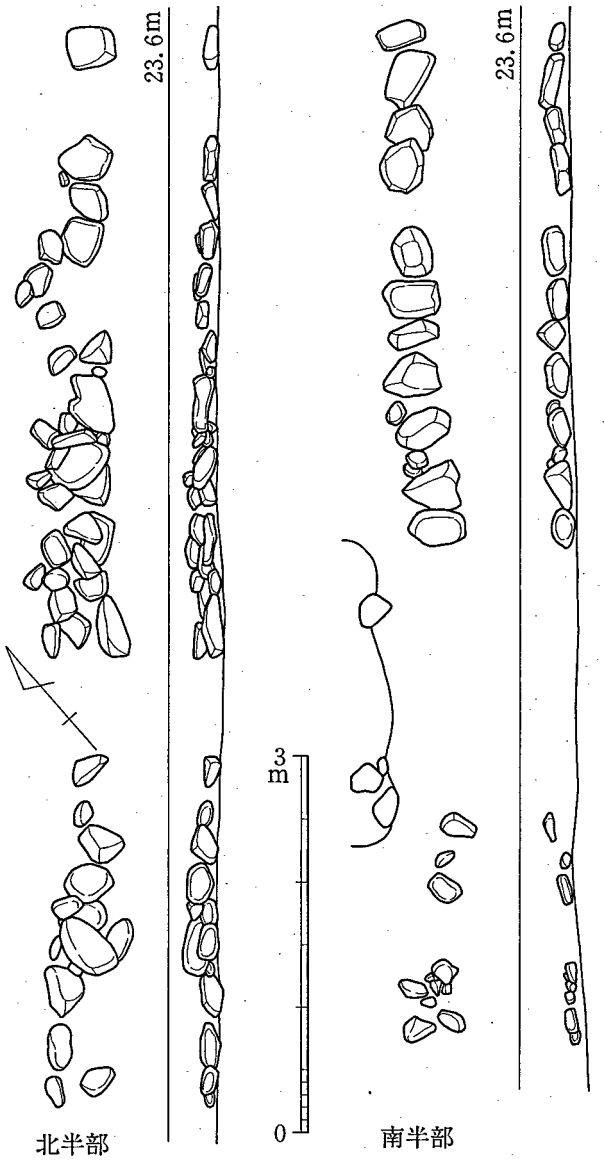
石列

１号石列（第29図）

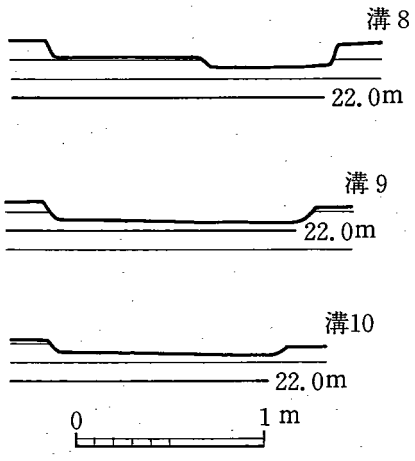
調査区東側に位置し、所々で分断するが、長さ17.5ｍにわたって直線的に伸びる石列である。石材には人頭大程度の円礫を使用し、比較的雑に並べている。暗渠の可能性も考え、付近を精



第28図　９・10号土坑実測図（1/40）



第29図　1号石列実測図（1/60）



第30図　8～10号溝断面実測図
(1/40)

査したが、掘り込みは確認出来なかった。

溝

8号溝（第30図）

調査区東側に位置する溝で、長さ17.5mにわたって検出した。東西方向に直線的に伸びる溝である。幅は西側で1.9m、中央で1.5m、東側で1.5mを測る。深さは西側で10cm、中央で8cm、東側で5cmを測り、北側が段を有して若干深くなる。壁はやや急な立ち上がりとなる。遺物は出土しなかった。

9号溝（第30図）

調査区中央に位置し、東西方向に直線的に伸びる溝で、8号溝と並行する。長さ4.3m、幅1.5mを測る。深さは西側で8cm、中央で7cm、東側で8cmを測り、底面はほぼ水平である。壁は比較的緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

10号溝（第30図）

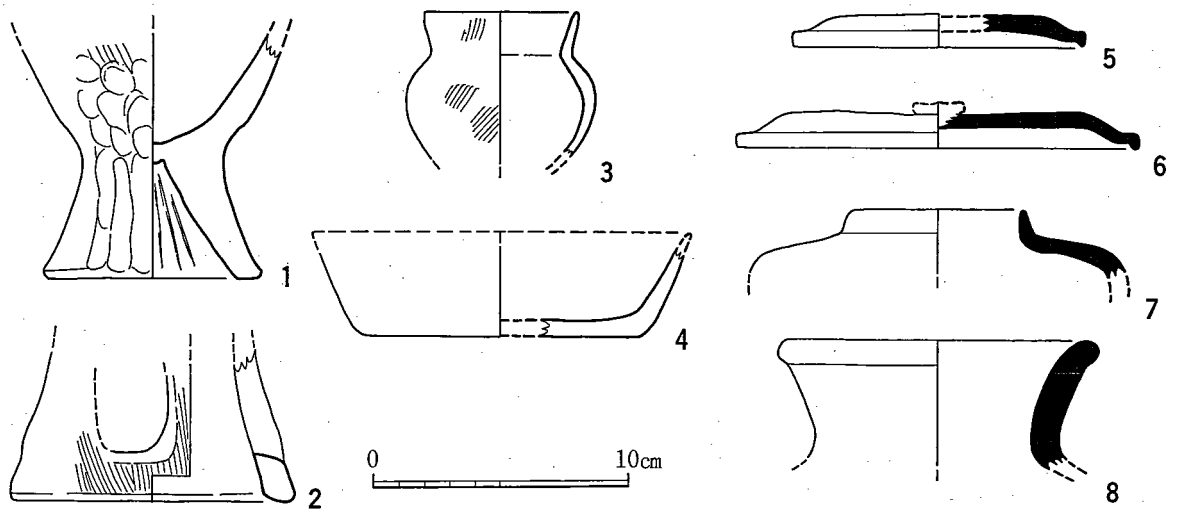
調査区西側に位置し、東西方向に伸びる溝で、長さ6.0m、幅1.3mを測る。深さは西側で10cm、東側で5cmを測り、西側は段を有して若干深くなる。壁は比較的緩やかな立ち上がりとなる。中央付近で拳大の円礫数個を検出している。遺物は出土しなかった。

C地区包含層出土土器（図版16、第31図）

弥生土器台付鉢（1・2）　1は肉厚の径の小さな脚部が付くもので、内面ヘラナデ、外面指ナデ後縦ハケ調整を行う。胎土に砂粒を多量に含み、黄褐色を呈す。2は3方向に長方形の透かし孔がある脚部で、胎土に角閃石を含んだ砂粒を若干含み、暗黄褐色を呈す。

土師器壺（3）　肩部はやや上位にあり、頸部はしまらず、口縁部は短く上方に立ち上がる。内面横ナデ、外面縦ハケ後、横ナデ調整を行う。胎土に微砂を若干含み、黒褐色を呈す。

土師器坏（4）　体部が直線的に開くもので、口径は　15cm程



第31図　C地区包含層出土土器実測図（1/3）

度となるであろう。底部は回転ヘラケズリ。胎土に角閃石を含んだ砂粒をやや多く含み、褐色～黄褐色を呈す。

須恵器蓋（5・6）　5は口縁部を下方につまみ出すもので、端部は比較的鋭い。器肉はやや厚めである。口径11.4cmを測る。壺蓋か。6は口縁部を一旦水平に短くのばした後、先を下方につまみ出したもので、口縁端部は丸い。

須恵器壺（7）　肩が張り、口縁部を短く上方につまみ上げた短頸壺で、口径6.6cmを測る。

須恵器甕（8）　口縁端部を丸く仕上げる。全面横ナデ調整。口径12.6cm。

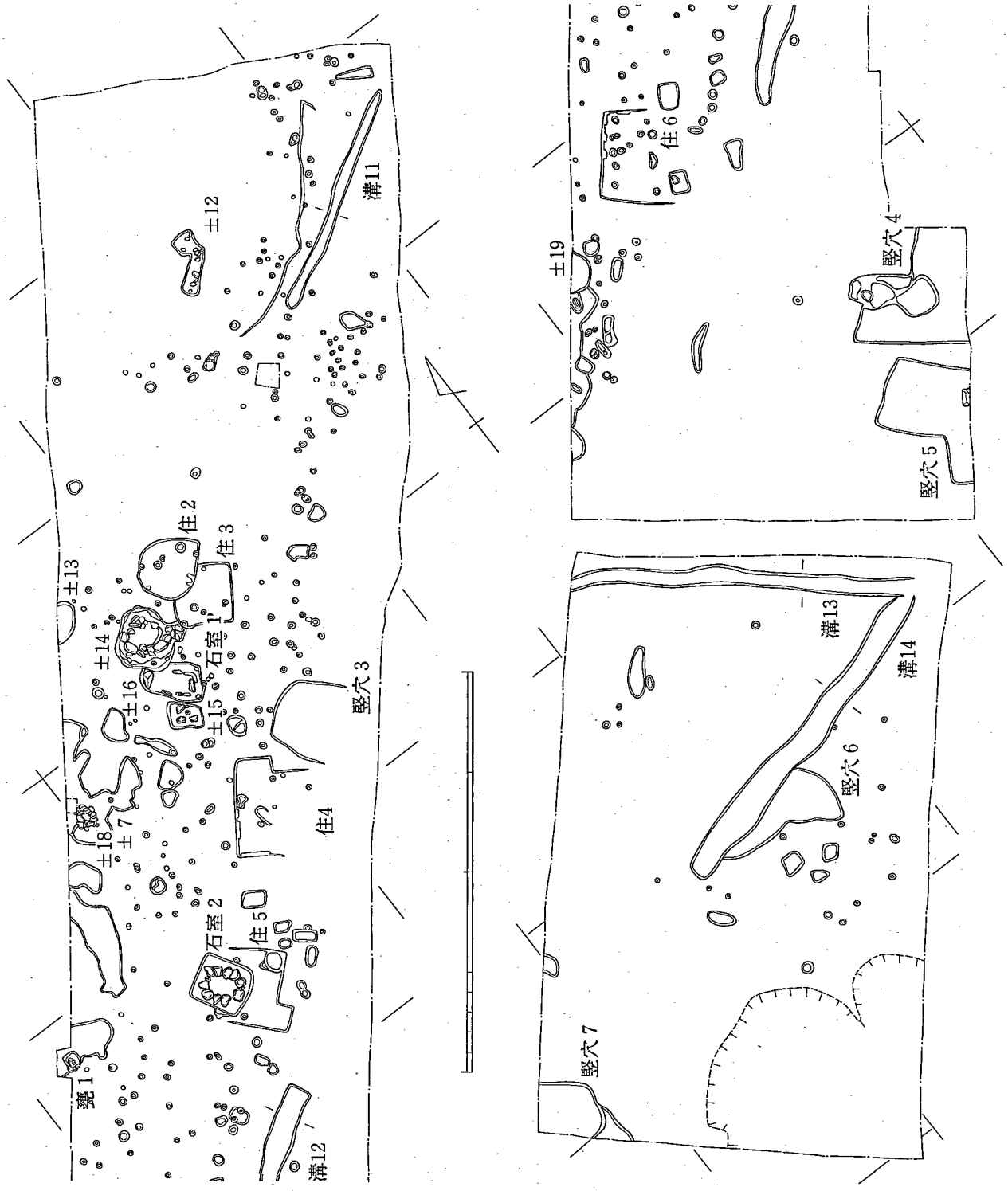
4　D地区

百留居屋敷遺跡の東端に位置する調査区で、調査面積は約1980㎡。標高は南隅が21.7m、西隅が21.7m、中央南側が21.6m、中央北側が22.6m、東隅が22.2m、北隅が22.2mで、中央北側が周囲よりも50cm～100cm程度高く、微高地を形成している。遺構はこの部分に集中する傾向にある。検出した遺構は、竪穴住居跡5棟、竪穴5基、土坑9基、溝4条、小竪穴式石室2基、壺棺墓1基、その他不整形遺構、ピット等である。

竪穴住居跡

2号竪穴住居跡（図版8、第33図）

調査区中央東寄りに位置し、3号竪穴住居跡と重複するが、当住居跡の方が新しい。平面形態は方形に近い不整円形となるが、これは壁の崩落・削平等によるものであり、本来は隅丸正方形プランの住居跡である。北辺2.8m、東辺2.6mを測る小型の住居跡で、南東にカマドが付設される。深さは北隅で10cm、東隅で10cm、南隅で20cm、西隅で10cmを測り、南側が最も残りが良い。床面はほぼ水平で、床面直上からは土器が若干まとまって出土している。床面において柱穴を4つ確認したが、不規則な配置となるので、どれが主柱穴となるのかは判断出来なかった。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。遺物はカマド全面からまとまって出土しており、滑石製権、鉄製刀子・鎌も付近から出土している。8世紀後半のものである。



第32図　D地区遺構配置図（1/300）

出土土器（図版16、第34図）

弥生土器甕（1）　如意形口縁の甕で、胴部は若干張る。器壁は薄い。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデで、指圧痕が多く認められる。外面は縦ハケ後にナデ調整を行う。胎土に角閃石を多く含み、赤褐色～黒褐色を呈す。

土師器椀（2）　丸底の椀で、内面ナデ、外面ヘラミガキ調整を行う。胎土は精良で、赤橙色を呈

す。口径12.8cm。

土師器坏（3）　やや浅く、皿に近い。内外面ナデ調整を行う。胎土は比較的精良で、赤橙色を呈す。口径14.4cm。

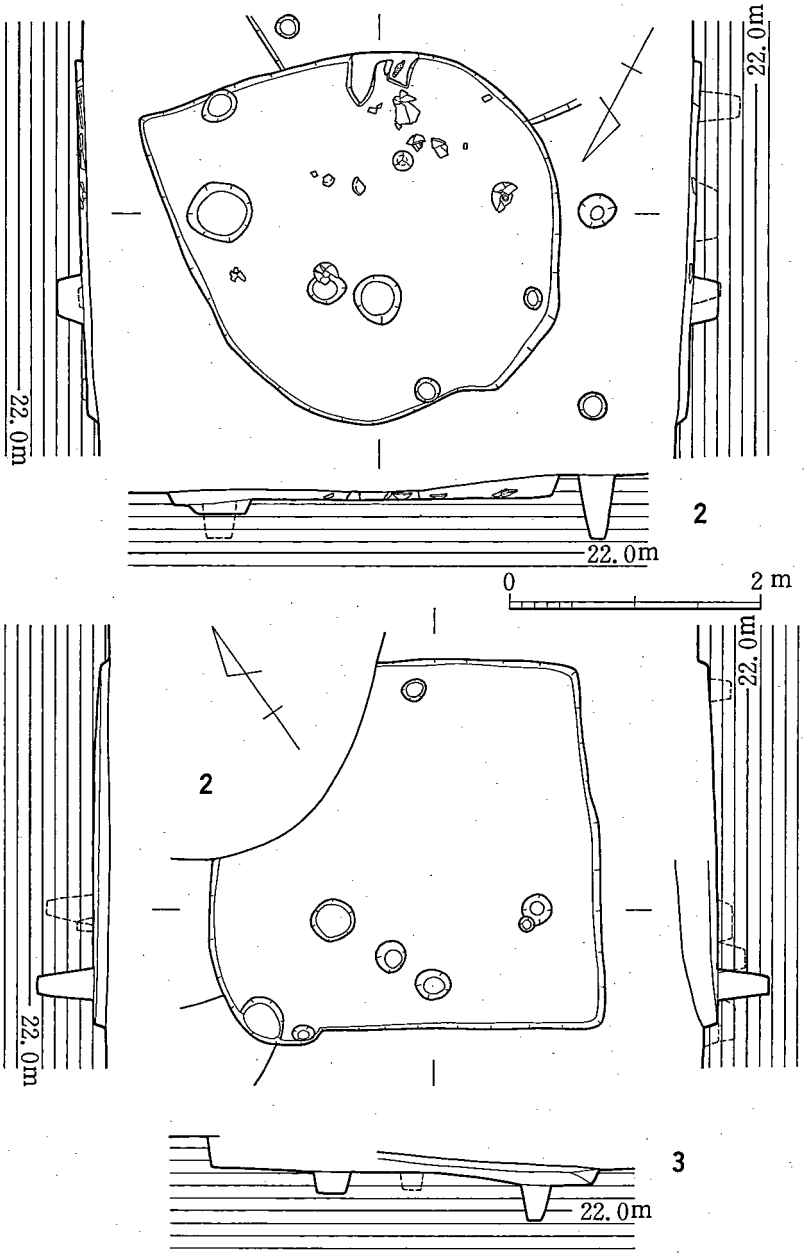
土師器高坏（4）　坏部は浅く、口縁部はナデて拡張気味にする。内外面横ヘラミガキ調整を行う。胎土には砂粒をほとんど含まず非常に精良で、赤茶色を呈す。口径26.2cm。太宰府からの搬入品。

須恵器蓋（5）　天井部が平坦で、扁平なつまみが付く。外面ヘラナデ後につまみを貼付する。焼成やや不良。口径14.4cm。

須恵器坏（6）　小型のもので、体部は直線的に開く。口径12.2cm。

須恵器甕（7）　肩部が張る甕の胴部で、内面は同心円当て具痕があり、外面はナデ消している。

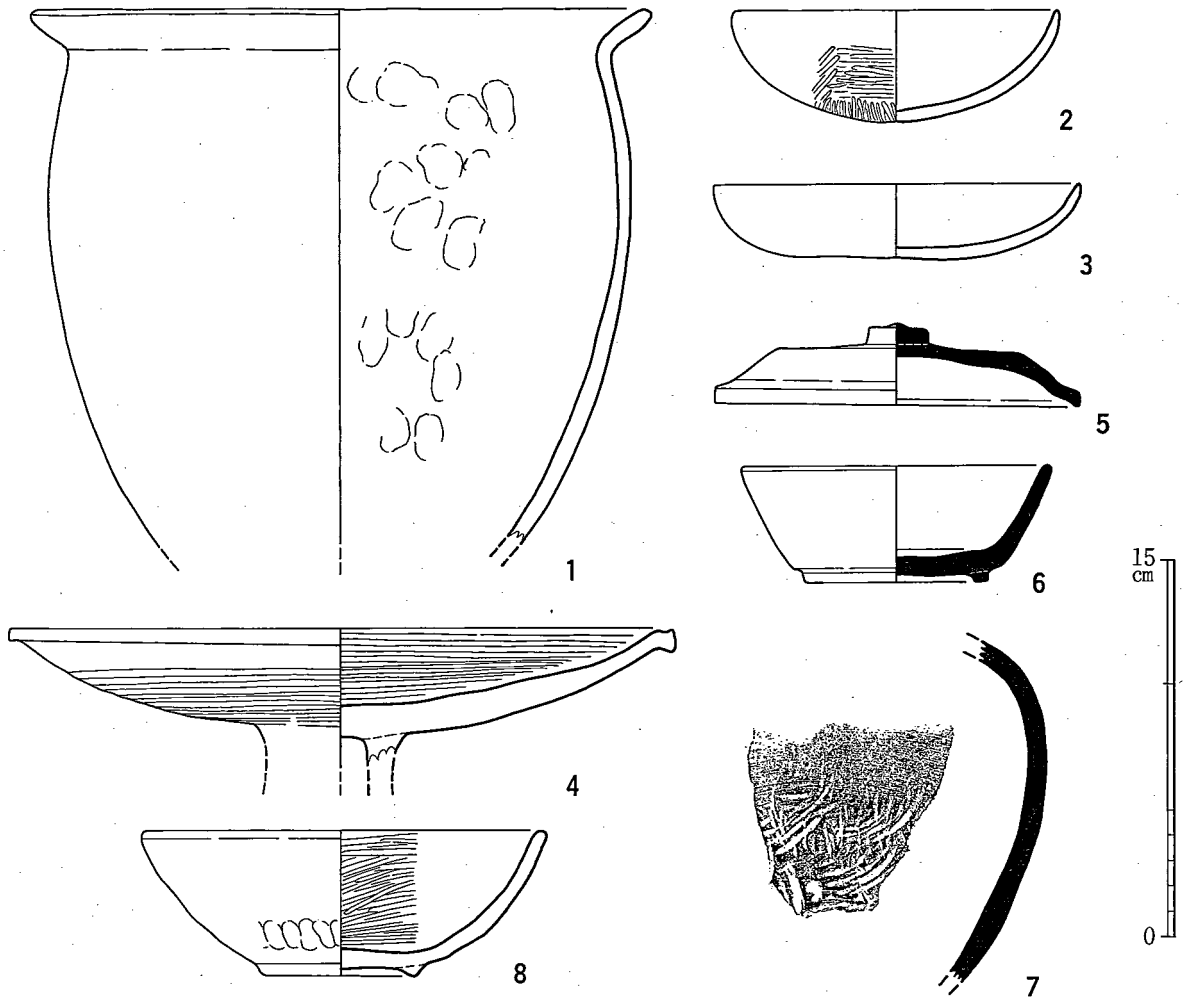
瓦器椀（8）　やや浅い椀に断面三角形の低い高台がつくもので、内面横ヘラミガキ、外面横ナデ調整を行う。体部下半には指圧痕が明瞭に認められる。胎土は比較的精良で、口縁部が黒色である以外は灰白色を呈す。口径15.7cm。12世紀後半のもので、混入品である。



第33図　2・3号竪穴住居跡実測図（1/60）

3号竪穴住居跡（図版9、第33図）

調査区中央東寄りに位置し、2号竪穴住居跡と重複するが、当住居跡の方が古い。平面形態は正方形で、東辺2.9m、南辺3.0mを測る小型の住居跡である。深さは南隅で10cm、東隅で10cm、西隅で25cm、中央で15cmを測り、西側が最も残りが良い。床面はほぼ水平で、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。床面でいくつかの柱穴を検出したが、P2・P3を主柱穴と考えている。出土土器は非常に少なく、図示できるものは無い。古墳時代前期か。



第34図　2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

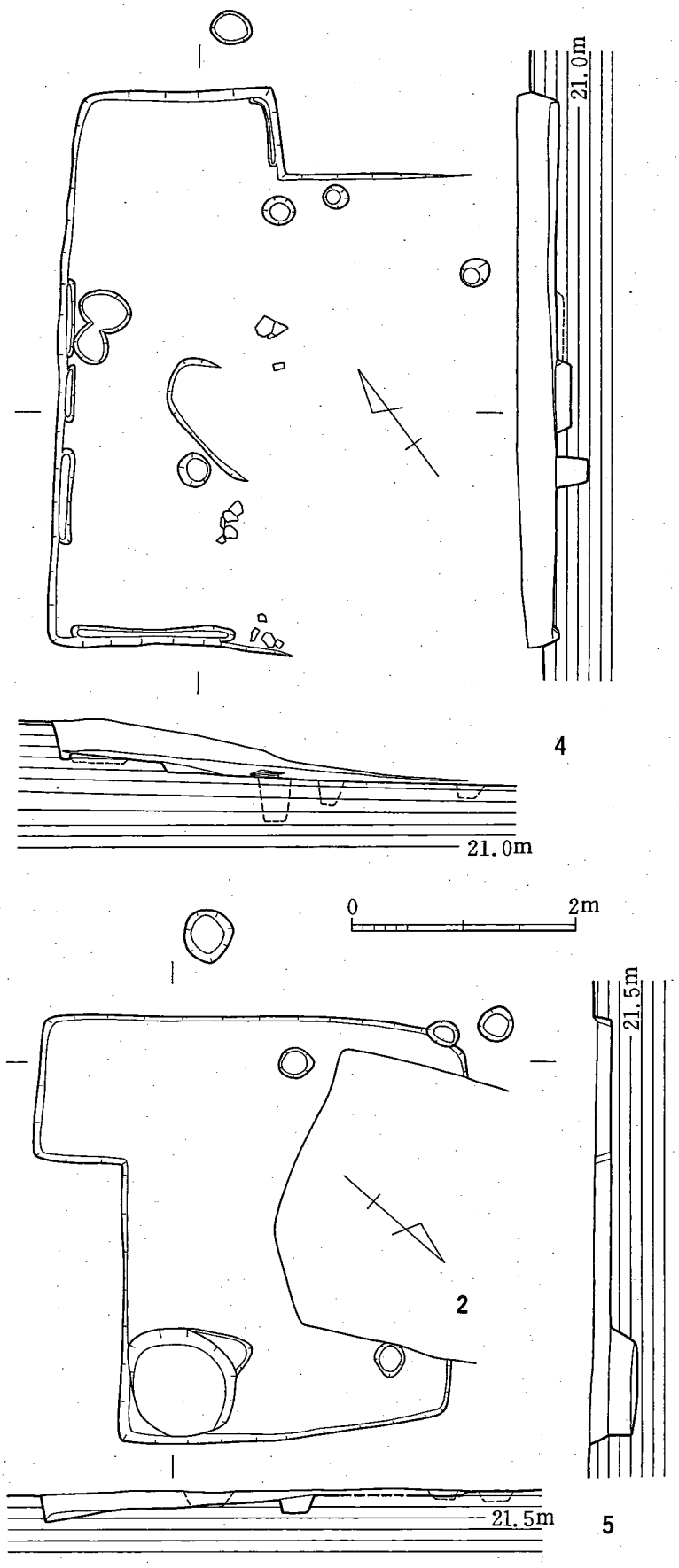
4号竪穴住居跡（図版9、第35図）

調査区中央東寄りに位置する。東側を大きく削平されるが、張り出しを持つ長方形プランとなるだろう。西辺4.8m、張り出し部は北辺1.8m、東辺0.8mを測る。深さは西隅で25cm、東隅で40cmを測る。床面中央に、東側を大きく削平された楕円形プランの掘り込みがある。恐らくこれが炉跡になるであろう。床面上では他にいくつかの柱穴を検出したが、配置が不規則で、明確に主柱穴と判断出来るものはない。また、壁際で壁小溝を部分的に検出した。壁の立ち上がりは急である。

出土土器（図版16、第36図）

壺（1～4）　1は球形胴の直口壺で、口縁部は短く直立する。内外面粗いハケ調整を行う。口縁部下にハケ工具による列点文を施文しており、西部瀬戸内の影響が認められる。胎土に砂粒を若干含み、茶色～灰茶色を呈す。2は大型壺の胴部で、最大径の部分に断面台形の刻目突帯を巡らせる。内外面ハケ調整を行う。胎土は角閃石を多く含んだ砂粒を若干含み、黄褐色を呈す。3は尖底気味の底部を有するもので、胴部最大径がやや下方にある。内面ハケ、外面はハケ後に底部付近をヘラ擦過調整する。胎土は比較的精良で、黄褐色を呈す。4は丸底のもので、器肉が非常に厚い。内外面ハケ調整を行うが、底部は内面指ナデ、外面ヘラ擦過調整となる。

甕（5・6）　5は甕の口縁部片で、肩は張らず、口縁部は弱く外反する。内面横ハケ、外面ナデ調整を行う。6は尖底となるもので、内外面ハケ調整を行う。胎土に角閃石は含まない。



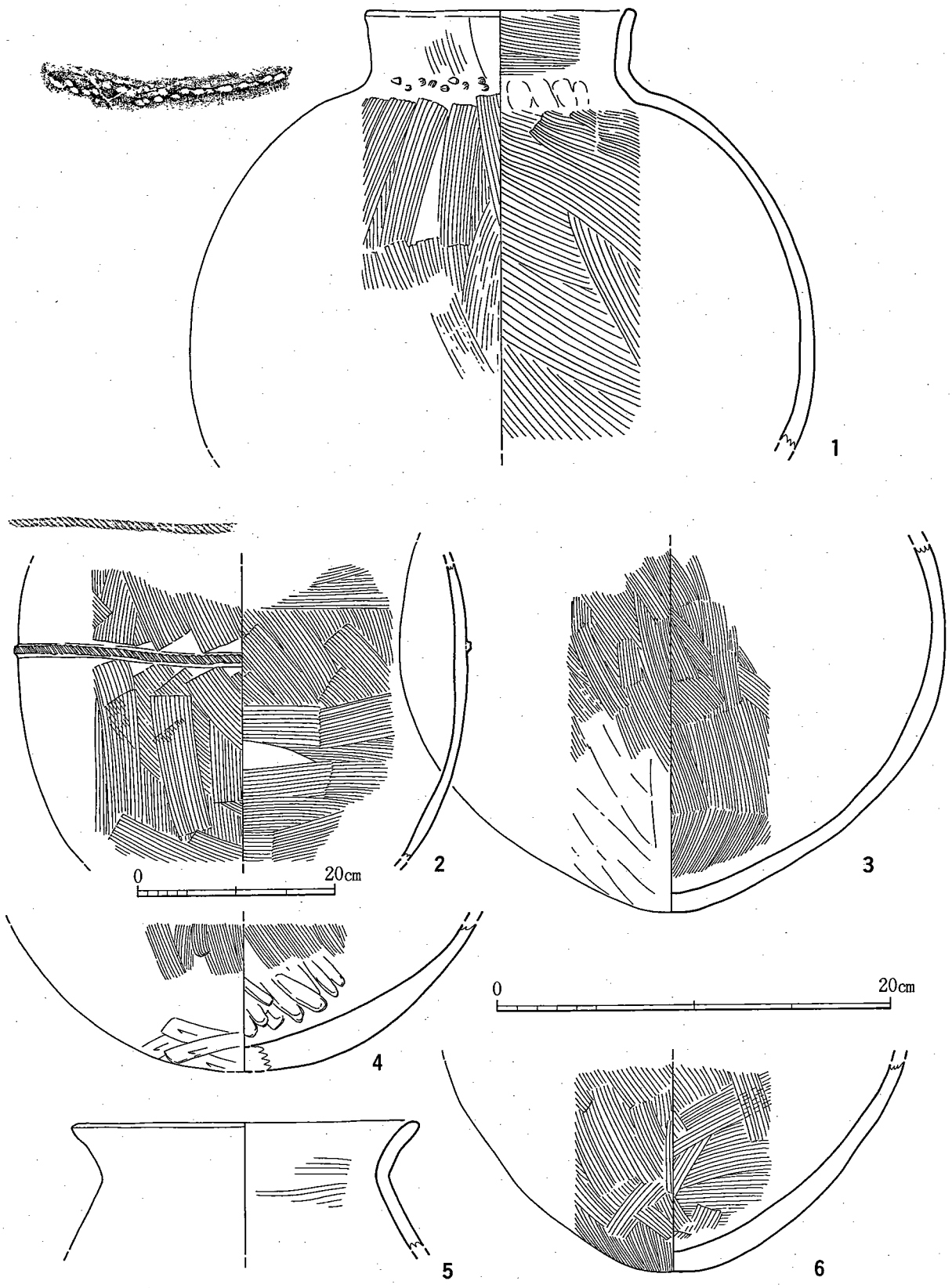
第35図　4・5号竪穴住居跡実測図（1/60）

5号竪穴住居跡（図版9、第35図）

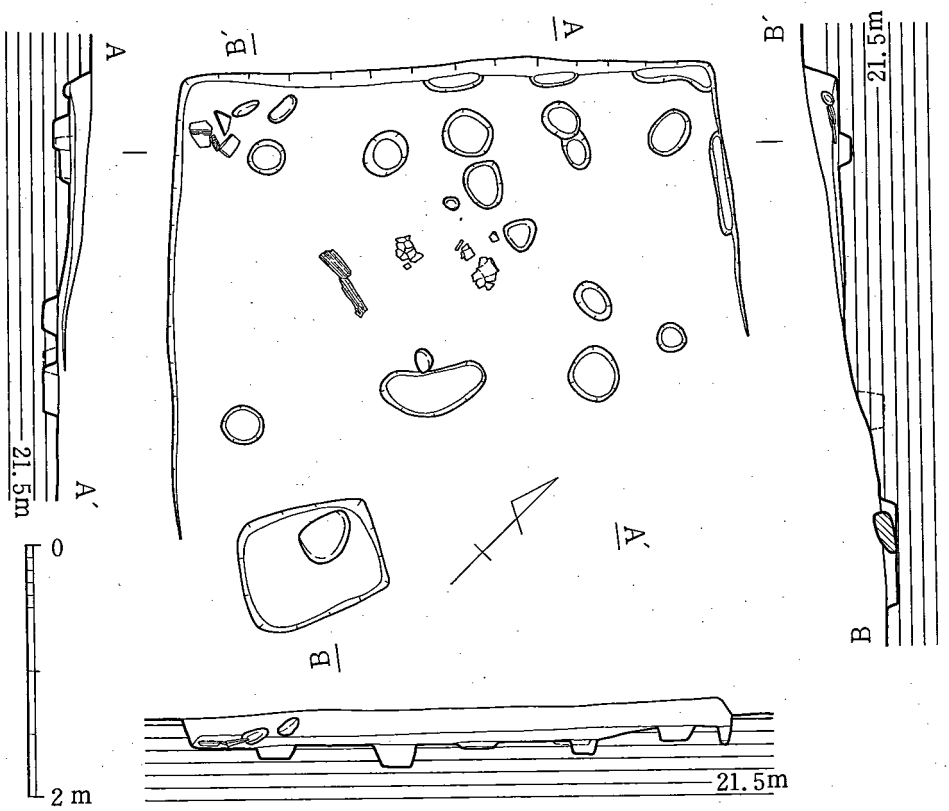
調査区中央に位置し、2号小竪穴式石室と重複するが、当竪穴住居跡の方が古い。平面形態は南側に張り出しを持つ方形プランとなり、東辺3.0m、北辺3.3m、張り出し部は南辺1.3m、東辺0.8mを測る。深さは南隅で25cm、北隅で5cmを測り、南側が最も残りが良い。床面東隅で土坑状の掘り込みp3を検出したが、当住居跡に伴う貯蔵施設の可能性を考えている。これ以外に床面で2つの柱穴を検出したが、どちらも浅く、当住居跡の主柱穴とはなり得ない。壁はやや急な立ち上がりとなる。遺物はわずかに出土したが、図示できるものは無い。

6号竪穴住居跡（図版10、第37図）

調査区西側に位置する。西辺で4.2mを測り、東側は大きく削平されるが方形プランの住居跡となるだろう。深さは西隅で25cm、北隅で20cmを測り、西側が最も残りが良い。南隅で方形の掘り込みを検出したが、当住居跡に伴う貯蔵施設としての機能を想定している。また床面においていくつかの柱穴を検出したが、どれも不規則な配置で掘り方も浅く、主柱穴と判断出来るものはなかった。壁はなだらかに立ち上がり、また北壁際では断続的な壁小溝を検出した。



第36図　4号竪穴住居跡出土土器実測図（1・3～6：1/3、2：1/6）



第37図　6号竪穴住居跡実測図（1/60）

遺物は古墳時代前期のものが1袋程度出土しているが、細片で図示できなかった。

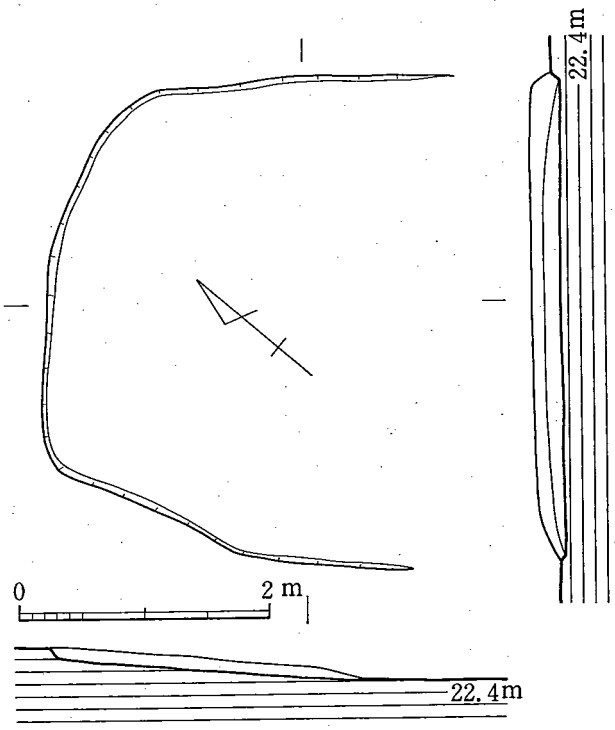
竪穴

3号竪穴（第38図）

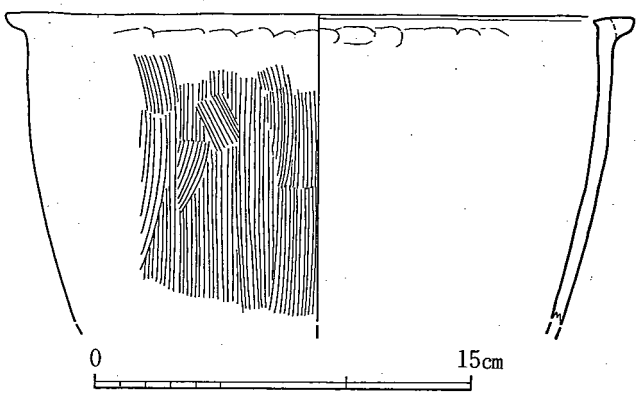
調査区中央に位置する。北西辺で3.1mを測り、南東側を大きく削平されるが、ほぼ方形プランとなるであろう。深さは北隅で23cm、東隅で20cmを測り、床面は北西から南東へと緩やかに下降する。当初この遺構を竪穴住居跡と考え、床面を注意深く精査したが、柱穴等は確認出来なかった。遺物は弥生時代中期初頭の甕がわずかに1点出土しただけである。

出土土器（第39図）

弥生土器甕（1）　口縁端部外面に小さな三角形突帯を貼付するもので、内面もわずかにつまみ出す。胴部はほとんど張らない。内面ナデ、外面縦ハケ調整を行う。胎土に粗砂・細砂を若干含み、黄褐色～灰褐色を呈す。



第38図　3号竪穴実測図（1/60）



第39図　3号竪穴出土土器実測図（1/3）

4号竪穴（図版10・11、第40図）

調査区南西隅に位置する。大半は調査区外へと伸展しており、全体の形状を把握し得ないが、調査した範囲では南辺5.8m、西辺6.5mを測る。深さは北隅で10cm、南隅で10cm、西隅で10cmを測り、底面はほぼ水平である。壁はやや急な立ち上がりとなる。中央およびその西側に、大きな土坑状の掘り込みを検出したが、深さはそれぞれ60cm、30cmを測る。中央の掘り込みの底面は平坦で、壁の立ち上がりも急であるが、西側の掘り込みは壁の立ち上がりも緩やかで、浅い皿状を呈す。遺物は布留（古）～（新）段階のものが出土している。

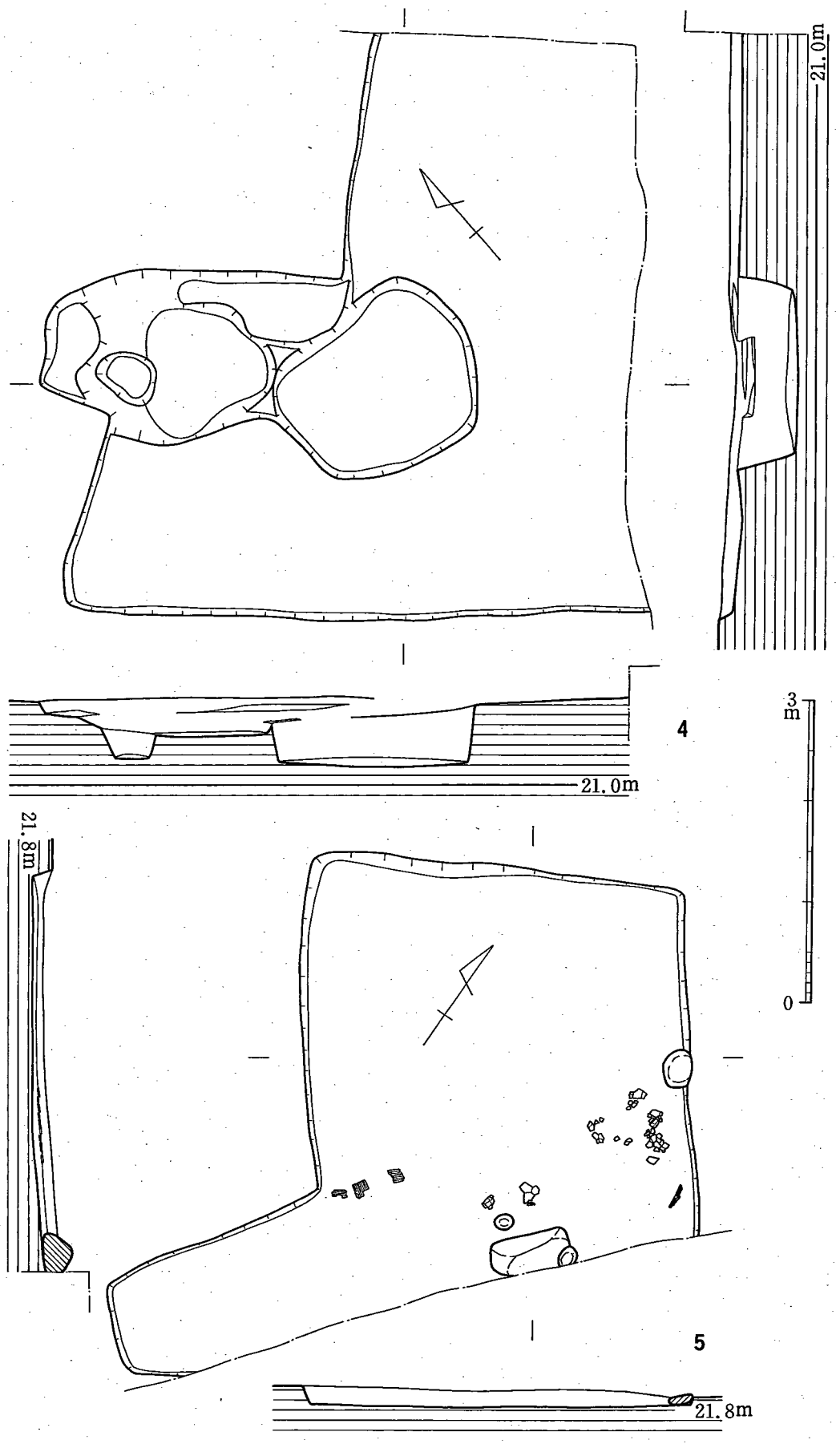
出土土器（図版17、第41図）

土師器壺（1～5）　1は球形胴丸底の壺で、頚部は強く締まり、口縁部は直線的に大きく開く。胴部内面はヘラケズリ、頚接合部は指オサエ、口縁部内外面横ナデ、胴部外面は横ハケ後ナデ消し調整を行う。胎土に角閃石を多く含んだ砂粒を若干含み、黄灰色を呈す。2・3はほぼ同形の小型丸底壺で、胴部最大径が上位にあり、頚部は締まらず、口縁部は短く外方へと開く。2は胴部内面横ヘラケズリ、外面ハケ、口縁部ハケ後横ナデ調整を行う。胎土に砂粒を若干含み、黄灰色を呈す。3は胴部内面ヘラナデ、外面縦ハケ、口縁部ハケ後横ナデ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ砂粒を多く含み、黄褐色を呈す。6は内湾気味に開きながら伸びる口縁部で、肩部はあまり張らない。全面横ナデ調整を行い、肩部内面には粘土接合痕が明瞭に認められる。胎土には微砂を若干含むが、角閃石はほとんど含まない。色調は肌灰色を呈す。5は大型壺の胴部で、最大径からやや下がった位置にX字刻目を入れた低い突帯を貼付する。刻目の工具はハケと同様の原体を使用する。内外面非常に細いハケ調整を行い、胎土は石英・長石・角閃石等の細砂粒を若干含む。色調は黄茶色を呈す。

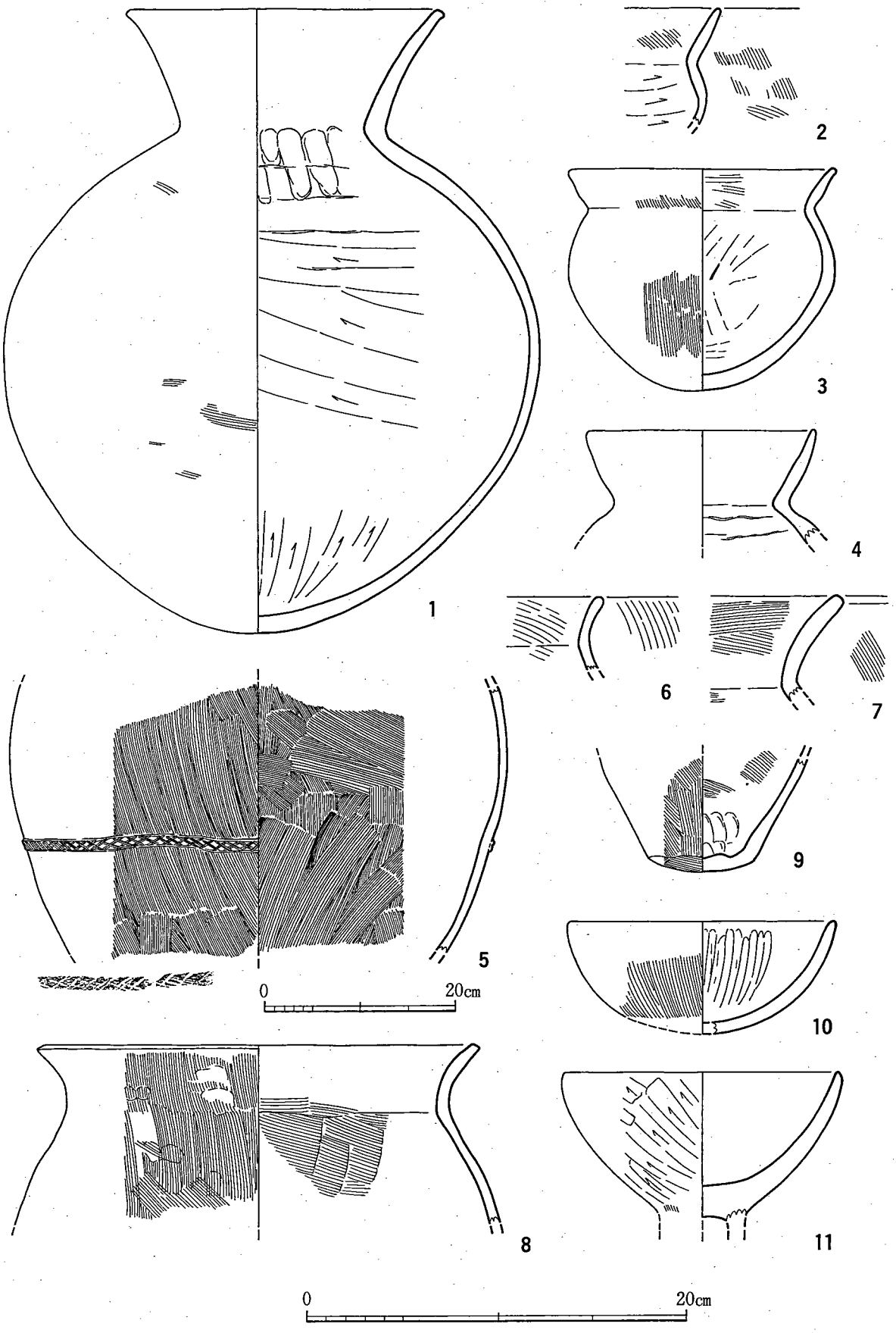
土師器甕（6～8）　6は緩く外反する口縁部で、内外面ハケ調整を行う。胎土に細砂をやや多く含み、肌茶色～暗褐色を呈す。7は直線的に外側へ伸びる口縁部で、端部を四角くおさめる。内外面ハケ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ砂粒を若干含み、茶肌色を呈す。8はやや外反する口縁部で、端部は四角くおさめる。肩はほとんど張らない。内外面ハケ後、口縁部を横ナデ調整する。外面に指圧痕が多く残る。胎土に角閃石を含んだ細砂をやや多く含み、黄灰色を呈す。

土師器椀（9・10）　9は平底に近い丸底で、内面底部付近は指オサエ、それ以外はハケ調整を行う。胎土は角閃石を含んだ微砂をやや多く含み、黄灰色を呈す。10は内面縦ヘラミガキ、外面縦ハケ後に口縁部を横ナデする。胎土に砂粒を若干含み、黄褐色を呈す。口径14.0cm。

土師器高坏（11）　半球形直口縁の坏部で、器肉は厚い。内面ナデ、外面ハケ後ヘラナデ調整を行う。胎土に角閃石を若干含んだ細砂をやや多く含み、黄茶色を呈す。



第40図　4・5号竪穴実測図（1/60）



第41図　4号竪穴出土土器実測図（1～4・6～11：1/3、5：1/6）

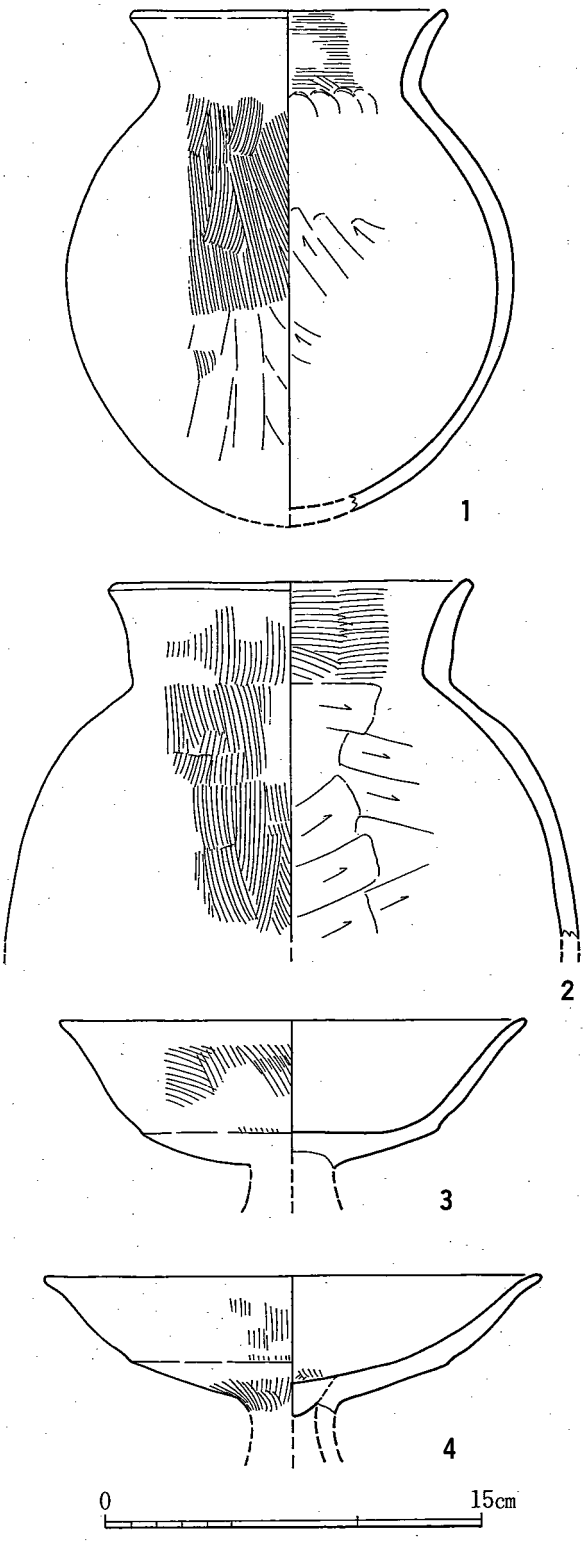
5号竪穴（図版11、第40図）

調査区南西隅に位置する。調査区外へと大きく伸展しているが、恐らく張り出しを持つ方形プランになるだろう。調査した範囲では、北西辺3.7m、北東辺3.4m、張り出し部は南西辺1.0m、西辺2.4mを測る。深さは北隅で5cm、西隅で15cm、南隅で20cmを測り、南西側が比較的残りが良い。床面直上で、ややまとまって土器が出土している。当初はこの竪穴を竪穴住居跡と考え、床面を注意深く精査したが、柱穴等を全く確認できず、住居跡との判断は出来なかった。壁は北西側がやや緩やかに立ち上がる以外は、比較的急な立ち上がりとなる。5世紀前半。

出土土器（図版17、第42図）

土師器甕（1・2）　1は球形胴の甕で、口縁部はわずかに外反しながら開く。胴部内面は板状工具によるナデ、外面は縦ハケ後下半を板状工具によるナデ、口縁部は内面横ハケ後に横ナデ調整を行う。胎土は角閃石を含んだ細砂をやや多く含み、色調は黄褐色を呈す。2はあまり肩の張らない甕で、口縁部は肩部近くが肥厚する。胴部内面横ヘラケズリ、外面縦ハケ、口縁部は内外面ハケ後横ナデ調整を行う。胎土は砂粒を若干含み、色調は褐色を呈す。

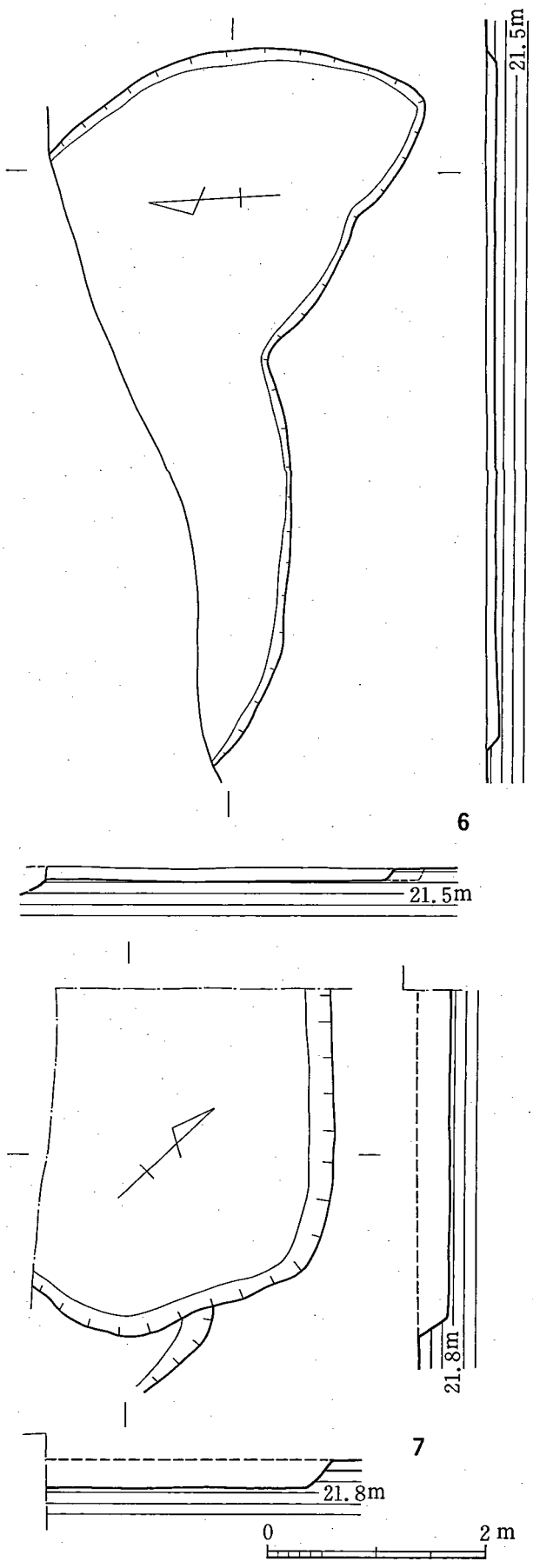
土師器高坏（3・4）　3は口縁部が緩く外反して伸びる。屈曲部にはほとんど稜が付かない。内面横ナデ、外面ハケ後横ナデ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ細砂をやや多く含み、赤茶色を呈す。4はわずかに内湾する程度の浅い椀部で、端部がわずかに外反する。内面横ナデ、外面ハケ後横ナデ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ細砂を若干含み、黄灰色を呈す。



第42図　5号竪穴出土土器実測図（1/3）

6号竪穴（第43図）

調査区南西側に位置する不整形プランの竪穴で、14号溝と重複しており、当竪穴の方が古い。長軸6.3m、短軸3.4mを測る。深さは東側で10cm、南側で10cm、西側で10cmを測り、底面はほぼ水平



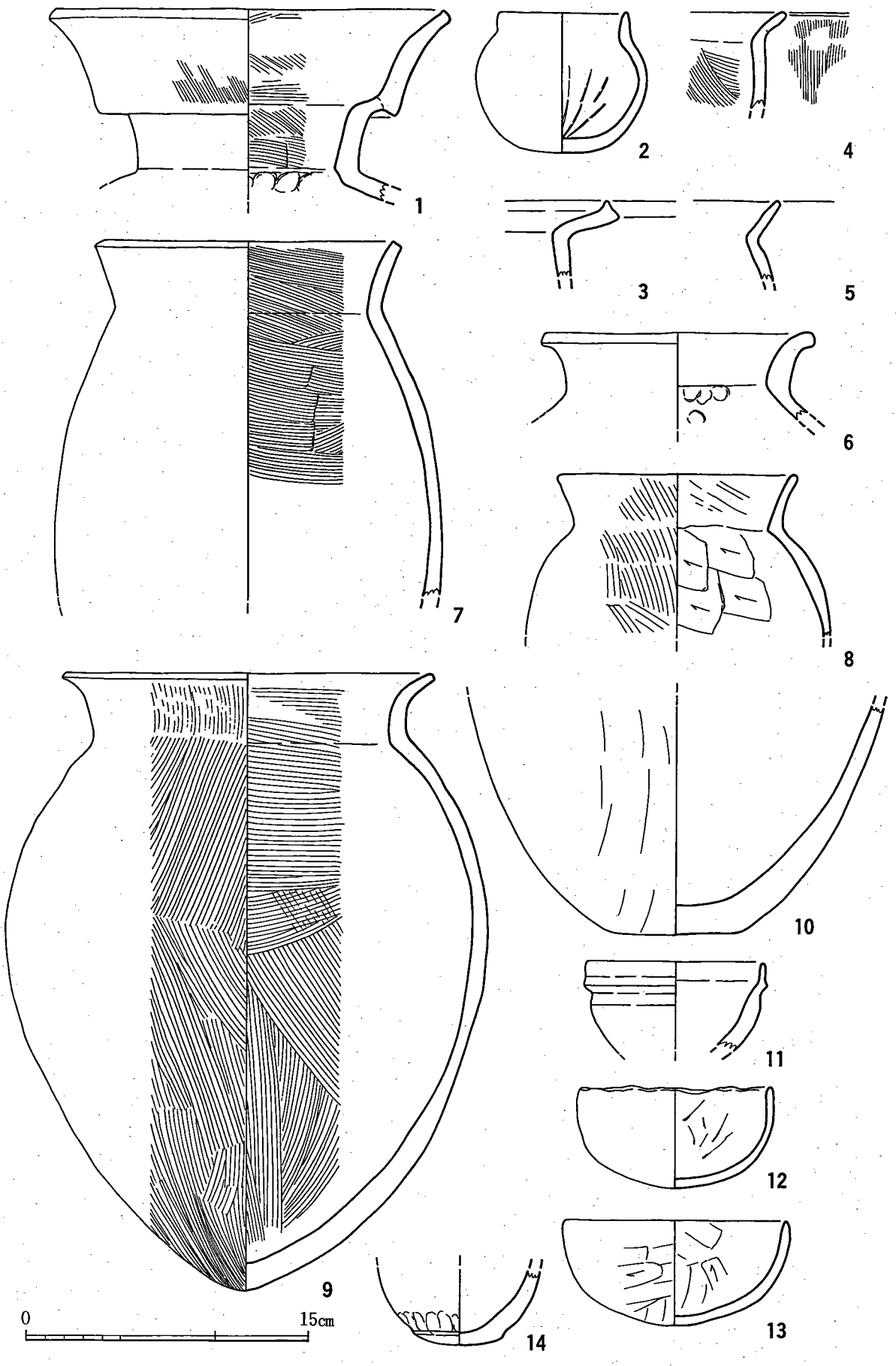
第43図　6・7号竪穴実測図（1/60）

である。覆土は暗茶灰色土を基本とし、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての多くの遺物が含まれていた。壁は比較的緩やかに立ち上がる。

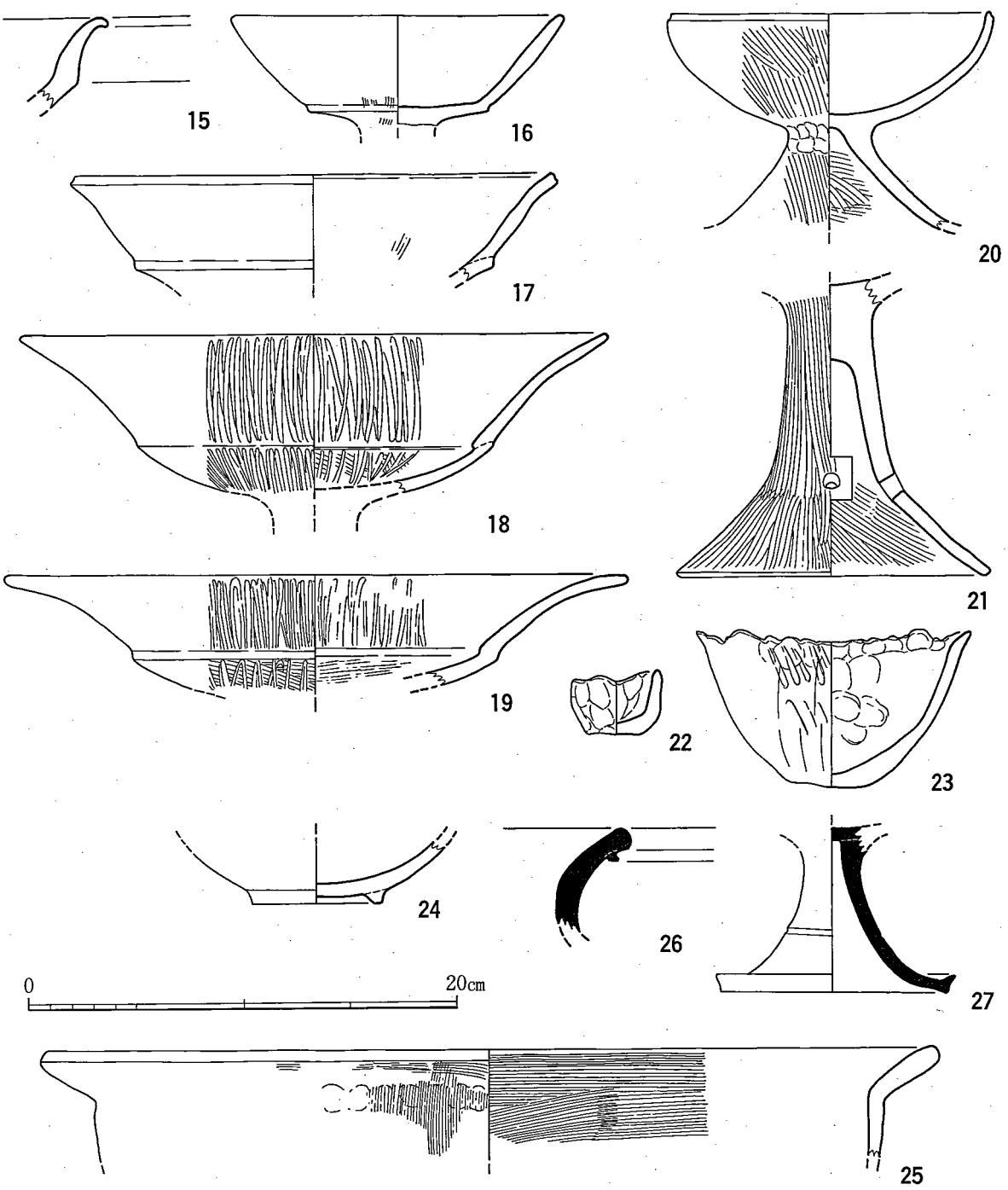
出土土器（図版17・18、第44・45図）

壺（1・2）　1は二重口縁壺で、頸部はやや開き気味に立ち上がり、屈曲部ははっきりした稜をなし、口縁部は外反する。端部を上方へわずかにつまみ出す。内外面ともハケ後に横ナデ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ砂粒を若干含み、肌灰色を呈す。2は平底に近い丸底の底部のもので、頸部は締まらず口縁部は短く直立する。内外面ナデ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ細砂をやや多く含み、黄灰色を呈す。

甕（3～10）　3は跳ね上げ口縁のもので、口縁部は強く屈曲する。胎土に角閃石を含んだ砂粒を若干含み、赤肌色を呈す。混入品。4は直立する胴部から、短く開く口縁部へと続くもので、内外面ハケ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ砂粒を若干含み、黄灰色を呈す。5は直線的に短く伸びる口縁部で、肩部はやや張り気味である。全面ナデ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ微砂を若干含み、肌色を呈す。6は口縁部が短く外反するもので、全面横ナデ調整を行う。暗灰色を呈し、焼成は瓦質に近い土師質である。混入品。7は長胴の甕で、口縁部は立ち気味に開く。端部は四角くおさめている。内面横ハケ、外面ナデ調整を行う。胎土に砂粒をやや多く含み、茶褐色を呈す。8は口縁部が直線的に開くもので、屈曲部内面の稜は鋭く、肩はあまり張らない。胴部内面横ヘラケズリ、外面ハケ、口縁部ハケ後横ナデ調整を行う。9は尖底の甕で、口縁部は外反しながら開く。全面ハケ後に口縁部を横ナデする。胎土に角閃石を含んだ微砂を若干含み、肌茶色を呈す。10は小さな平底の底部で、内面ナデ、外面ヘラナデ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ砂粒を若干含み、茶灰色を呈す。



第44図　6号竪穴出土土器実測図①（1/3）



第45図　6号竪穴出土土器実測図②（1/3）

椀（11～14）　11は口縁屈曲部より上方が直立するもので、全面ナデ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ砂粒を若干含み、黄茶色を呈す。12は口縁部が直立するもので、口縁部を指ナデ・指オサエで調整するため、端部がやや波打つ。内面ヘラナデ後ナデ、外面ナデ調整を行い、内面には工具痕が残る。胎土に砂粒を多く含むが角閃石は含まない。色調は黄茶色を呈す。13は内外面ヘラナデ調整を行う。胎土に微砂を若干含み、茶色を呈す。14は突レンズ状の底部のもので、内外面ナデ調整を行う。体部下方に指オサエが明瞭に認められる。胎土に角閃石を含んだ微砂を若干含み、黄茶色～黒色を呈す。

高坏（15～21）　15は坏部上方が外反するもので、端部をさらに外側につまみ出す。内外面横ナデ調整を行う。胎土に砂粒を若干含み、灰肌色を呈す。16は破片資料を図面上で反転復元したもので、口径の復元にはやや不安が残る。胎土は角閃石を含んだ微砂をやや多く含み、色調は暗黄茶色を呈す。17は高坏としたが、二重口縁壺の口縁部であろう。上半は凸凹を有しながら外側へ開く。口縁端部は四角くおさめる。内面ハケ後横ナデ、外面横ナデを行う。胎土に角閃石を含んだ微砂をやや多く含み、薄黄灰色を呈す。18は屈曲部より上方が外反しながら長く伸びるもので、屈曲部の稜は明瞭である。内外面ハケ後ヘラミガキ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ微砂をやや多く含み、黄灰色を呈す。19は18と似るが、坏部がやや浅い。内外面ハケ後、ヘラミガキ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ砂粒をやや多く含み、灰肌色を呈す。20は坏部が椀形のもので、内面ナデ、外面ハケ調整を行う。脚部は接合部から大きく広がり、内外面ハケ調整を行う。接合部外面は指オサエが明瞭である。胎土に角閃石を含んだ微砂を若干含み、黄茶色を呈す。21は柱状の脚部のもので、裾部は屈曲せず緩やかに開く。裾部上方に4方向の円形透かし孔を配置する。内外面ハケ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ微砂をやや多く含み、肌灰色を呈す。

手づくね椀（22・23）　22は平底の小型のもので、内外面指オサエ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ砂粒をやや多く含み、黒灰色を呈す。22は小さな平底のもので、内面指オサエ、外面タタキ後ヘラナデ調整を行う。胎土に砂粒をやや多く含み、黄褐色を呈す。

土師器椀（24）　断面三角形の低い高台を付けたものである。胎土は比較的精良で、黄肌色を呈す。

須恵器甕（26）　口縁端部は丸く、その下方に突帯を貼付する。全面回転ナデ調整を行う。胎土には砂粒をほとんど含まない。

須恵器高坏（27）　裾端部をつまみ出して拡張させる。脚部中程に一条の不明瞭な沈線を巡らせる。

土師質土鍋（28）　口縁部が短く屈折するもので、端部がわずかに肥厚する。内面横ハケ、外面縦ハケ調整を行う。胎土に砂粒をやや多く含み、赤茶色～茶褐色を呈す。

7号竪穴（図版12、第43図）

調査区南西隅に位置する。大半が調査区外へと伸展しており、全体の規模・形状は不明である。調査した範囲では北辺2.5m、東辺2.5mを測る。深さは北側で30cm、南側で30cm、中央で30cmを測り、底面はほぼ水平である。壁は緩やかな立ち上がりとなる。遺物は出土していない。

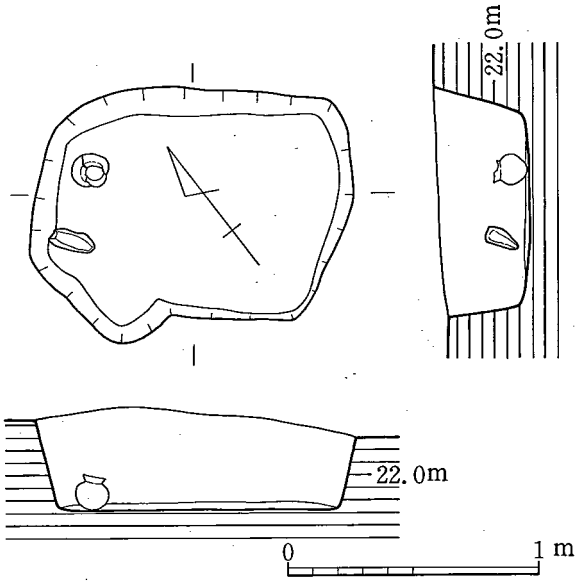
土坑

11号土坑（図版12、第46図）

調査区中央東よりに位置する長方形プランの土坑で、長軸2.4m、短軸1.8mを測る。深さは西側で80cm、東側で60cmを測り、西側の方が残りが良い。底面はほぼ水平で、壁は比較的急に立ち上がる。北隅の床面直上から完形に近い壺が1個体出土した。

出土土器（図版19、第47図）

土師器壺（2）　扁球形胴のもので、最大形は中央付近にある。口縁部はあまり開かず直線的に伸びる。胎土は精良で、黄灰色を呈す。5世紀前半前後。



第46図　11号土坑実測図（1/30）

12号土坑（第48図）

調査区東側に位置する不整形の土坑で、長軸3.3m、短軸1.6mを測る。深さは北側で15cm、南側で5cmを測り、床面は南から北へと僅かに下降している。壁は緩やかに立ち上がる。土坑内ではいくつかの円礫を検出したが、人為的に据え置かれた様子ではない。遺物は出土していない。

13号土坑（第48図）

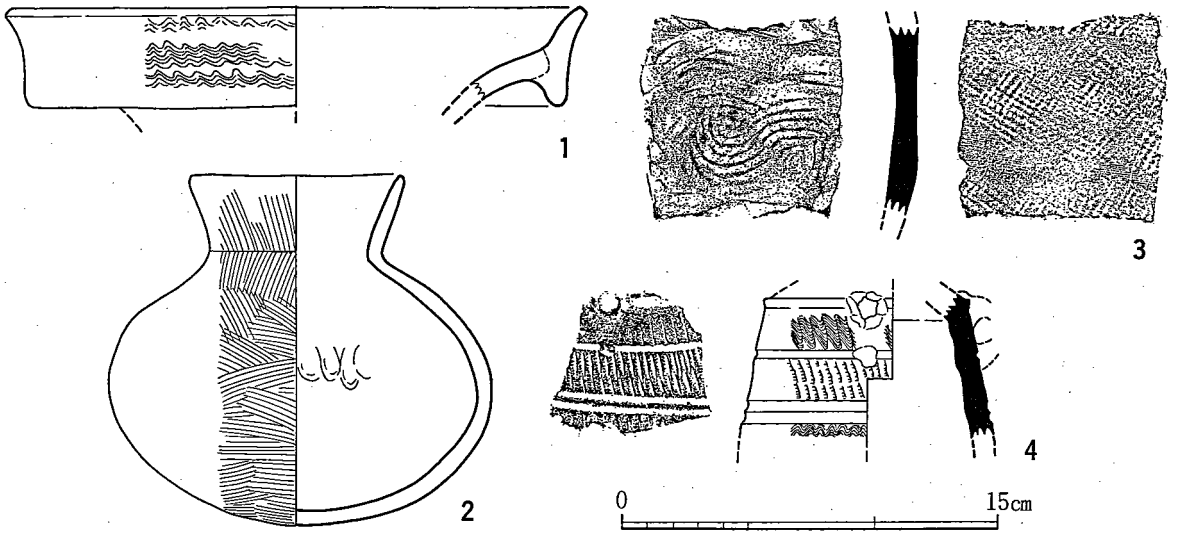
調査区中央西端に位置する土坑で、大半は調査区外へと続くが、楕円形に近いプランとなるだろう。調査した範囲では、長軸2.2m、短軸0.85mを測る。深さは北側で30cm、南側で28cmを測り、底面はほぼ水平となる。壁は比較的緩やかに立ち上がる。土坑内で多くの円礫を検出した。遺物は図示した以外に数点出土しただけである。

出土土器（第47図）

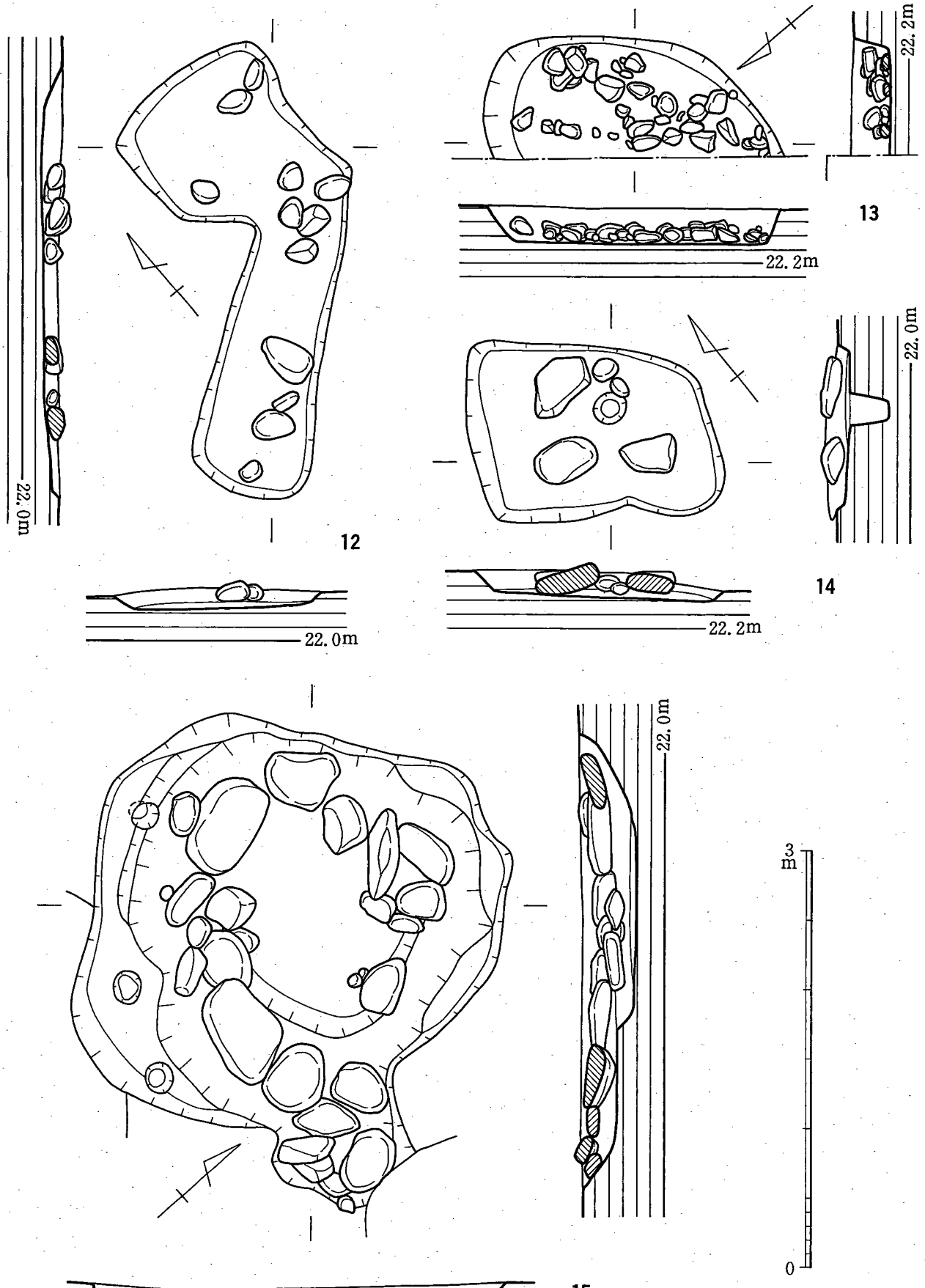
須恵器甕（3）　胴部破片で、内面同心円当て具痕、外面格子目タタキ後横カキ目調整を行う。

14号土坑（第48図）

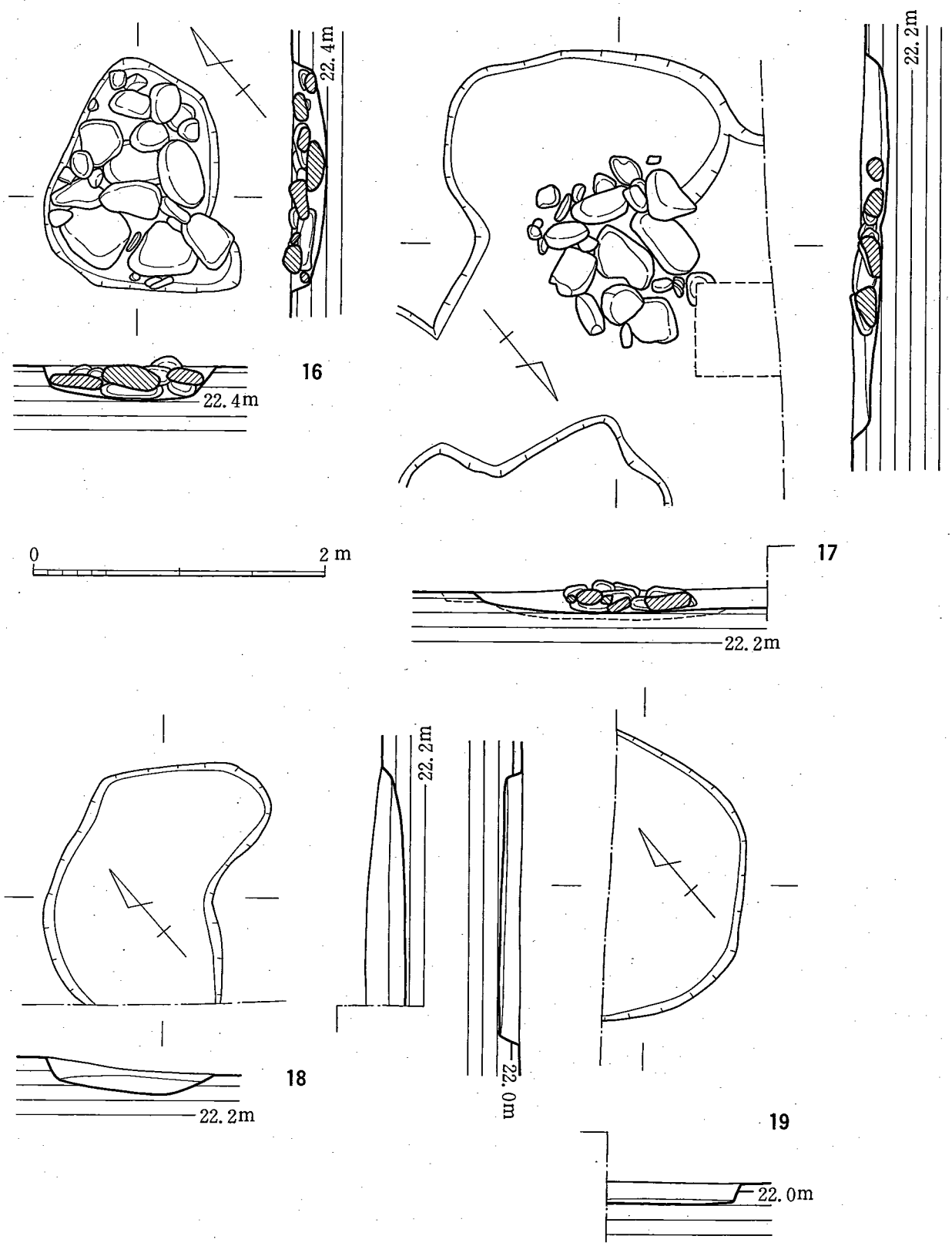
調査区中央付近に位置する不整方形プランの土坑で、北辺2.2m、西辺2.5mを測る。深さは南東端で25cm、中央で40cm、北西端で15cmを測り、壁は周辺から中央へ向かってすり鉢状に落ち込む。



第47図　D地区土坑出土土器実測図（1/3）



第48図　12～15号土坑実測図（1/40）



第49図　16～19号土坑実測図（1/40）

土坑壁面に張り付いた状態で、多くの円礫を検出した。遺物は１袋程度出土したが、青磁片等も混ざっており、かなり混入している。

出土土器（第47図）

須恵器器台（4）　細片の図上での反転復元図であり、径にやや不安が残る。外面に突帯及び沈線を巡らせ、その間に櫛描波状文、櫛描刺突文を配置する。突帯上及び沈線上の2箇所に剥離痕があり、小像を貼付していたものと思われる。内面は回転ナデ調整を行う。胎土には微砂を若干含み、灰色を呈す。

15号土坑（第48図）

調査区中央付近に位置する不整方形プランの土坑で、長軸1.6m、短軸1.3mを測る。深さは西側で15cm、東側で10cmを測り、底面は西から東へ若干下降する。壁は西側は緩やかに、それ以外はやや急に立ち上がる。床面中央付近でピット1個を、また土坑内で円礫数個を検出した。遺物は数点出土したが、細片で図示できない。

16号土坑（第49図）

調査区中央付近に位置する不整形プランの土坑で、長軸1.6m、短軸1.3mを測る。深さは北側で15cm、中央で25cm、南側で15cmを測り、壁は周辺から中央へ向かってすり鉢状に落ち込む。壁はやや急な立ち上がりとなる。土坑内からは多くの円礫が検出されたが、遺物は出土していない。

17号土坑（第49図）

調査区中央西端に位置する不整形の土坑で、長軸2.5m、短軸2.0mを測る。深さは南側で15cm、中央で15cm、北側で10cmを測り、底面はほぼ水平である。壁は比較的緩やかな立ち上がりとなる。土坑中央では大小多くの円礫が集中した状態で検出された。遺物は近世陶磁器がわずかに出土したが、細片で図示できない。

18号土坑（第49図）

調査区中央西側に位置する土坑で、長軸1.6m、短軸1.2mを測る。南側は調査区外へと伸びているが、楕円形に近いプランとなるであろう。深さは北側で10cm、中央で30cm、南側で30cmを測り、壁は周辺から中央へ向かってすり鉢状に落ち込む。出土遺物は図示したもの以外に近世陶磁器が若干出土している。

出土土器（第47図）

弥生土器壺（1）　東北部九州で散見されるタイプの二重口縁壺で、細長い粘土帯を外側から貼り付け、口縁部を上下に拡張させた形となる。上端部はやや外反する。外面には6本1単位の粗い櫛描波状文を3段巡らせるが、粗い施文のため工具が届いておらず、所々で途切れる。胎土には石英・長石・角閃石・赤色粒をやや多く含んでおり、在地のものである。色調は肌色を呈す。混入品。

19号土坑（第49図）

調査区西側北端に位置する土坑で、大半は調査区外へと伸展する。調査した範囲では長軸2.0m、短軸0.95mを測る。深さは北側で10cm、中央で15cm、南側で15cmを測り、底面はほぼ水平である。壁はやや急な立ち上がりとなる。遺物は数点出土したが、細片で図示できない。

溝

11号溝（第50図）

調査区北端に位置する溝で、長さ11.9ｍにわたって東西方向に直線的に伸びる。幅は東側で50㎝、中央で60㎝、西側で65㎝を測る。深さは東側で22㎝、中央で20㎝、西側で15㎝を測る。断面は逆台形となり、壁は比較的急な立ち上がりとなる。

12号溝（第50図）

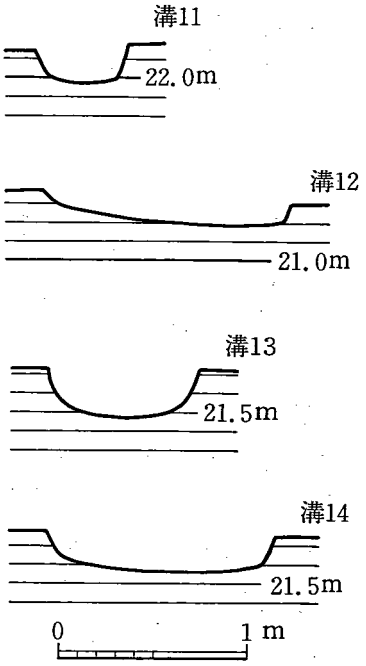
中央付近に位置する溝で、東西方向に直線的に伸びる。長さは7.3ｍ、幅は東側で1.2ｍ、中央で1.3ｍ、西側で0.7ｍを測る。深さは東側で15㎝、中央で15㎝、西側で10㎝を測る。断面は逆台形に近く、壁は比較的急な立ち上がりとなる。

13号溝（第50図）

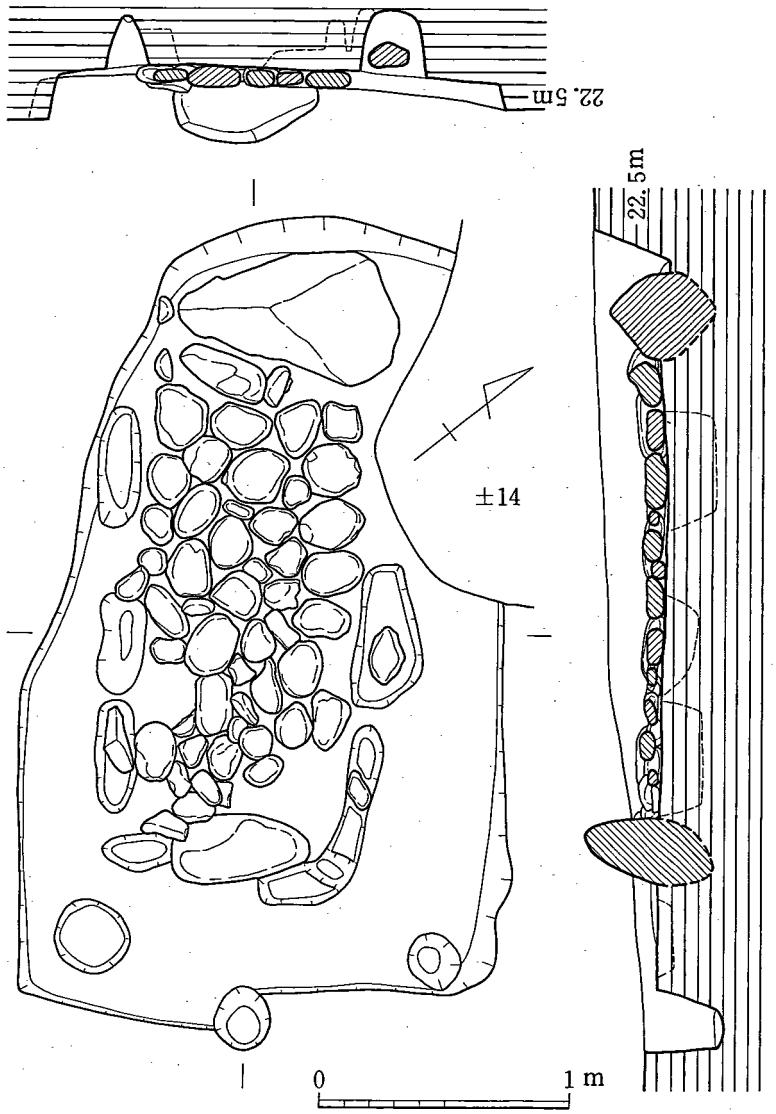
調査区西側に位置する溝で、北西－南東方向に直線的に伸びる。北西側は調査区外へと続き、また南東側は削平を受け、途切れる。長さは17.0ｍ、幅は北側で63㎝、中央で65㎝、南側で82㎝を測る。深さは北側で16㎝、中央で20㎝を測る。断面は蒲鉾形に近く、壁は急な立ち上がりとなる。溝内には大小の円礫が多く検出された。

14号溝（第50図）

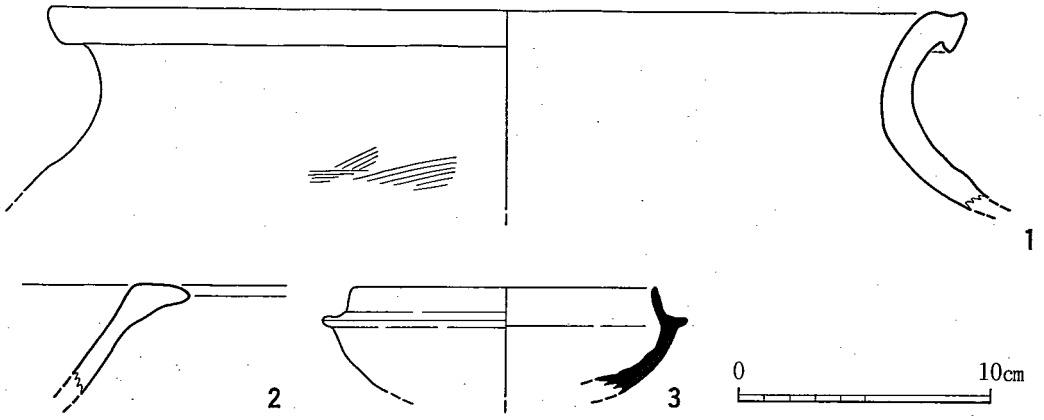
調査区西側に位置する溝で、東西方向に直線的に伸びる。６号竪穴と重複するが、当溝の方が新しい。東側は削平を受けており、途切れる。長さは17ｍ、幅は西側で1.2ｍ、中央で1.2ｍ、東側で1.3ｍを測る。深さは西側で20㎝、中央で20㎝を測る。断面は逆台形に近く、壁はやや急な立ち上がりとなる。



第50図　11～14号溝断面図
実測図（1/40）



第51図　１号小竪穴式石室実測図（1/30）



第52図　１号小竪穴式石室出土土器実測図（1/3）

小竪穴式石室

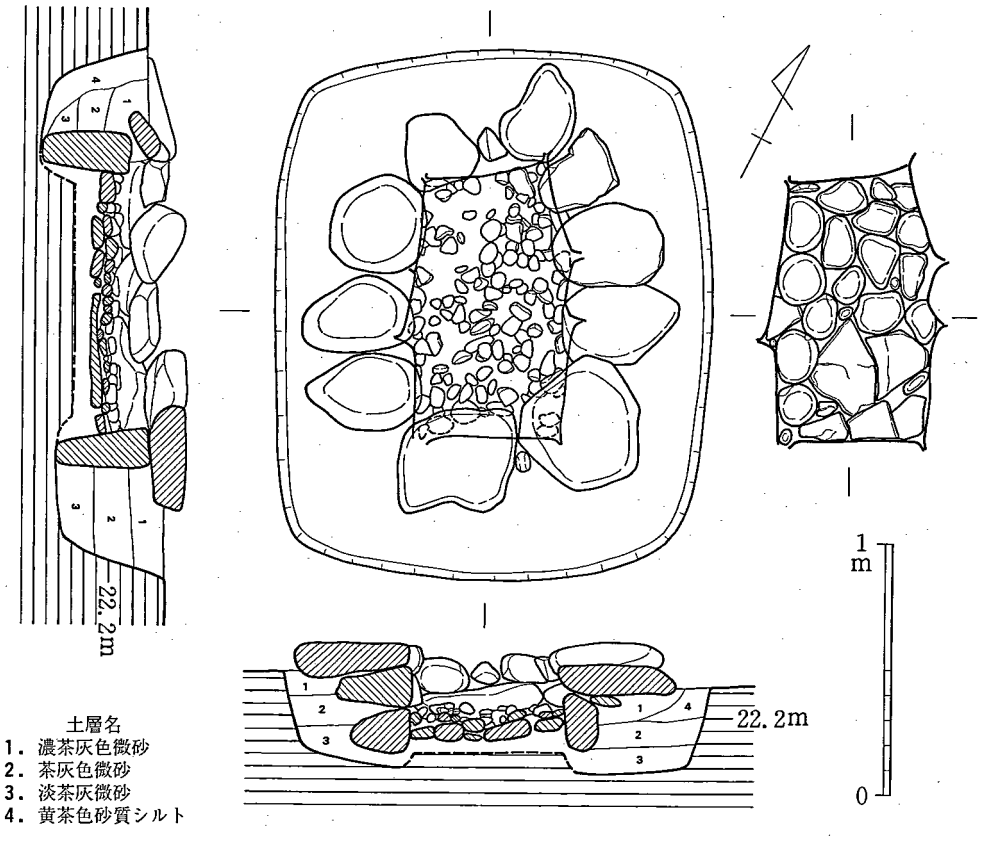
１号小竪穴式石室（図版12、第51図）

調査区中央に位置し、主軸を北西－南東に向ける。14号土坑と重複しており、当石室の方が古い。石室は大きく削平されており、腰石は両小口以外は全て取り除かれていた。北側小口の方が大きな腰石を採用しており、こちら側に頭位を向けるものと思われる。床面には20～30cm程度の扁平な河原石を平坦面を上に向けて敷き詰めている。墳丘、周溝等は全く確認出来なかった。長軸1.8m、北側幅0.9m、南側幅0.8mを測る。石室掘りかたは長軸3.2m、短軸1.8mを測る。遺物は若干出土しているが、確実に遺構に伴うと言えるものはない。

出土土器（第52図）

土師器甕（1）大型の甕で、口縁端部を上下に短くつまみ出して拡張させる。口縁部は横ナデ、肩部外面はハケ調整を行う。胎土に微砂をやや多く含む。口径36.4cm。

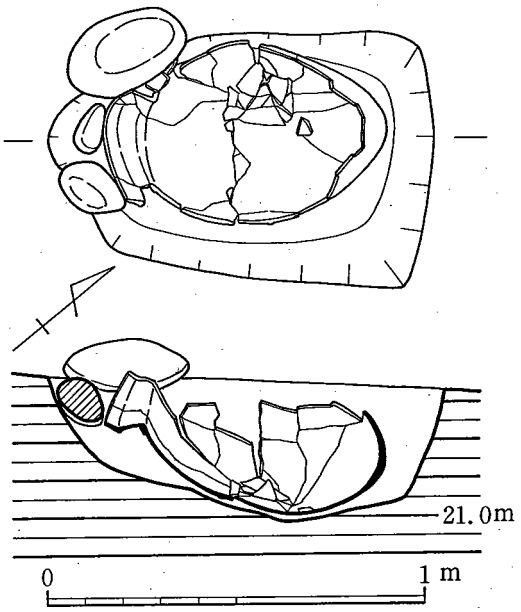
土師器鉢（2）口縁端部を外側につまみ出し、更に肥厚させる。全面的に風



第53図　２号小竪穴式石室実測図（1/30）

化が進んでいるが、内外面ナデ調整を行う。胎土に砂粒をやや多く含み、赤褐色を呈す。

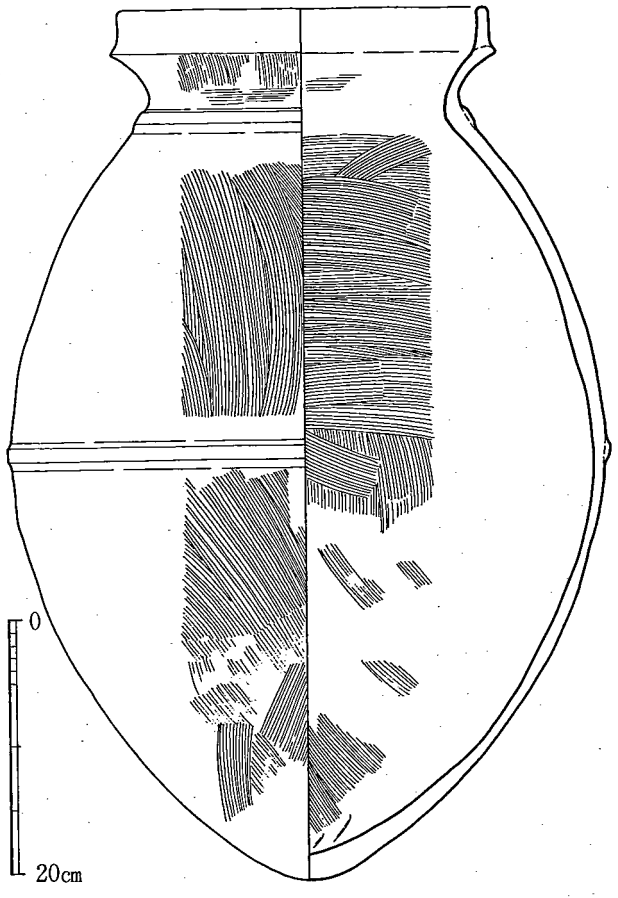
須恵器坏（3） 立ち上がりはやや内傾する。胎土は比較的精良で、くすんだ灰色を呈す。口径11.8cm。



第54図 1号壺棺墓実測図（1/20）

2号小竪穴式石室（図版13、第53図）

調査区中央に位置し、主軸を北西－南東に向ける。5号竪穴住居跡と重複するが、当石室の方が新しい。天井部は失われており、側壁は最も残りの良い所で3段目まで残る。南西側側壁に2個、北東側側壁に3個、両小口にそれぞれ1個の腰石を据え、その上に扁平な石を平積みしている。使用している石材は全て河原石である。床面には30cm前後の扁平な河原石を平坦面を上に向けて敷き詰めており、さらにその上面に小礫を敷き詰めている。墳丘・周溝等は全く確認出来なかった。長軸1.1m、短軸は北側で0.53m、南側で0.6mを測る。石室掘りかたは長軸2.1m、短軸1.75mを測る。遺物は出土していない。



第55図 1号壺棺実測図（1/6）

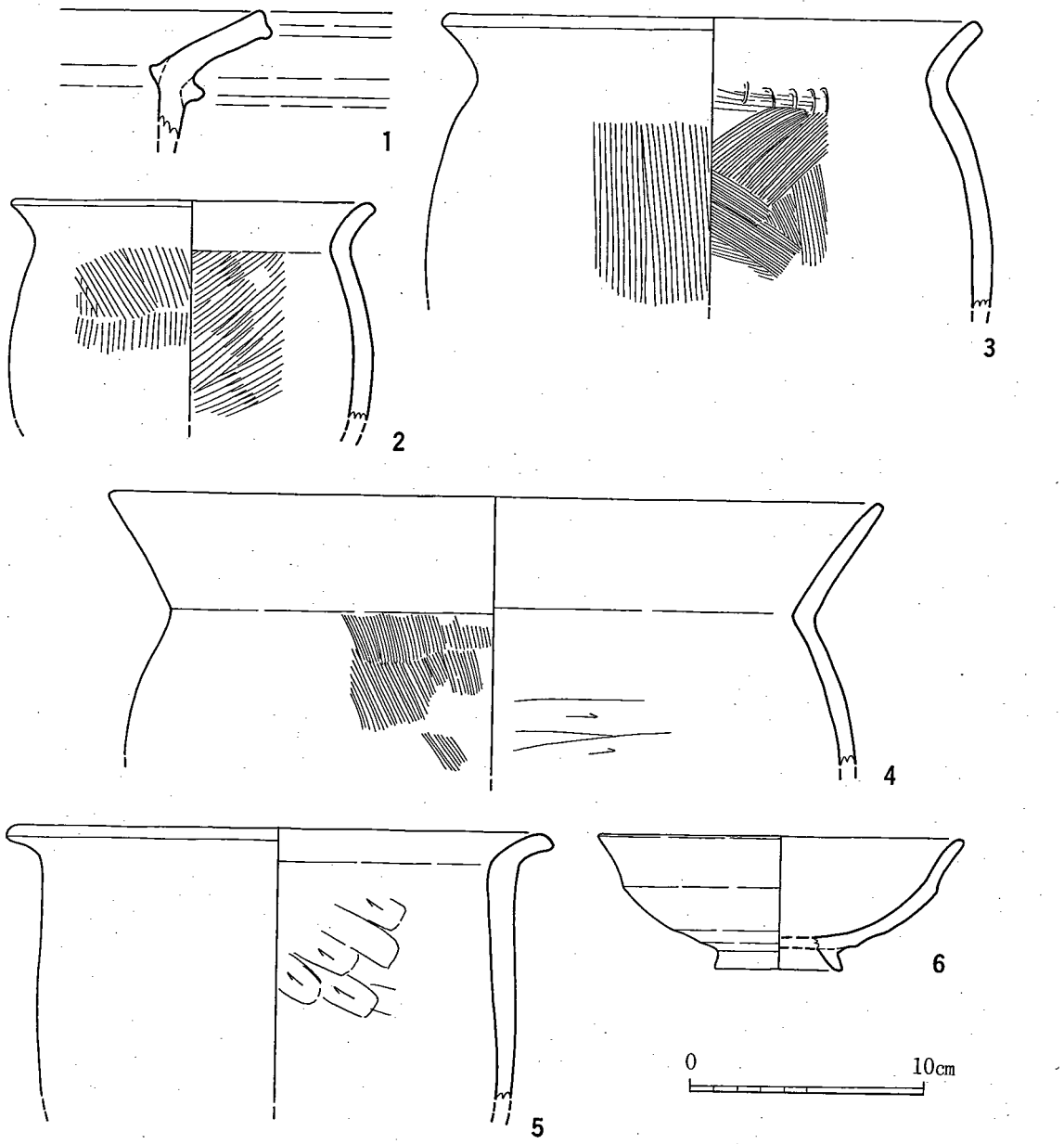
壺棺墓

1号壺棺墓（図版13、第54図）

主軸をS-40°-Eにとり、傾斜角は23°を測る。上部は大きく削平される。墓壙は長軸1.03m、短軸0.65mを測る長方形プランで、壙底は北側に向かって若干下降する程度である。棺は単棺で、口縁部周辺から3個の河原石を検出しており、木蓋のおさえに使用した可能性もある。棺内からは何も出土していない。古墳時代前期。

出土土器（図版19、第55図）

壺棺（1） 二重口縁の大型壺である。頸部は短く開き、その端部上面に粘土帯を貼付して口縁部とする。口縁部は短く直立し、端部は丸くおさめる。胴部は砲弾型で、最大径は中央付近にあり、底部は尖底である。頸部下および胴部最大径に、断面台形の低い突帯を巡らす。口縁



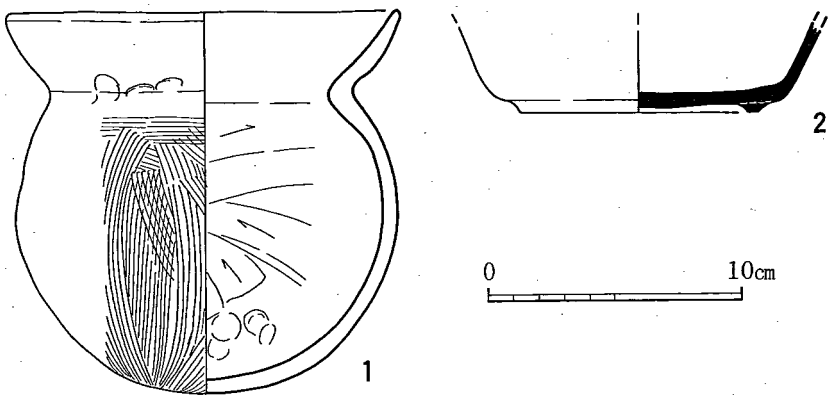
第56図　D地区ピット出土土器実測図（1/3）

部は横ナデ、それ以外はハケ調整を行う。胎土は石英・長石・角閃石等の細砂を若干含み、肌灰色～肌茶色を呈す。口径29.6cm、器高69cm。

D地区ピット出土土器（図版19、第56図）

甕（1～5）　1は大型甕の口縁部で、屈曲部内外面に三角突帯を巡らす。口縁端部は四角く仕上げる。内外面横ナデ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ微砂を多く含み、肌灰色を呈す。2は口縁部が短く外反するもので、胴径と口径がほぼ等しい。口縁部は横ナデ、胴部は内外面ハケ調整を行う。胎土に砂粒をやや多く含み、肌灰色を呈す。3は2と器形が似る。口縁部横ナデ、胴部内外面ハケ調整を行う。胎土は角閃石を含んだ砂粒を若干含み、くすんだ黄灰色を呈す。4は口縁部が直線的に開きながら長く伸びるもので、端部を尖り気味にする。口縁部は横ナデ、胴部は内面横ヘラ

ケズリ、外面縦ハケ調整を行う。胎土に細砂を多く含み、黄灰色を呈す。焼成はやや軟質である。5は胴部が直立し、口縁部は短く外反する。口縁部は横ナデ、胴部内面はヘラによる擦過、外面ナデ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ砂粒をやや多く含み、肌灰色～黒灰色を呈す。



第57図　その他の土器実測図（1/3）

土師器椀（6）　6は高台を有したやや浅い椀で、口縁部が外反する。色調は暗茶灰色を呈す。口径15.6cm、器高5.6cm。

D地区その他の土器（第57図）

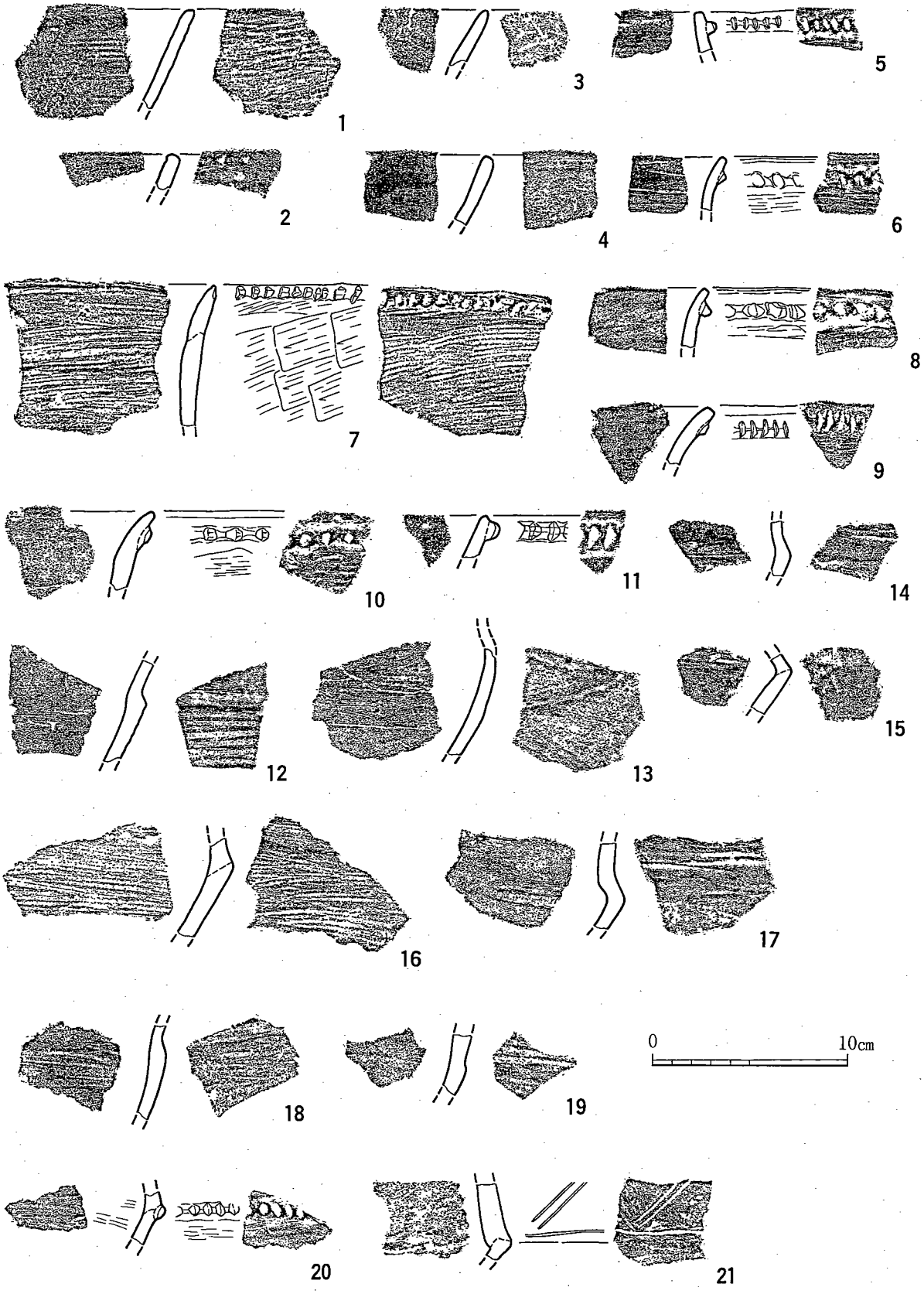
土師器甕（1）　ラベルを紛失し、出土位置が不明のものである。胴部は丸く、頸部はあまり締まらず、口縁部はやや内湾して開く。口縁部は胴部最大径より大きく、また頸部付けねの稜は不明瞭である。口縁部は横ナデ、胴部内面はヘラケズリ、外面はハケ調整を行う。胎土に角閃石を含んだ砂粒をやや多く含み、黄灰色を呈す。

須恵器坏（2）　表採品。高台は低く、やや内側に寄る。高台径9.4cm。

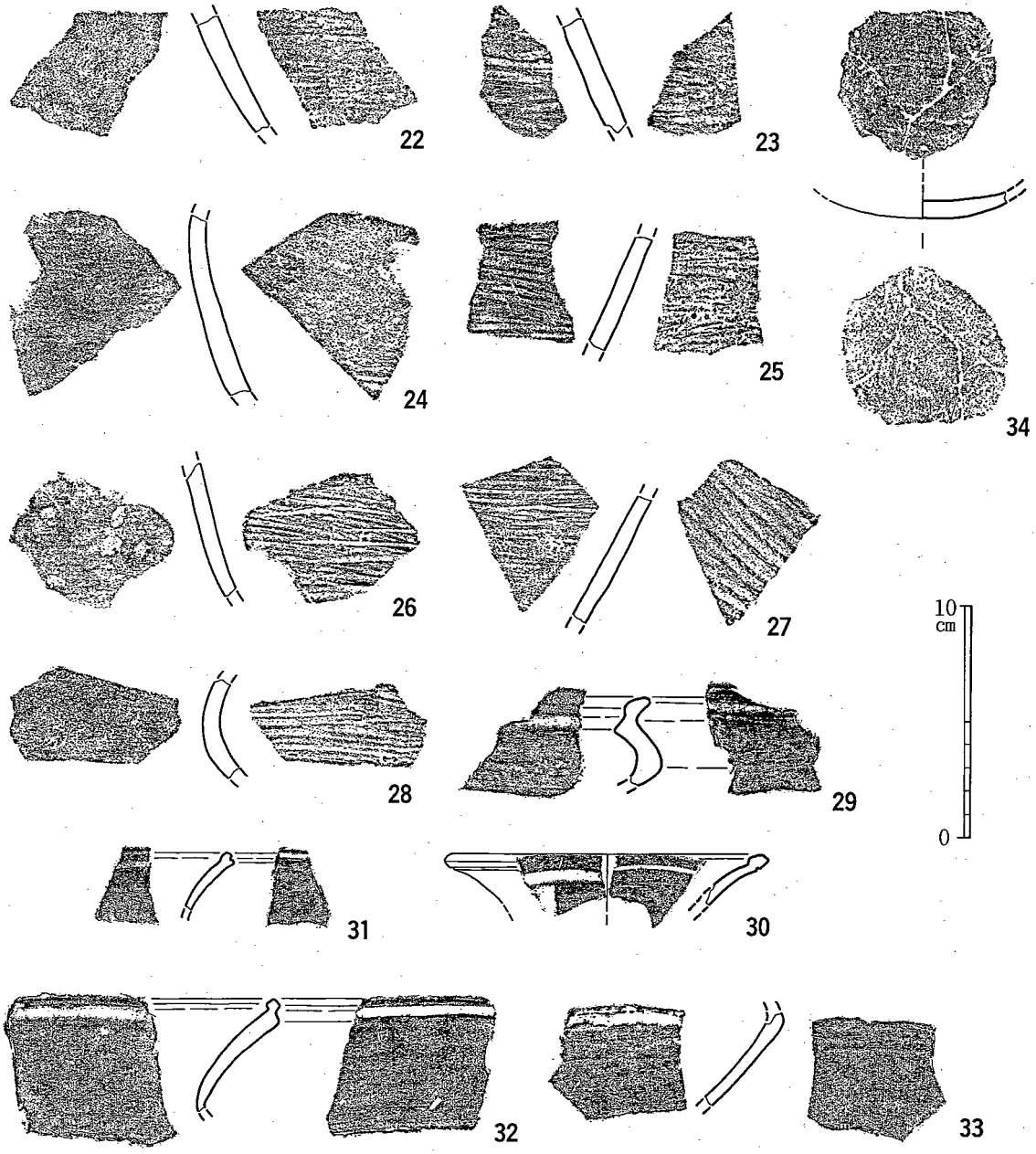
5　その他の遺物

縄文晩期・弥生早期土器（図版20、第58・59図）

粗製深鉢（1～29）　1～4は直口縁のもので、2は端部が尖り気味となり、他は丸くおさめる。内面はナデまたは横擦過、外面横擦過調整である。5～11は刻目突帯文深鉢。5は口縁部が内傾し、突帯の刻目はヘラ状工具による小さな刻目である。内外面横擦過。6は外反しながら立ち上がるもので、突帯は小さく、刻目は大きく鈍い。内外面横擦過。7は直立するもので、口縁端部外側に直接刻目を施す。刻目は比較的大きく、ハケ目原体を使って施文される。内外面横擦過調整。8は外反気味に立ち上がるもので、刻目は大きく深く施文される。内外面横擦過調整。9は外傾するもので、小さな突帯を巡らす。刻目は小さい。突帯付近以外は横擦過調整。10は外傾するもので、突帯は低く、刻目はやや疎である。内外面横擦過。11は口縁端部に接して突帯が貼付される。刻目はハケ原体を使用し、大きく密に施文される。12～21は肩屈曲部片である。12は外面に稜をもつが、ほとんど屈曲しない。内面ナデ、外面二枚貝による横擦過。13は接合部で剥離する。内外面横擦過。14は屈曲部上方が直立するもので、内外面横擦過調整。15は屈曲部から上方が内傾するもので、内外面横擦過。16は屈曲部から上方が直立気味に立ち上がる。内外面横擦過。17は屈曲部から上方が一旦内傾し、さらにその上が直立するもの。内外面横擦過。18はほとんど屈曲せず、外面に稜を有すのみである。内外面横擦過。19は屈曲が弱く、上方は直立する。20は屈曲部に刻目突帯を貼付す



第58図　縄文晩期・弥生早期土器実測図①（1/3）



第59図　縄文晩期・弥生早期土器実測図②（1/3）

るもので、形の整った刻目を深く密に施文する。21は屈曲部から上方がやや内傾しながら立ち上がるもので、外面に沈線による文様を施文する。内外面横ナデ調整。22～28は胴部片で、22～25は内傾する肩部、26は強く外反する肩部、27・28は胴下半部。

精製浅鉢（29～34）　29は肩部から短く内傾し、更に口縁部が外反するもので、口縁部は断面三角形に近い。全面横ナデ調整を行う。30は口縁部が玉縁状のもので、口縁部下に一条の沈線を巡らす。細片資料を図上で復元したため、口径にやや不安が残る。全面横ナデ調整を行う。31・32は口縁端部をつまみ出したもの。31は全面横ミガキ、32は全面横ナデ調整を行う。33は肩接合部で剥離したもの。内面横ミガキ、外面横ナデ調整を行う。34はボウル状浅鉢の底部。

挿図番号	種 類	出土場所	内面調整	外面調整	色 調	登録番号
1	粗製深鉢	D地区包含層	横擦過	横擦過	黄灰色～黒褐色	165
2	粗製深鉢	6号竪穴	横ナデ	横ナデ	黄灰色	215
3	粗製深鉢	D地区ピット	横ナデ	横擦過	灰褐色	312
4	粗製深鉢	6号竪穴	ナデ？	横擦過	黒褐色	211
5	粗製深鉢	6号竪穴	横ナデ	横擦過	黄茶色～茶色	219
6	粗製深鉢	6号竪穴	横擦過後ミガキ	横擦過	暗黄褐色	208
7	粗製深鉢	D地区ピット	横擦過	横擦過	黒～黄褐色	306
8	粗製深鉢	1号小石室	横擦過	横擦過	茶色～黒褐色	293
9	粗製深鉢	6号竪穴住居跡	横擦過	横擦過	灰肌色～暗褐色	288
10	粗製深鉢	B地区包含層	横擦過	横擦過	暗褐色	264
11	粗製深鉢	6号竪穴	横ナデ	横ナデ	茶色～黒褐色	218
12	粗製深鉢	11号土坑	ナデ？	二枚貝擦過	暗褐色	297
13	粗製深鉢	D地区包含層	横擦過	横擦過	黒～黄灰色	308
14	粗製深鉢	D地区包含層	横擦過	横擦過	黄灰色	302
15	粗製深鉢	6号竪穴	ナデ	横擦過	黒褐色～暗茶色	
16	粗製深鉢	D地区ピット	横擦過	横擦過	暗褐色～黄褐色	305
17	粗製深鉢	6号竪穴	横擦過	横擦過	赤茶色～黒色	207
18	粗製深鉢	D地区ピット	横擦過	横擦過	黄褐色	304
19	粗製深鉢	6号竪穴	横擦過	横擦過	黒色～黄褐色	209
20	粗製深鉢	D地区ピット	横擦過	横擦過	褐色	303
21	粗製深鉢	B地区ピット	ナデ	横ナデ	肌灰色～黄灰色	58
22	粗製深鉢	6号竪穴	横擦過	横擦過	黒色～黄褐色	203
23	粗製深鉢	D地区ピット	横擦過	横擦過	黒褐色～黄褐色	310
24	粗製深鉢	6号竪穴	横擦過	横擦過	黒色～黄茶色	201
25	粗製深鉢	4号竪穴住居跡	横ミガキ	横擦過	黄灰色～暗褐色	287
26	粗製深鉢	6号竪穴	横擦過	横擦過	黒色～赤茶褐色	206
27	粗製深鉢	C地区包含層	横擦過	横擦過	灰褐色	103
28	粗製深鉢	6号竪穴	横擦過	横擦過	黒色～黄茶色	202
29	精製浅鉢	C地区包含層	横ナデ	横ナデ	暗灰褐色	
30	精製浅鉢	C地区包含層	横ナデ	横ナデ	灰肌色	102
31	精製浅鉢	6号竪穴	横ミガキ	横ミガキ	黒褐色～暗黄褐色	
32	精製浅鉢	6号竪穴	横ミガキ	横ミガキ	黒色	
33	精製浅鉢	D地区ピット	横ミガキ	横ナデ	黒色～黄褐色	
34	精製浅鉢	D地区ピット	ナデ	ナデ	黒色～茶褐色	298

第2表　縄文晩期・弥生早期土器観察表

土製品（図版21、第60図）

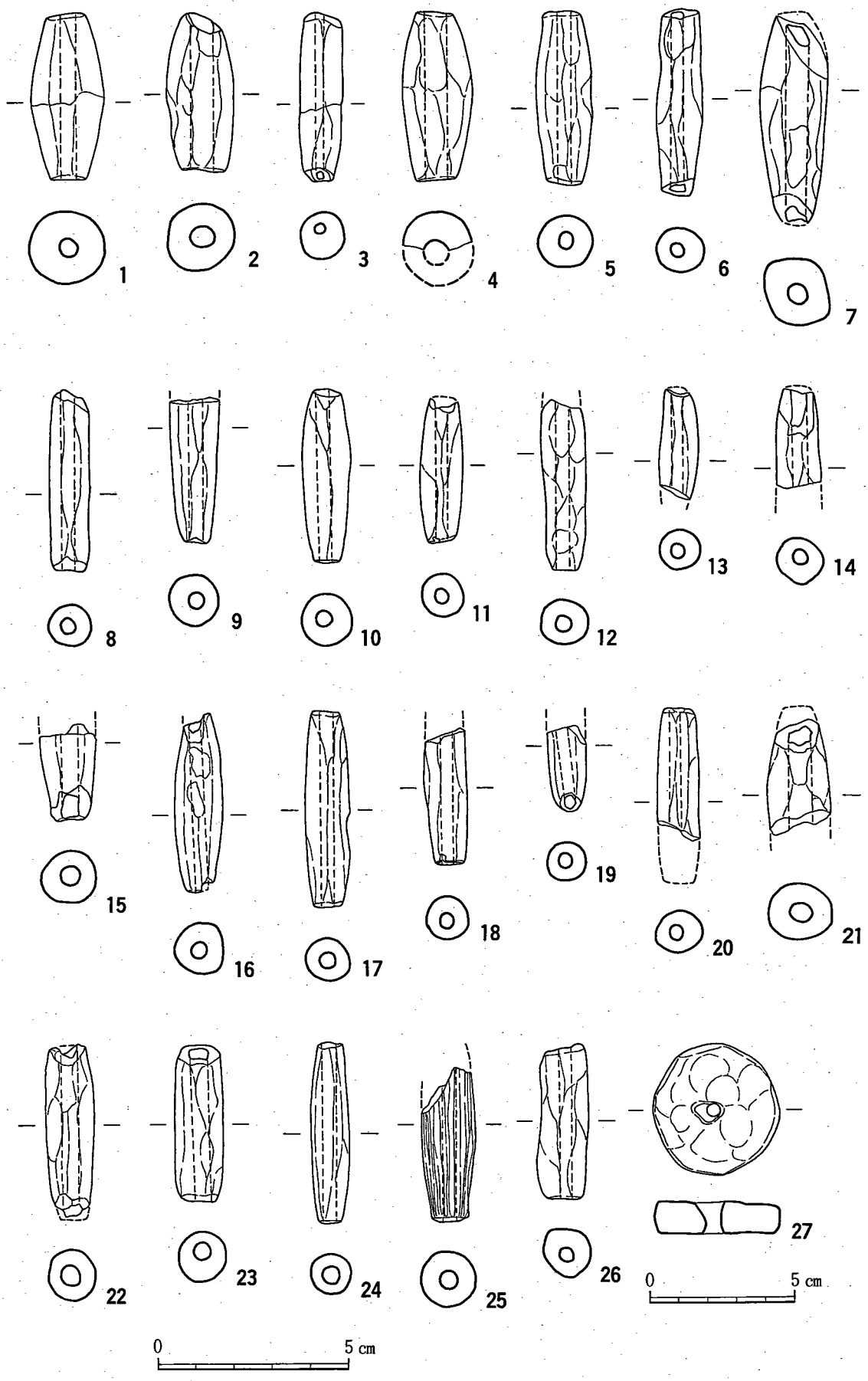
管状土錘（1～26）　中程が膨らむタイプと柱状のタイプの二者がある。調整は、25が全面ヘラミガキ調整である以外は全て指オサエ・指ナデ成形を行う。

紡錘車（27）　全面指ナデ・指オサエ成形を行う。

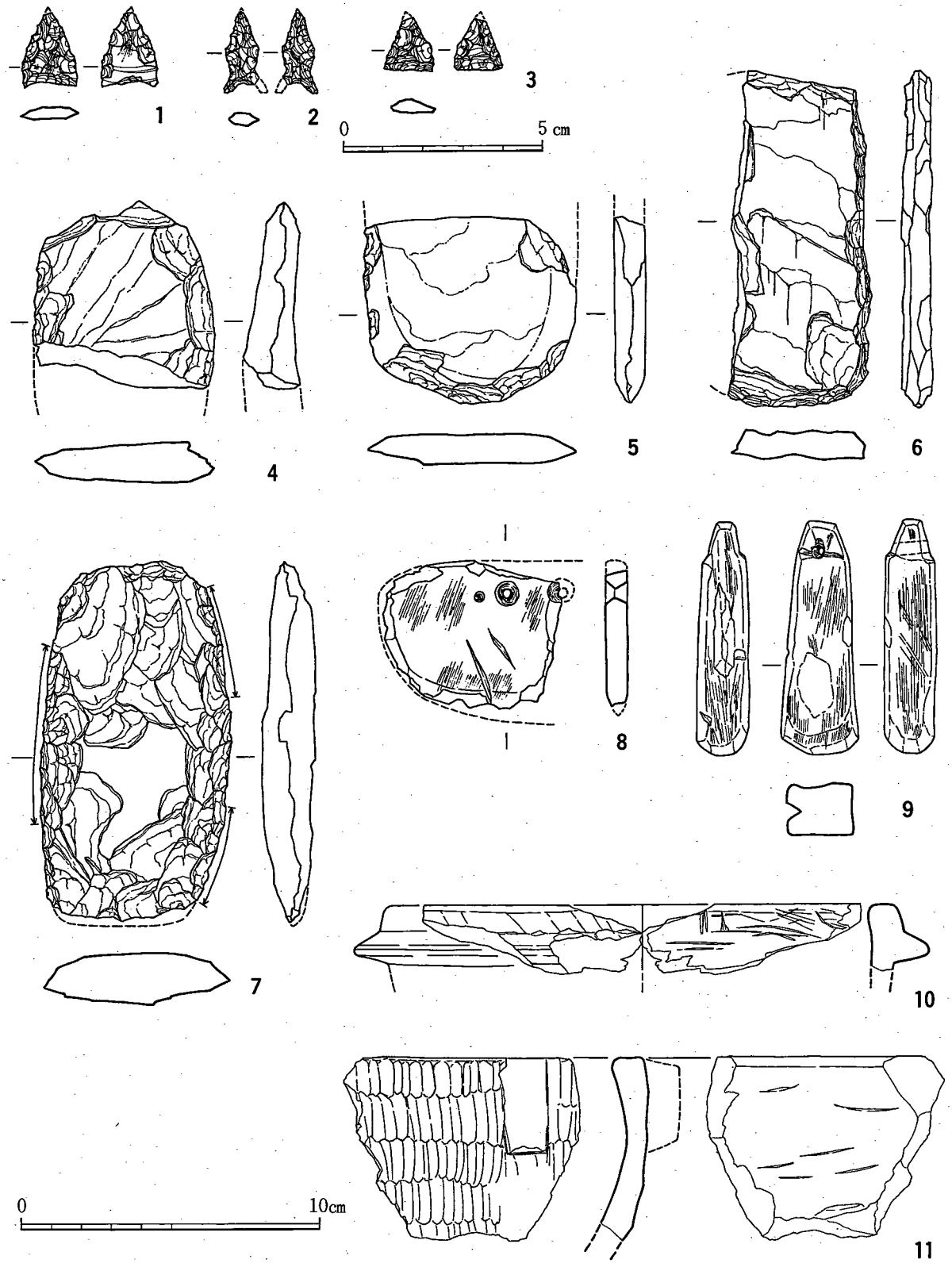
石製品（図版21、第61図）

打製石鏃（1～3）　1はやや縦長の三角形鏃で、先端を欠失する。黒色黒曜石製。裏面に主剥離面を残す。2は小型の五角形鏃で、先端及び基部を欠失する。姫島産黒曜石製。3は小型の三角形鏃で、先端を欠失する。3点とも剥離は比較的粗い。姫島産黒曜石製。

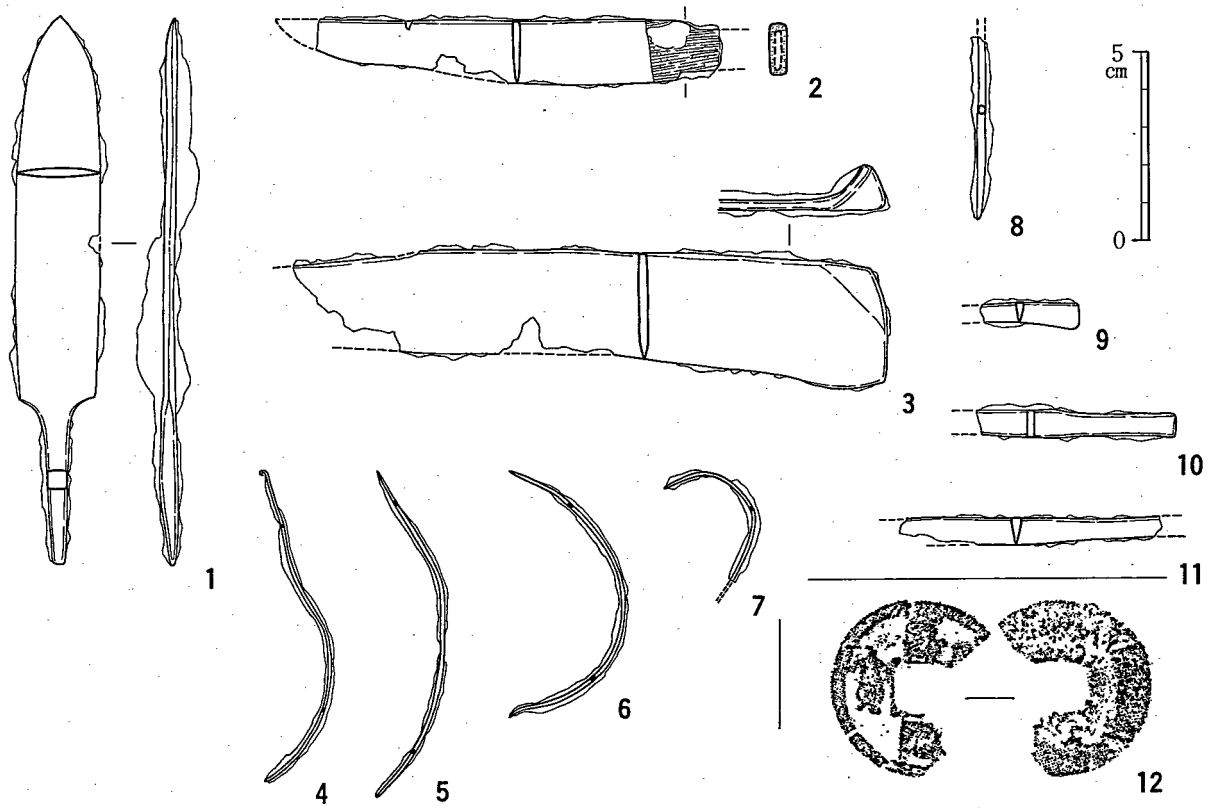
打製石斧（4～7）　4は安山岩製で、基部のみである。側縁のみ粗い剥離調整を施す。5は片岩製で、側縁のみ剥離調整を行う。全体的に風化が著しい。6は片岩製で、全側縁剥離調整を行う。



第60図　土製品実測図（1～26：2/3、27：1/2）



第61図　石製品実測図（1～3：2/3、4～11：1/2）



第62図　金属製品実測図（1～11：1/2，12：1/1）

先端は使用による刃部のつぶれが認められる。7は安山岩製で、丁寧な剥離調整を行う。使用により刃部を欠失し、両側縁につぶれが認められる。

磨製石包丁（8）　頁岩製の石包丁で、刃部は全て欠損している。穿孔途中の孔があるが、貫通していない。

滑石製権（9）　下方が撥形に広がる。側面に深い抉りがあるが、重量調整のためのものか。全面に擦痕が明瞭である。

滑石製石鍋（10・11）　10は鍔部が断面三角形となる。内外面に工具痕が認められる。全体的に風化が進む。11は断面方形の把手が二箇所につく石鍋片で、外面には工具痕が明瞭に認められる。

金属製品（図版22、第62図）

鉄鏃（1）　鏃身の長い長柳葉形の鏃である。身部の厚さは一定だが、茎部は中程が膨らむ。古墳時代前期。

鉄刀子（2）　切っ先及び柄部を欠失する。研ぎ減りにより刃部がやや内湾気味になる。柄部には木質が残る。

鉄鎌（3）　刃先を欠失する。刃部は研ぎ減りのためやや内湾気味になる。基部は上端のみ、通常とは反対方向に緩く折り曲げられる。

針金状鉄製品（4～7）　いずれも断面四角形で、両端部は細くなる。完形品についてのみ言えば、長さはいずれもほぼ9.5cm前後で統一されているようである。

不明鉄製品（8～11）　8は断面円形の棒状のもの。9は断面三角形で一見刃部を研ぎ出した様にみえるが、身が厚い。10は何かの茎部か。11は9と同様で断面三角形である。

銅銭（12）　全体の1/4程度を欠失する。「嘉」と「寶」しか判読できないが、嘉祐通寶か。

挿図番号	種　類	出土場所	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	胎　土	色　調	登録番号
60図-1	管状土錘	A地区ピット	4.3	1.9	0.4	12.1	微砂若干	茶色	22
2	管状土錘	A地区ピット	4.1	1.7	0.6	9.4	微砂若干	黄灰色	21
3	管状土錘	A地区ピット	4.4	1.1	0.2	5.9	微砂若干	黒褐色	20
4	管状土錘	A地区包含層	4.4	1.8	0.65	6	微砂若干	茶色	9
5	管状土錘	A地区包含層	4.5	1.4	0.35	8.5	精良	暗灰色	10
6	管状土錘	7号溝	4.8	1.2	0.3	6.1	精良	肌白色	26
7	管状土錘	B地区ピット	5.4	1.7	0.5	15.1	微砂やや多い	肌灰色	23
8	管状土錘	B地区包含層	4.7	1.1	0.35	4.8	微砂若干	黒灰色	15
9	管状土錘	B地区包含層	3.8	1.25	0.35	5.4	精良	明黄灰色	16
10	管状土錘	B地区包含層	4.5	1.3	0.4	6.5	精良	薄黄灰色	17
11	管状土錘	B地区包含層	3.75	1.1	0.3	3.6	微砂若干	暗黄灰色	18
12	管状土錘	B地区包含層	4.4	1.2	0.35	4.8	精良	黒灰色	14
13	管状土錘	B地区包含層	2.9	1	0.3	2.4	精良	薄黄灰色	12
14	管状土錘	B地区包含層	2.5	1.2	0.35	3.1	微砂わずか	黒褐色	19
15	管状土錘	B地区包含層	2.5	1.4	0.5	3.6	精良	黄灰白色	13
16	管状土錘	C地区包含層	4.65	1.2	0.4	6.4	精良	暗灰色	11
17	管状土錘	D地区包含層	5.1	1.2	0.35	6.3	微砂若干	黄茶色	8
18	管状土錘	D地区包含層	3.55	1.1	0.3	3.9	精良	茶色	6
19	管状土錘	D地区包含層	2.2	1	0.3	1.6	精良	黄茶色	7
20	管状土錘	D地区包含層	3.4	1.2	0.3	4	精良	黒色	1
21	管状土錘	D地区包含層	3	1.6	0.5	5.2	細砂若干	黄灰色	3
22	管状土錘	D地区包含層	4.4	1.2	0.45	5.8	微砂若干	灰白色	4
23	管状土錘	D地区包含層	4.05	1.2	0.4	5.7	微砂若干	肌灰色	5
24	管状土錘	D地区包含層	4.7	1	0.4	3.9	微砂若干	肌灰色	2
25	管状土錘	6号竪穴	4	1.4	0.4	6.6	精良	黒色	25
26	管状土錘	6号竪穴	4	1.2	0.35	5.9	微砂若干	灰色	24
27	土製紡錘車	B地区包含層	厚さ1.1	4.5	0.5	25.9	微砂若干	赤茶色	27
挿図番号	種　類	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　材		登録番号
61図-1	打製石鏃	D地区ピット	1.8	1.4	0.3	0.7	黒曜石		38
2	打製石鏃	2号竪穴住居跡	2	0.9	0.3	0.4	姫島産黒曜石		37
3	打製石鏃	6号竪穴	1.3	1.2	0.35	0.4	姫島産黒曜石		38
4	打製石斧	6号竪穴	6.2	6	1.7	71.2	安山岩		33
5	打製石斧	B地区包含層	6.2	7	1	74.3	片岩		31
6	打製石斧	6号竪穴	12.2	4.8	1	82.9	片岩		32
7	打製石斧	6号竪穴	12	6.4	1.8	144.5	安山岩		34
8	磨製石包丁	A地区ピット	5.9	4.9	0.7	31.5	頁岩		28
9	権	2号竪穴住居跡	7.8	2.6	1.7	58.1	滑石		30
挿図番号	種　類	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			登録番号
62図-1	鏃	7号溝	14.4	2.2	0.25	39.7			42
2	刀子	2号竪穴住居跡	10.7	1.7	0.2	19.2			39
3	鎌	2号竪穴住居跡	15.8	2.9	0.2	42.4			40
4	針金状鉄製品	B地区包含層	9.2	0.1	0.1	2.3			46
5	針金状鉄製品	B地区包含層	9.4	0.1	0.1	1.7			47
6	針金状鉄製品	B地区包含層	9.5	0.1	0.1	2.6			48
7	針金状鉄製品	B地区包含層	4.6	0.1	0.1	0.9			49
8	不明鉄製品	6号竪穴	4.8	径0.2		1.7			45
9	不明鉄製品	B地区包含層	4.8	0.7	0.2	1.7			43
10	不明鉄製品	B地区包含層	5.3	0.8	0.2	5.4			44
11	不明鉄製品	2号竪穴住居跡	6.9	0.8	0.25	3.1			41
12	古銭	B地区包含層	径2.3	孔辺長0.6	0.1	0.8			50

第3表　土製品・石製品・金属製品観察表

第4章　おわりに

今回の百留居屋敷遺跡の調査では、弥生時代終末から中・近世にかけての竪穴住居跡、竪穴、土坑、溝、暗渠、石列、小竪穴式石室、壺棺等、集落・埋葬関連の遺構を検出した。概して遺構の遺存状態が悪く、また遺物も混入が多く良好な出土状態であるとは言い難いが、各時代にわたる遺構・遺物について気付いた点を述べて、まとめとしたい。

古墳時代以前

遺構は確認できなかったが、包含層や遺構覆土から黒川式期と刻目突帯文期の土器が出土している。山国川流域の自然堤防上に立地する遺跡では、大平村上唐原遺跡(1)・三光村佐知遺跡(2)で縄文時代後期の竪穴住居跡が検出されている。晩期の集落は確認されていないものの大平村郷ヶ原遺跡(3)・下唐原宮園遺跡(4)等で晩期・弥生時代早期の土器が出土しており、後期に続いて晩期以降も人々がこの一帯で生活を営んでいたことが窺える。

続く弥生時代前期の遺物は全く見あたらない。中期のものとしては、中期初頭の甕が出土した3号竪穴以外には当該期の遺構は見あたらない。包含層等からは中期初頭～前半の遺物が若干出土しているが、この中でC地区包含層出土の台付鉢（第31図-1・2）は、豊後地域を中心に広く分布しており、この山国川流域は豊前地域の様相を示すとともに、豊後地域の弥生文化圏の北限としての様相も合わせ持っていると言えるだろう。

弥生時代後期終末の遺構として4号竪穴住居跡が挙げられる。住居跡は大きく削平されるが、他遺跡の類例から推察すると張り出し部を持つ方形2主柱プランとなるであろう。出土遺物（第36図）の中で、1は不規則ではあるが頚部に西部瀬戸内に広く認められる列点文を巡らしている点が注目される。

古墳時代

布留（古）段階の遺構として、6号竪穴が挙げられる。出土した土器（第44・45図）は大半が在地系のものであるが、畿内系と言えるものがわずかではあるが含まれている。また1号壺棺墓に使用された大型壺は、口縁部が直立し、頚部があまり締まらない点を考慮すればこの時期のものとみて良いだろう。続く布留（中）～（新）段階の遺構には4号竪穴が挙げられる。土器は弥生時代後期終末～布留（新）段階のものが出土しているが、主体となるのは布留（新）段階のものである。またこれ以外にも布留（新）段階のものとして、1号竪穴住居跡、5号竪穴、11号土坑、3号溝出土土器が挙げられる。全期間を通してこの時期の遺構が最も多く、この遺跡での最盛期と言える。

集落関連の遺構は、この布留（新）の時期を境に断絶する。その後、この地は墓地として選定されており、1・2号小竪穴式石室が造営されるが、副葬品が皆無なため時期を決定出来ない。

奈良時代

奈良時代に属する遺構として2号竪穴住居跡が挙げられる。出土した遺物から8世紀後半に比定されるが、これは竪穴住居跡の規模・プランとも時期的に矛盾しない。この住居跡の他には当該期の顕著な遺構は無く1棟のみ単独で検出しているが、地形的要因から見ても、当該期の集落がこの住居跡の北側に広がっている可能性が高い。

出土土器（第34図）のうち、4の高坏は太宰府からの搬入品である。それ以外は、明らかな混入品を除いて、在地系のもので占められている。また、当住居跡覆土出土の権状石製品は通常官衙あ

るいはそれに近いクラスの遺跡から出土するものだが[5]、一般的な竪穴住居跡からの出土という点で特筆に値する。

平安時代以降

平安時代～中世の顕著な遺構は確認されていないが、包含層やピット、他時期の遺構等から12世紀～中世後期の遺物が出土している。この時期にも集落が形成されていた事を示すものであり、また付近に同時期の集落広がっていたことも類推させる。また近世の遺構として、１・２号暗渠、１号石列、１・17・18号土坑がある。暗渠は排水施設、石列は区画施設、土坑は廃棄土坑として恐らく使用されており、家屋が営まれていたことは容易に推察できる。同じ大平村大字上唐原に位置する上唐原稲元屋敷遺跡[6]では、山国川の自然堤防上に立地するという類似した条件のもとで、やはり近世の家屋に関連する遺構・遺物を多く検出している。山国川流域での近世集落の成立過程を類推する上で、良好な比較材料となる。

今回の調査で、時期的に粗密の差はあるものの、縄文時代晩期から近世にいたるまでの遺構・遺物を検出することが出来た。このことは山国川の自然堤防上に立地するこの地が、居住地または墓地として好条件に恵まれていた事を示している。また各時期の出土遺物に外来系遺物を含んでいることは、他地域との交流が盛んであったことを表すとともに、当地域が環瀬戸内海文化圏の一部としての位置づけが可能な事を物語っている。

註

1　福岡県教育委員会『上唐原遺跡Ⅰ』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第５集　1995
2　大分県教育委員会『佐知遺跡』大分県文化財調査報告書第81輯　1989
3　福岡県教育委員会『郷ヶ原遺跡』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第10集　1998
4　福岡県教育委員会『下唐原宮園遺跡』一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告２　1998
5　吉村　靖徳『権衡に関する一考察』九州歴史資料館研究論集20　1995を参考にした。
6　福岡県教育委員会『上唐原稲元屋敷』一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告１　1997

地区名	調査時番号	報告番号
A 地区	土壙 1	1 号土坑
	土壙20	2 号土坑
	土壙21	3 号土坑
	土壙22	4 号土坑
	土壙23	5 号土坑
	土壙24	6 号土坑
	A 地区包含層・遺構面	A 地区包含層
B 地区	住居 1	1 号竪穴住居跡
	P 2 ・13	7 号土坑
	P12	8 号土坑
	暗渠 1	1 号暗渠
	暗渠 2	2 号暗渠
	溝15	1 号溝
	溝16	2 号溝
	溝 1	3 号溝
	溝17	4 号溝
	溝 2	5 号溝
	溝 3	6 号溝
	溝 4	7 号溝
	B 地区包含層・遺構面	B 地区包含層
C 地区	竪穴 8	1 号竪穴
	竪穴 9	2 号竪穴
	土壙25	9 号土坑
	土壙26	10号土坑
	溝18	8 号溝
	溝19	9 号溝
	溝20	10号溝
	石列 1	1 号石列

地区名	調査時番号	報告番号
	C 地区包含層・遺構面	C 地区包含層
D 地区	住居 2	2 号竪穴住居跡
	住居 3	3 号竪穴住居跡
	住居 4	4 号竪穴住居跡
	住居 6	5 号竪穴住居跡
	住居 7	6 号竪穴住居跡
	住居 5 ・竪穴 3	3 号竪穴
	竪穴 1	4 号竪穴
	竪穴 2	5 号竪穴
	暗茶灰色土	6 号竪穴
	竪穴 4	7 号竪穴
	土壙27	11号土坑
	土壙 6	12号土坑
	土壙 3	13号土坑
	土壙 4	14号土坑
	土壙 5	15号土坑
	土壙 6	16号土坑
	近世 1	17号土坑
	近世 2	18号土坑
	P41	19号土坑
	溝18	11号溝
	溝19	12号溝
	溝20	13号溝
	溝21	14号溝
	土壙墓 1	1 号小竪穴式石室
	土壙墓 2	2 号小竪穴式石室
	K 1	1 号壺棺墓
	D 地区包含層・遺構面	D 地区包含層

第 4 表　新旧番号対応表

図　　版

1．百留居屋敷遺跡より八面山を望む(空中写真)

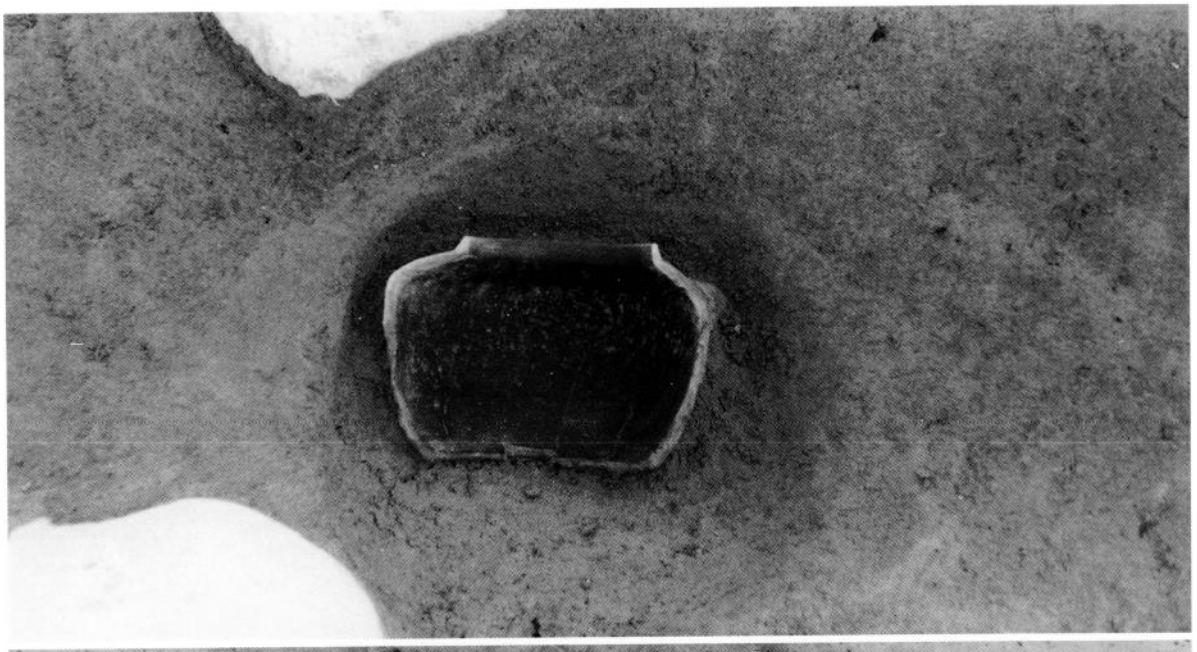
2．百留居屋敷遺跡より中津平野を望む(空中写真)

図版　2

1．A地区全景
（東から）

2．A地区全景
（西から）

3．1号土坑
（北から）



1.ピット土器
出土状態
（西から）

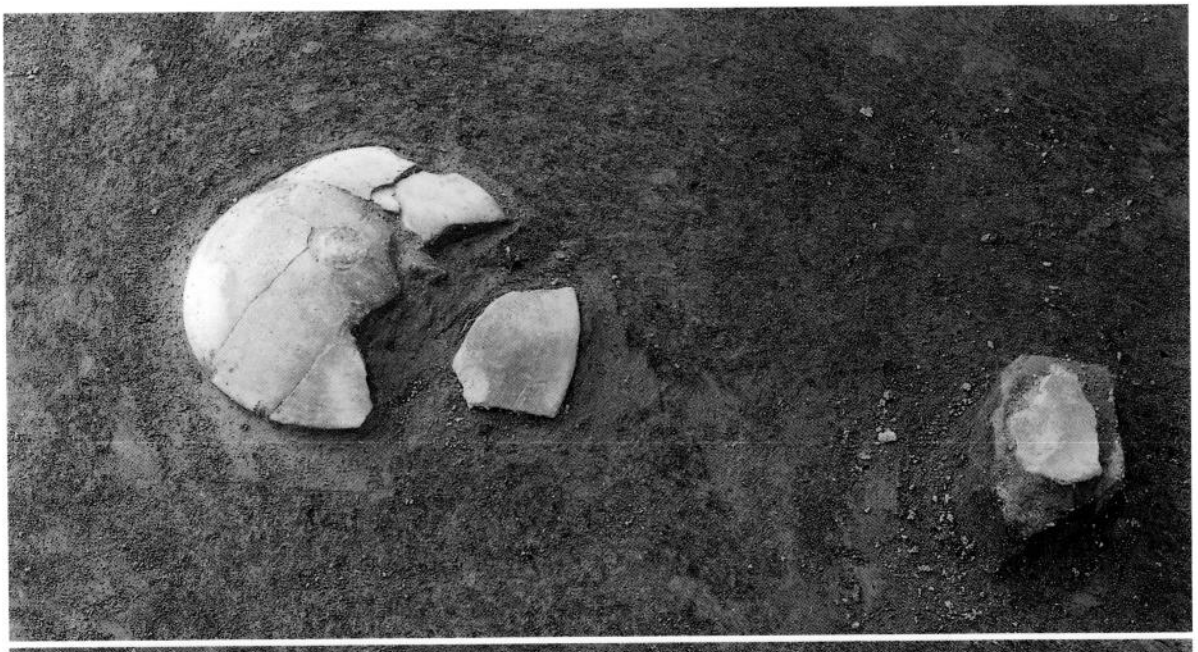
2.包含層土器
出土状態
（東から）

3.包含層土器
出土状態
（西から）

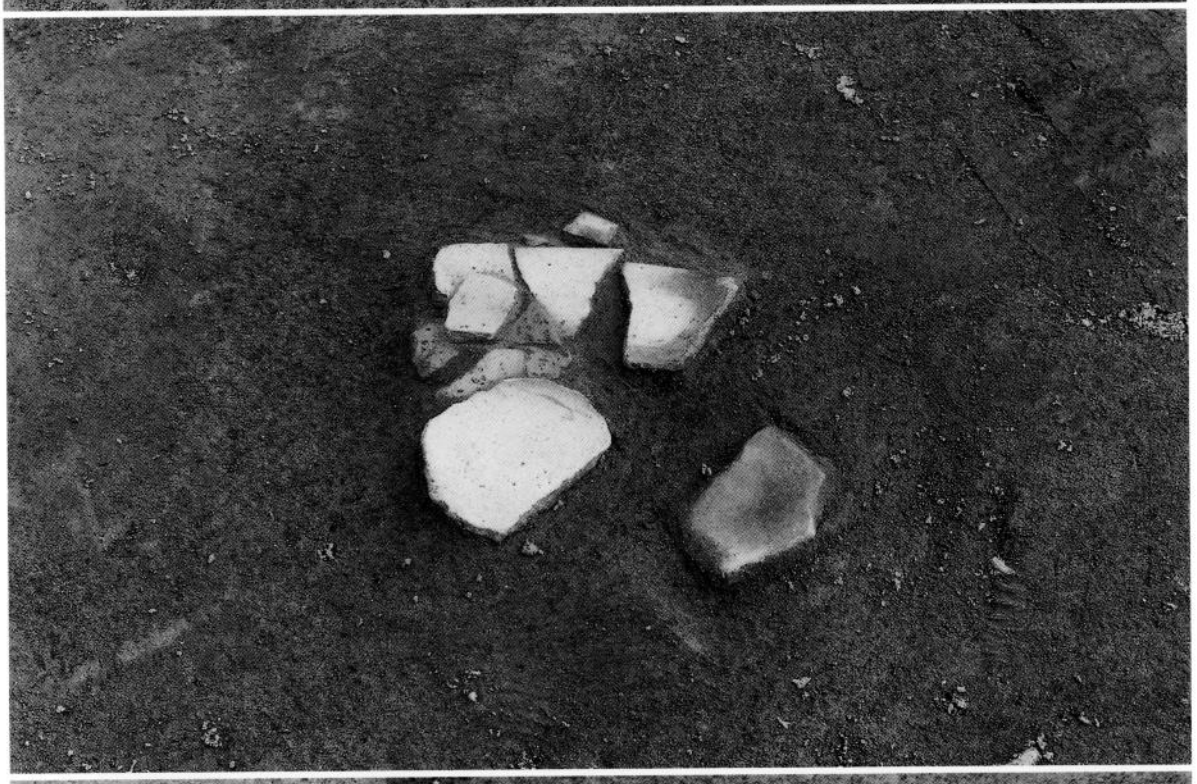
1．B・C地区
全景
（西から）

2．1号竪穴
住居跡
（空中写真）

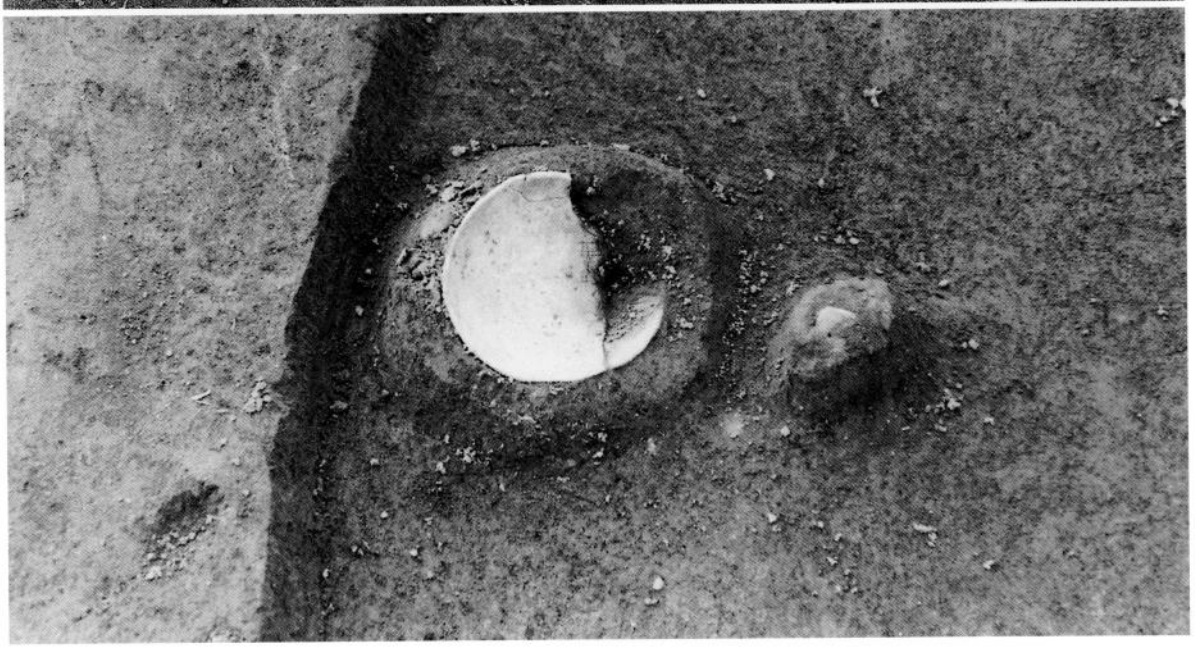
3．1号竪穴
住居跡
（北から）



1．1号竪穴
住居跡
土器出土
状態
（南から）



2．1号竪穴
住居跡
土器出土
状態
（南から）



3．1号竪穴
住居跡
土器出土
状態
（南から）

1．2号暗渠
（南から）

2．C地区全景
（東から）

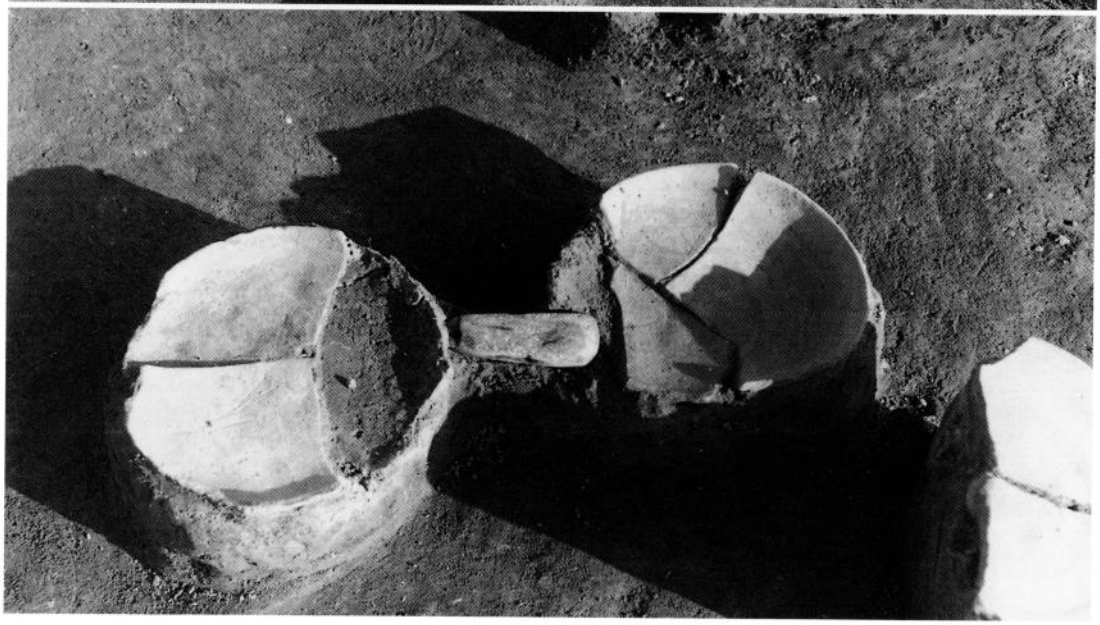
3．C地区西半部
（東から）

1．D地区全景(空中写真)

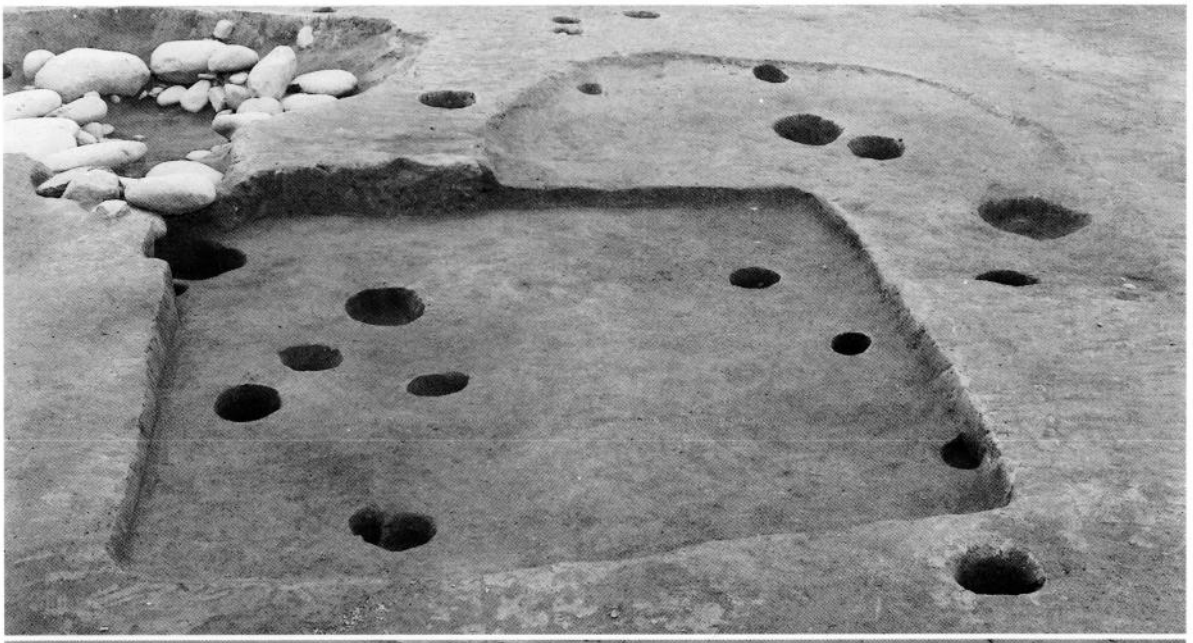
2．D地区全景(空中写真)

1．2号竪穴住居跡
（北から）

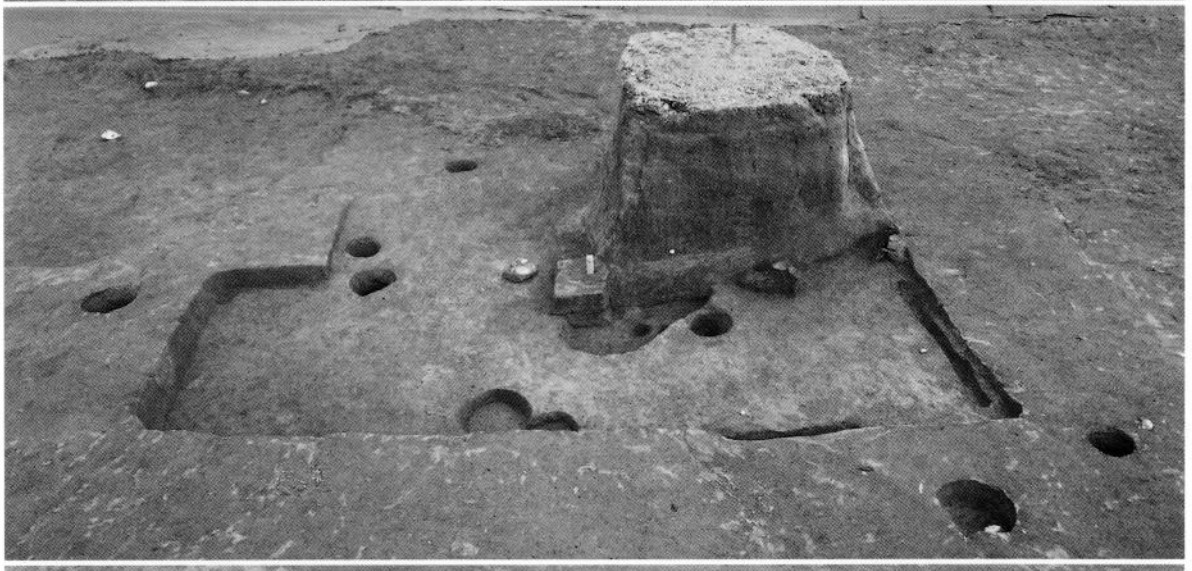
2．2号竪穴住居跡
カマド（北から）



3．2号竪穴住居跡
権出土状態（北から）



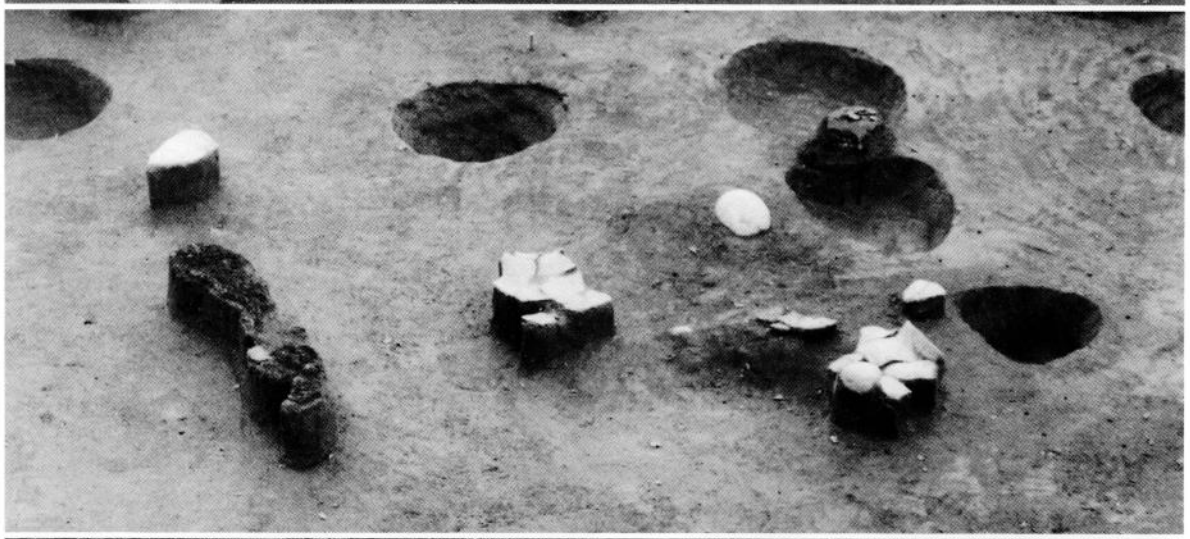
1．3号竪穴
住居跡
（南から）



2．4号竪穴
住居跡
（北から）

3．5号竪穴
住居跡
（南から）

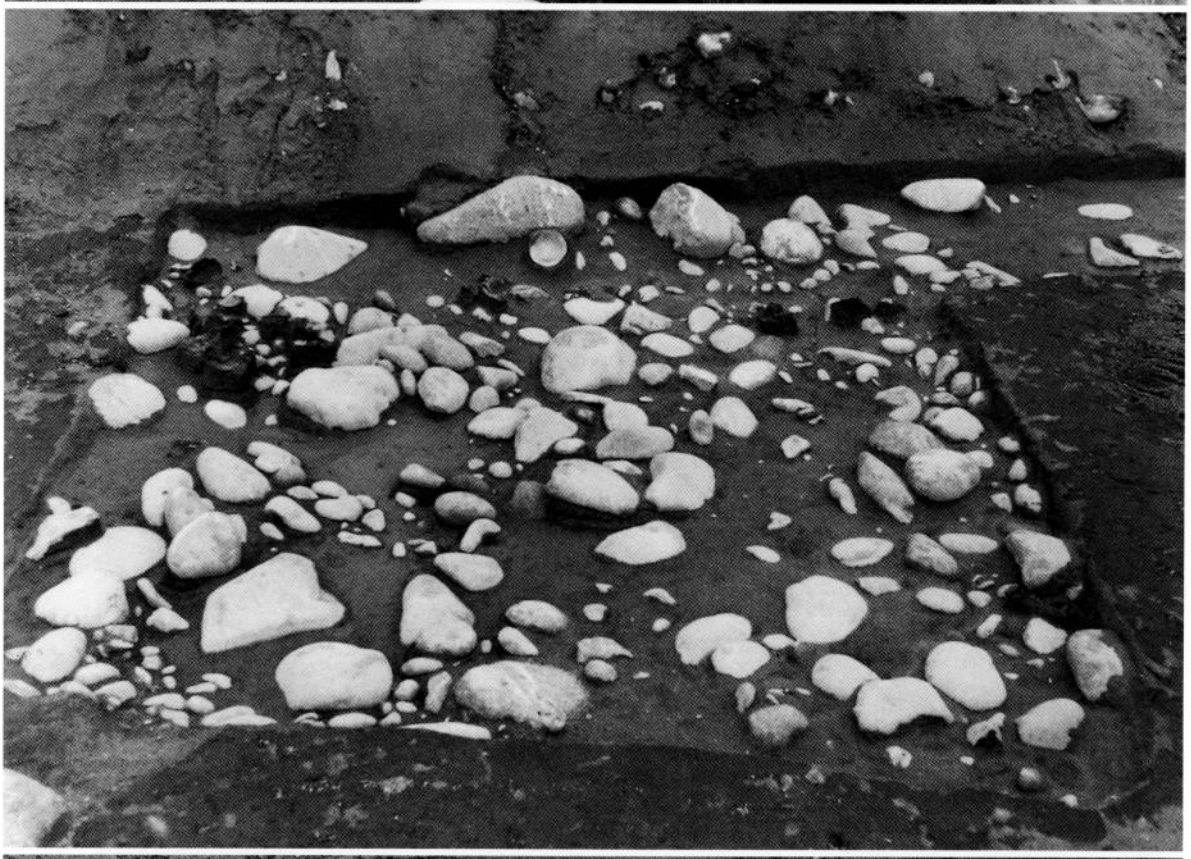
1．6号竪穴
住居跡
（南から）



2．6号竪穴
住居跡
遺物出土
状態
（南から）

3．4号竪穴
（西から）

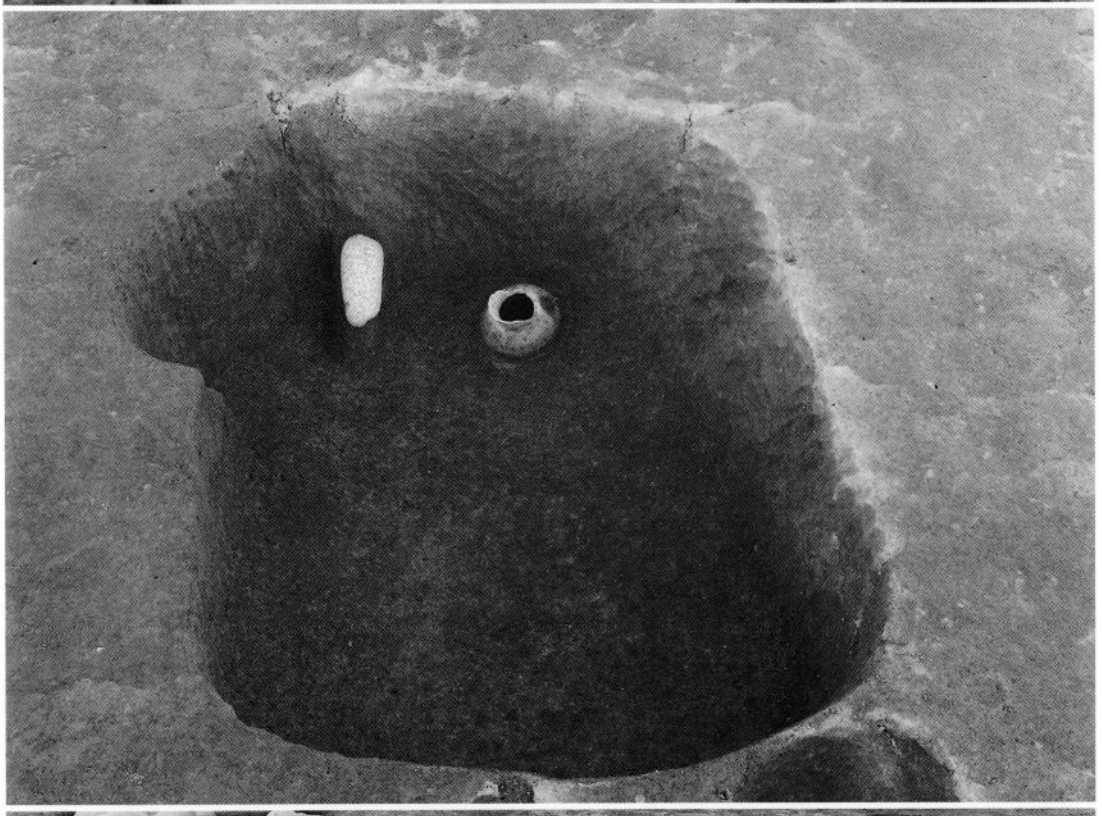
1．4 号竪穴
遺物出土
状態
（西から）



2．5 号竪穴
（北から）

3．5 号竪穴
遺物出土
状態
（北から）

1．7号竪穴
（西から）

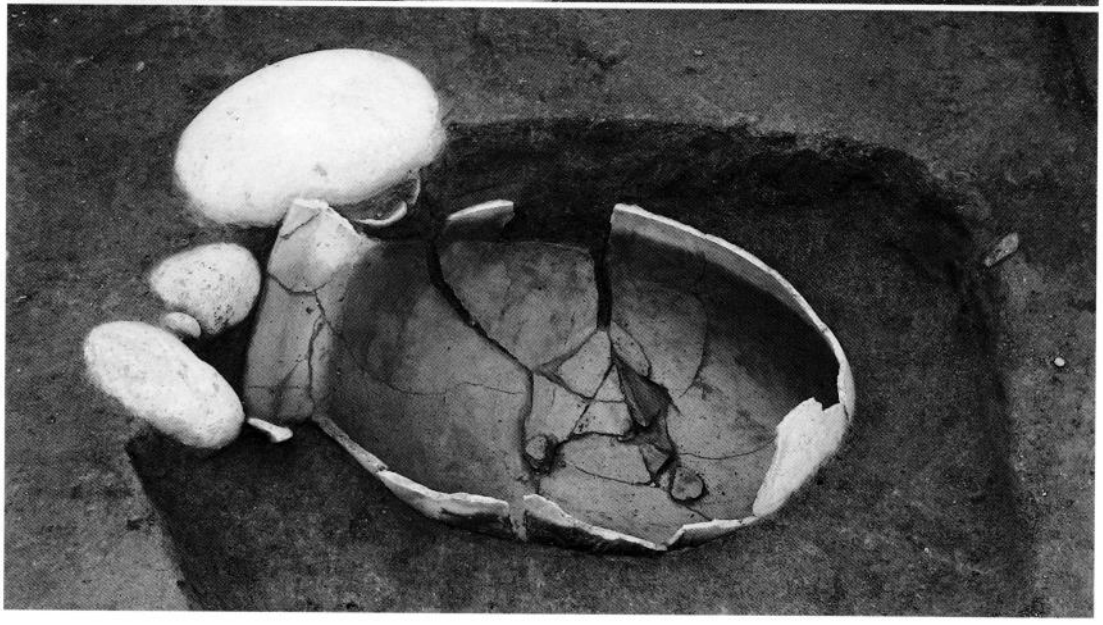


2．11号土坑
（北から）

3．1号小竪穴式石室
（南から）

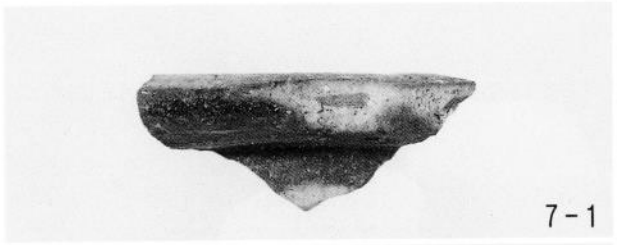
1．2号小竪穴式石室
（北から）

2．2号小竪穴式石室
（礫除去後、北から）



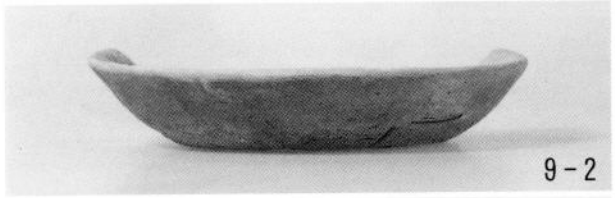
3．1号壷棺墓
（南から）

図版　14


7－1

7－1

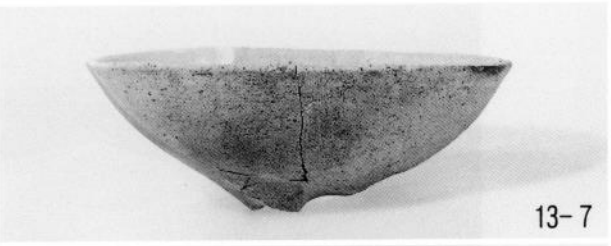
9－1


9－2

9－7

11－3

13－6


13－7

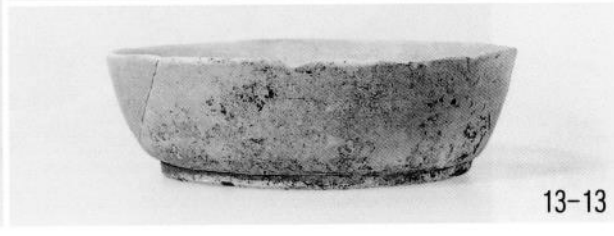
13－8

13－9

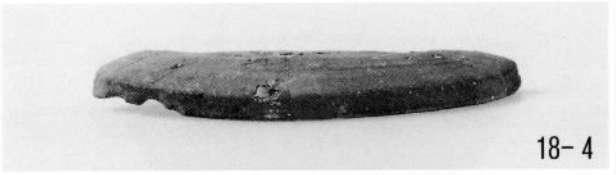
13－10

13－11

13－12


13－13

A・B地区出土土器


18-4

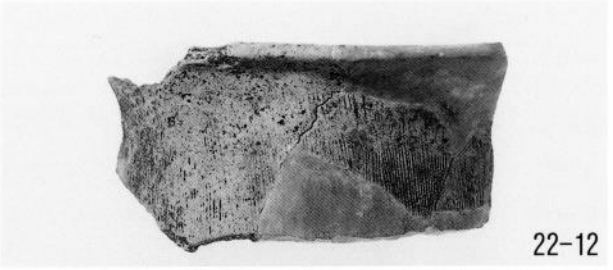
20-2

20-4

20-5

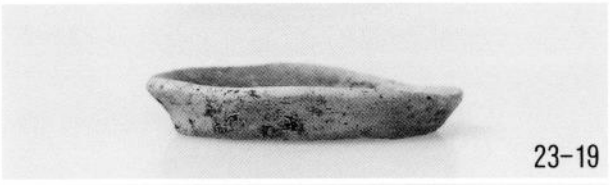
21-3

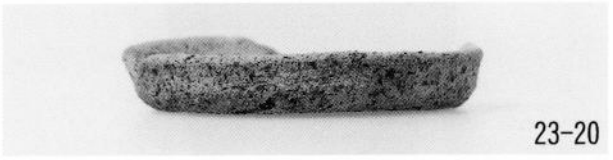
22-8

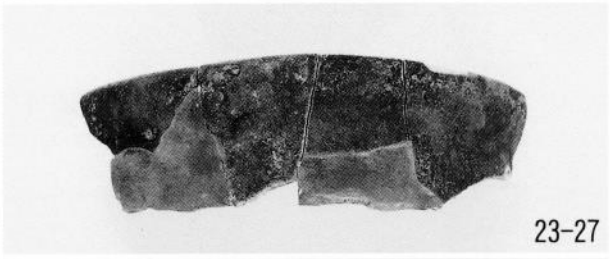

22-12

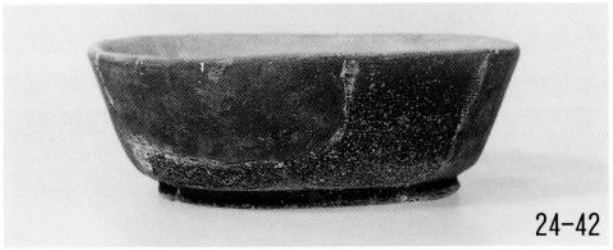
22-16

23-18


23-19


23-20


23-27


24-42

25-52

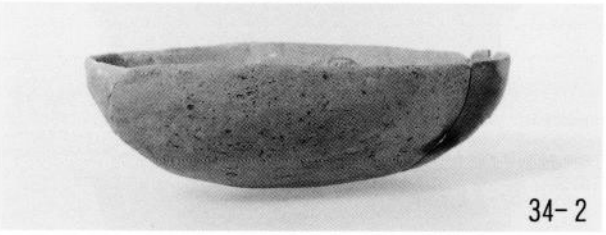
25-54

B地区出土土器

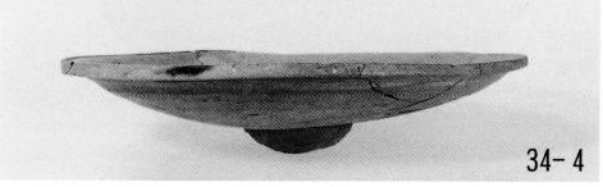
31-1

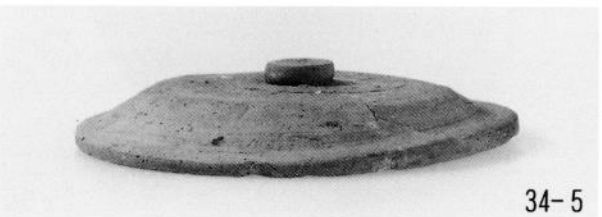
31-2

34-1

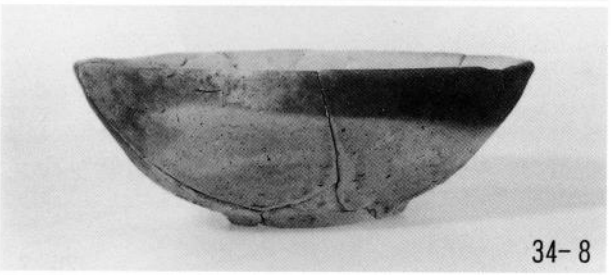

34-2

34-3


34-4


34-5

34-7


34-8

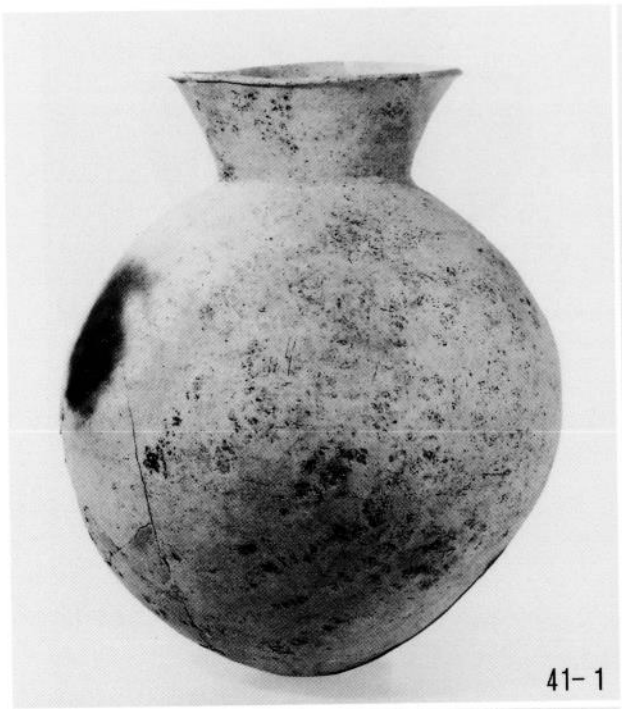
36-1

36-3

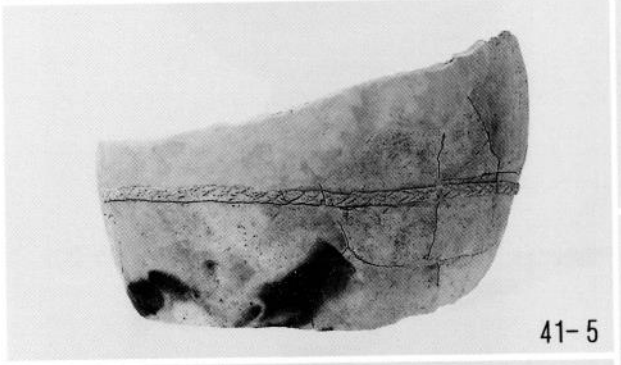
36-4

36-6

C・D地区出土土器

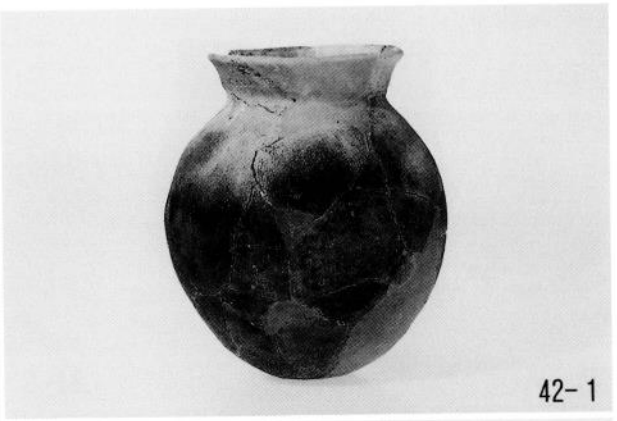

41-1

41-3

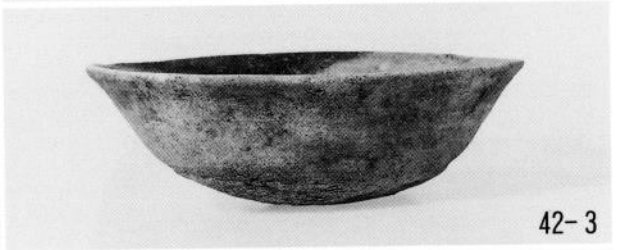

41-5

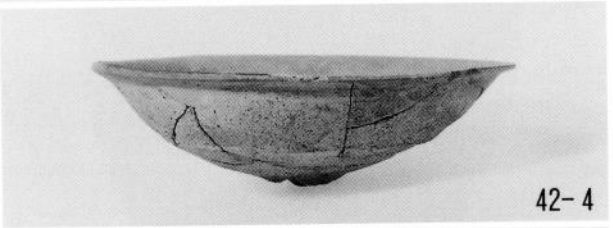
41-10

41-11


42-1

42-2


42-3


42-4

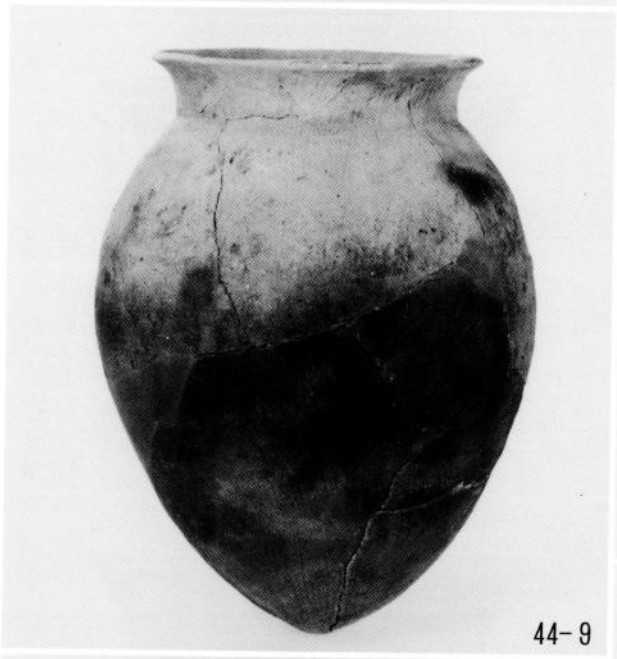
44-1

44-2

D地区出土土器①

44-7

44-8


44-9

44-10

44-11

44-12

44-13

45-16

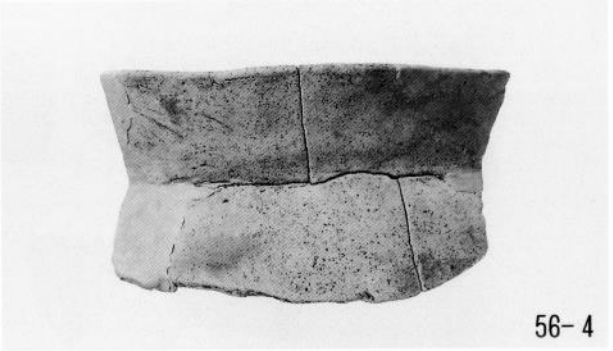
45-20

45-21

45-22

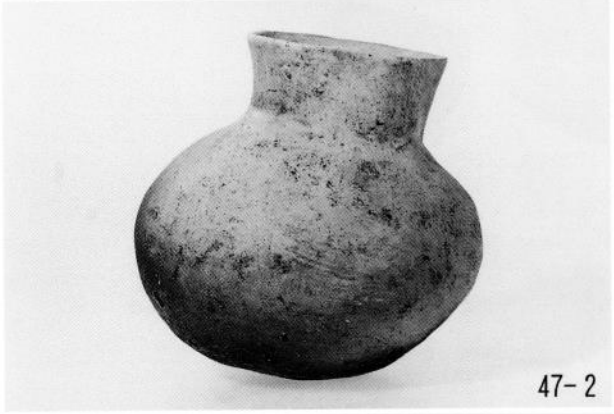
D地区出土土器②

45-23


56-4

45-27

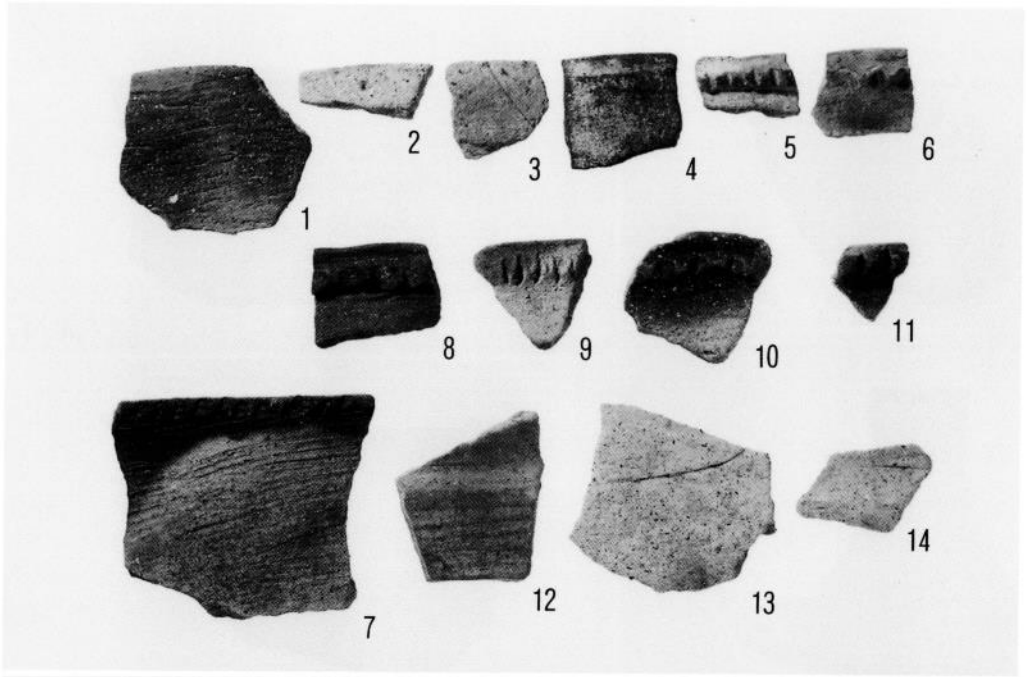
56-5

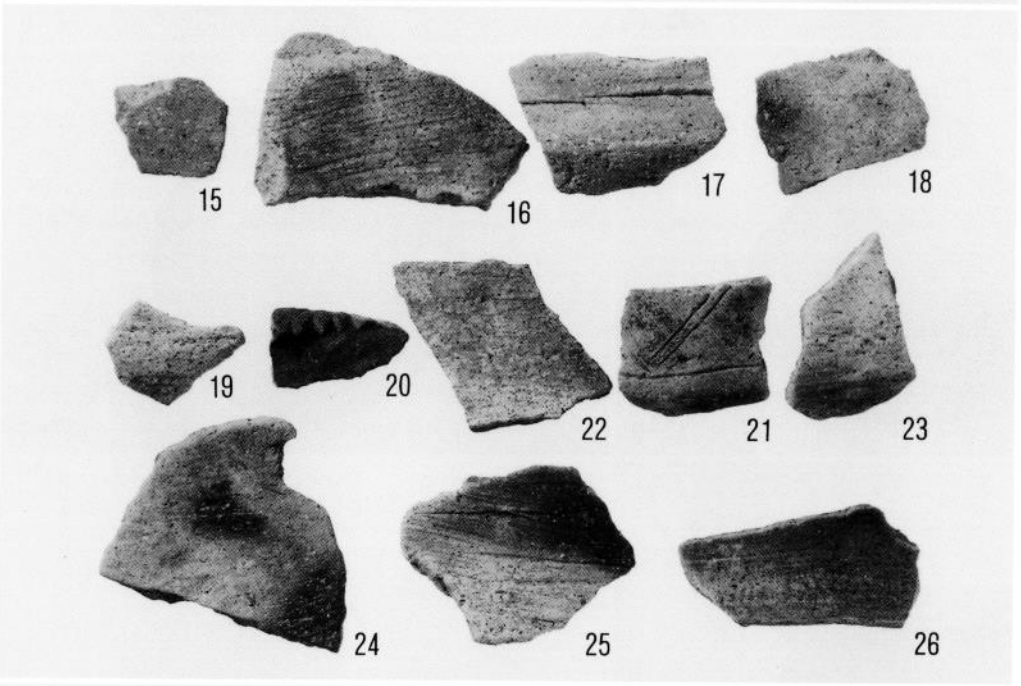

47-2

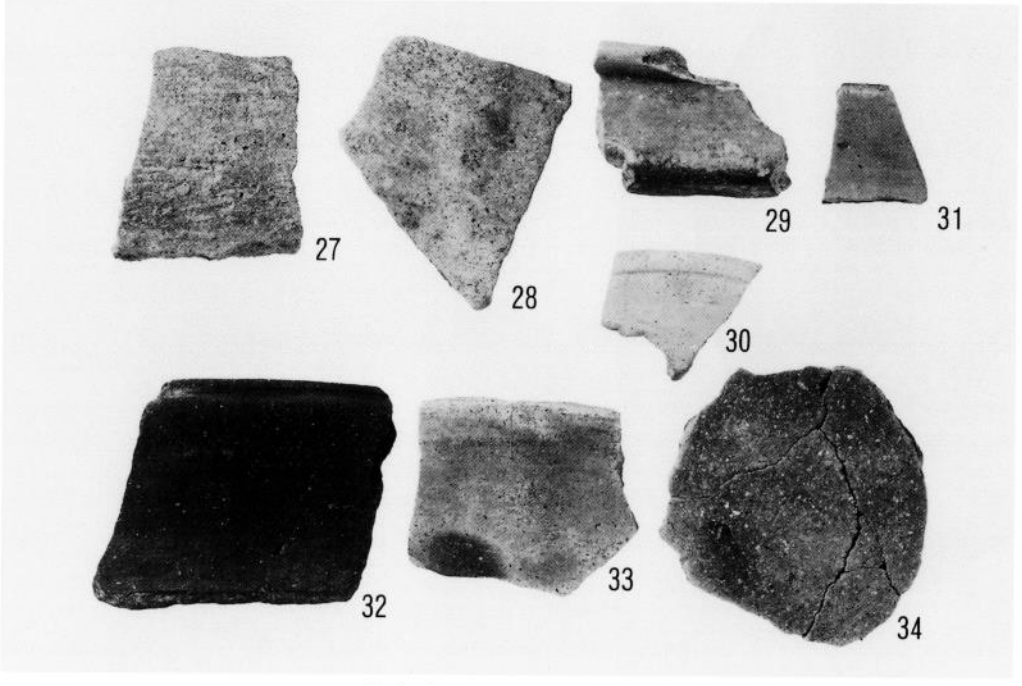
57-1

55-1

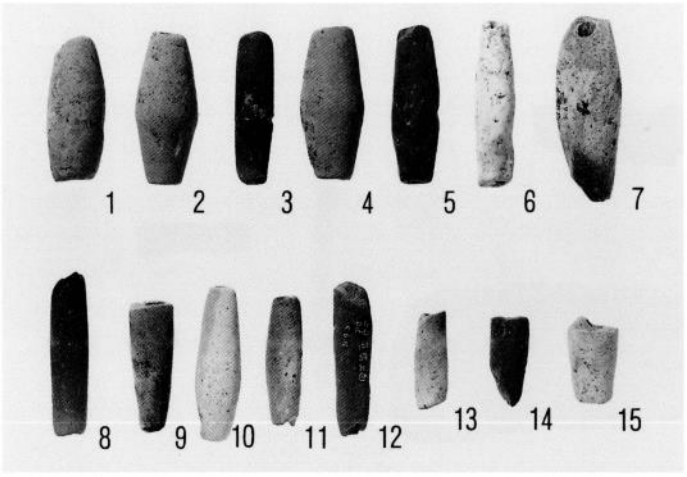
D地区出土土器③

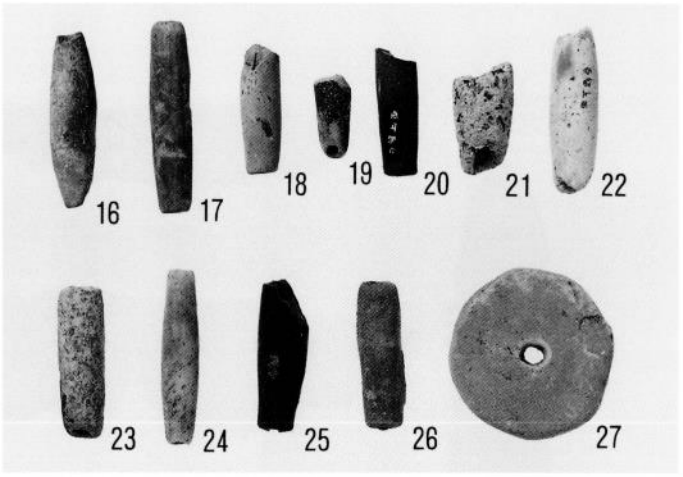

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14

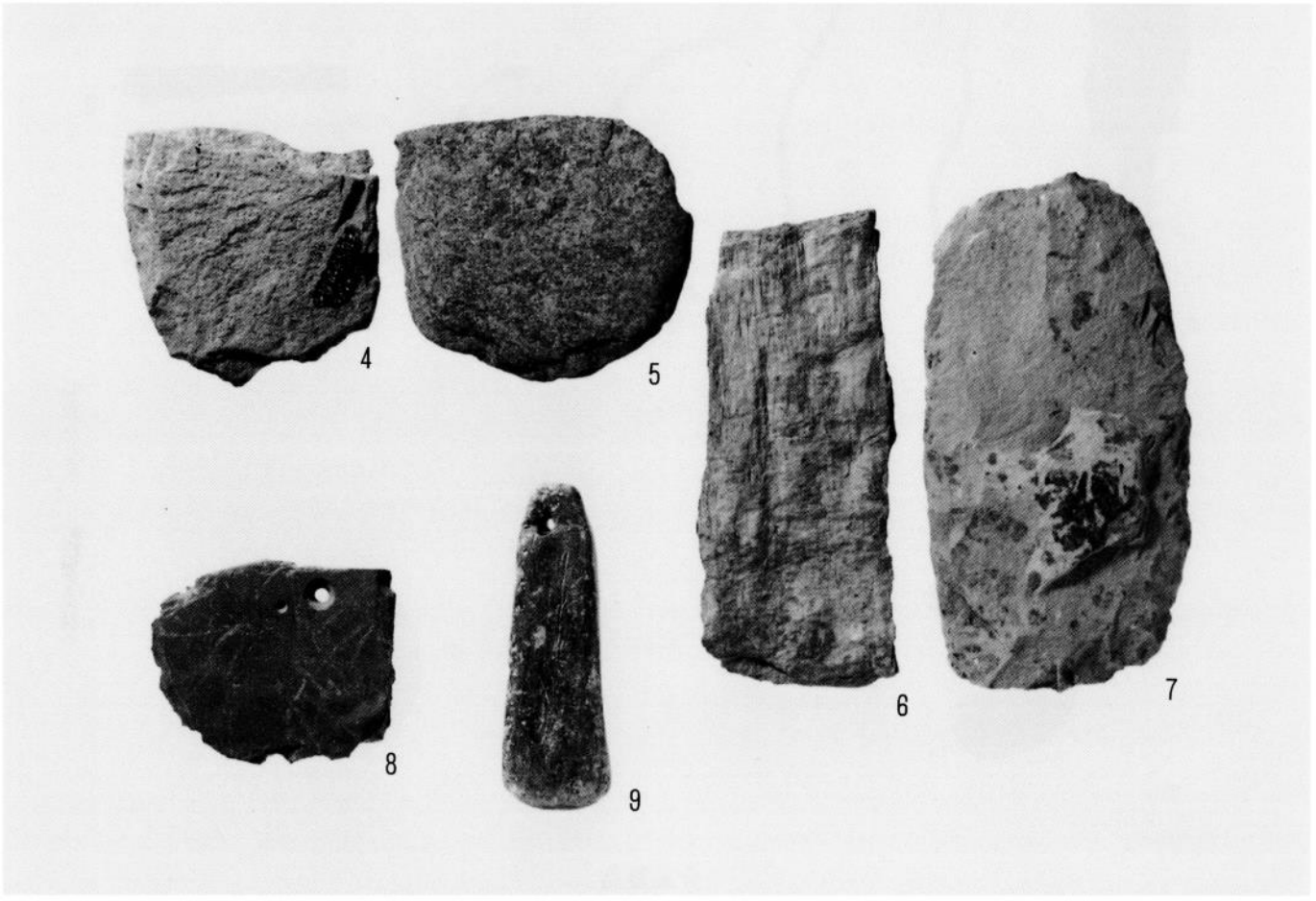

15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26

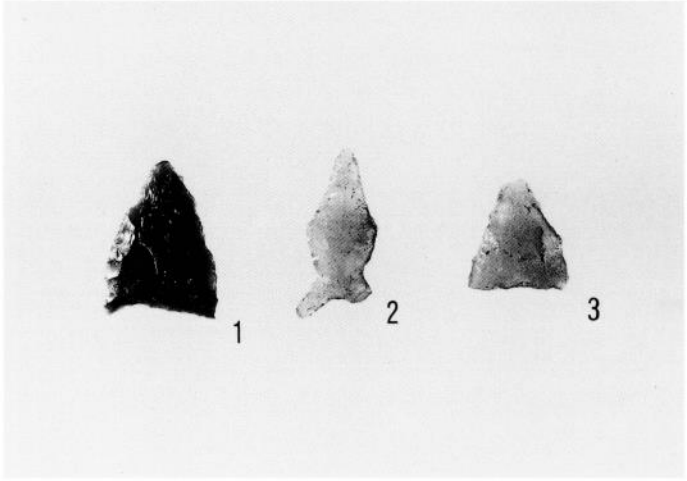

27
28
29
30
31
32
33
34

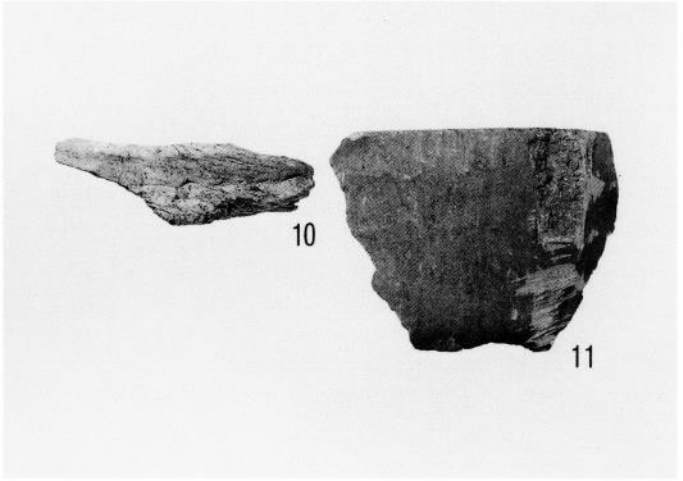
縄文晩期・弥生早期土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15


16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

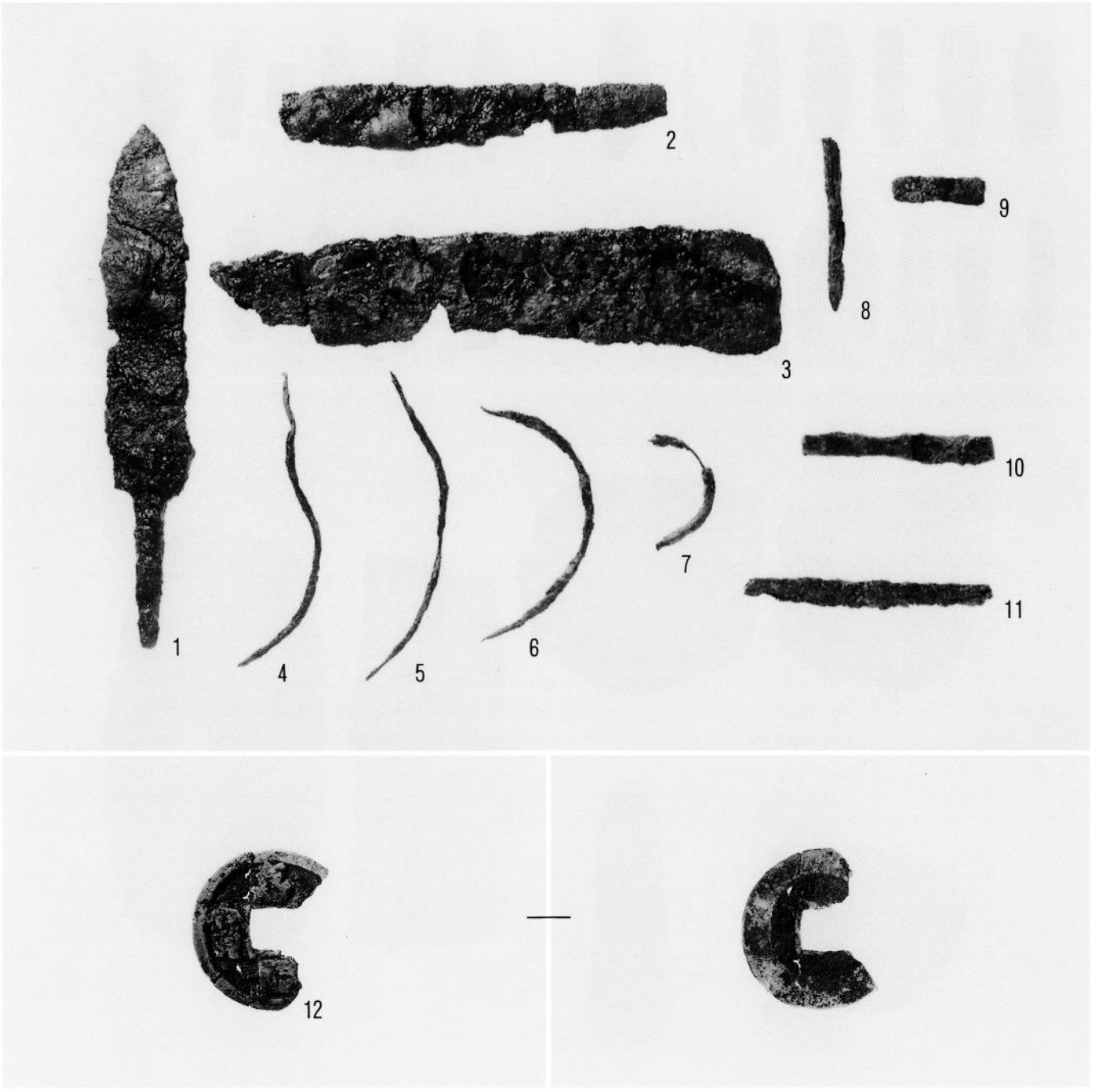

4
5
6
7
8
9


1
2
3


10
11

土製品・石製品

図版　22



金属製品

報告書抄録

ふりがな	ひゃくどみいやしきいせき
書名	百留居屋敷遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	3
編著者名	吉田東明
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号
発行年月日	西暦　1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ひゃくどみいやしきいせき 百留居屋敷遺跡	ふくおかけんちくじょうぐん 福岡県築上郡 たいへいむらおおあざひゃくどみ 大平村大字百留 あざいやしきほか 字居屋敷　他	40645		33° 32′ 30″	131° 10′ 55″	050513 ～ 060228	5,690m²	一級河川 山国川築堤 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
百留居屋敷遺跡	集落 墓地	縄文時代		縄文土器、石器	
		弥生時代	土坑	弥生土器、石器、土製品	
		古墳時代	竪穴住居跡、竪穴、土坑、溝、小竪穴式石室、壺棺墓	土師器、須恵器、土製品、石器、鉄器	
		奈良時代	竪穴住居跡	土師器、須恵器、石製権、鉄器	
		近世	土坑、溝、暗渠、石列		

Hyakudomi－Iyashiki Site

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 10	登録番号 17

一級河川山国川築堤改修関係埋蔵文化財調査報告

第　３　集

百留居屋敷遺跡

平成11年３月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７番７号

印　刷　株式会社　マツモト
北九州市門司区社ノ木1-2-1